
1000人斬りのフェルダ

ロキソニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1000人斬りのフェルダ

【Nコード】

N7689R

【作者名】

ロキソニー

【あらすじ】

次期国王となる15歳の王子フェルダ。容姿端麗、頭脳明晰、城内や民からの信頼も厚く、剣さばきも一振りで100をなぎ倒す実力の持ち主。その彼が愛するは、実の姉エレナただ一人

プロローグ（前書き）

この小説は現実社会において反社会的要素（近親相姦）が含まれております。

苦手な方、二次元と現実の区別のつかない方は閲覧をご遠慮していただきますようお願い申し上げます。

ブローグ

乾いた強い風は少年の踏みゆく荒野の砂埃を巻き上げた。

少年を囲む群衆の1人が、手に滲む汗で剣が滑らないように強く握り直した。

自分の姿は今、この少年の眼中には映っていない。何故なら俺は奴の背後に位置しているからだ。

誰も、少年も動かない。風だけがこの戦況に我関せず潜り抜けてゆく。

俺は考えていた。

今ならコイツを打ち取れるのではないか。奴と俺の距離は10歩程度。走り近づいて剣を振り上げ下ろす。いや、しかし確実に仕留めるならば奴と向き合っている側の誰かが動いて奴の隙を作ってくれば俺が成功する確率も格段に上がる。

誰か動け。

誰か動くんだ。

こんな少年1人に100人が周りを囲っているんだ。何を恐れる必要がある。

恐れ？そうだ、我らは精鋭部隊。こんなクソガキ一匹を恐れるなど精鋭の名が廃る。^{すた}

男は震える息を吸い込みゆっくりと吐いた。

殺^やれる！

足が荒野の砂利を踏み鳴らした。

男は気付かなかった。その時同時に風が止んだことを。

男が叫びながら少年に斬りかかる3歩手前。少年と向き合う側にいた兵士は見た。

少年が口端を吊り上げたその瞬間を。

その後どうなったのかは誰も知らない。

いや、荒野の空で餌を狙って浮遊していた何羽もの怪鳥だけは知っている。

荒野に1人佇み、やがて静かに去って行った少年がいたことを。

城の中庭の木々や花々は薄桃に色付き満開に咲いていた。それは今が春真つ盛りであることを告げている。

少女は木陰に座り、先ほど籠いっぱい摘んできた花で冠を作っていた。その光景は彼女の侍女や従卒も無意識にうつとりと目をむけてしまうほど可憐で、この季節のように心を穏やかにしてくれる。

少女を見守るのは人間だけではない。小鳥やどこからやってくるのか小動物達がちょこんと座り、彼女を見つめていたり、無防備に眠っていたりしていた。

この世界の5大大国の一つ、メンデルス王国の麗しき姫君、エレナ王女。それがこの少女である。

突如、小鳥が羽ばたき、動物達はバネのように跳躍してエレナから姿を消した。

その行動は動物達にとっては何かを察知して己の身を守るためによるものである。その感知速度は人間のそれとは比にならないほど速い。

エレナはその様子に驚きもしなければ不安な表情を浮かべることもなかった。ただ動物達が去った後、穏やかに口元に笑みを浮かべた。それはいつも動物達が教えてくれる合図。

程なく、中庭と接している廊下が騒がしくなった。

エレナ直属の侍女や従卒もエレナが笑みを浮かべる頃と同じくして分かつていたが、エレナが何も言わないのでこちらからも何も進言しない。だがエレナをうっとり見つめていた姿勢だけは正した。

「姉さん！どこだ！」

ようやく声変わりも終わった真新しいテノールの透き通った声がやや乱暴に城内に響き渡った。廊下を少し急ぎ気味の靴音が動物達を驚かせる原因だった。

廊下で控えていたエレナの従卒が、やってくる少年に向き合い、そっと手を中庭へ向けた。

「エレナ王女はあちらにおいでです、フェルダ王子」

フェルダが中庭を振り返ると、すでにこちらを向いて手をひらひらと振って笑っている姉の姿が目映った。

可憐だ。なんという天使。

軽く目眩を起こしつつ、「王子、心の眩きが声に出ておいでです」と言うフェルダ直属の側近の言葉を無視してフェルダは中庭へ下り、姉であるエレナの元へ歩いていった。

片膝をついてエレナの手をとり、甲に口付けを落とす。

「ただいま凱旋いたしました、姉上」

フェルダが顔を上げると、ささやかなそよ風が彼の柔らかな金の髪を揺らした。スカイブルーの瞳にはエレナ以外何も映していない。

「おかえりなさい、フェルダ。無事に帰ってきてくれて安心したわ。怪我はない？」

頭に巻いた白のハチマキに目を留め、ふと眉を寄せたエレナに気付いたフェルダは、それに触ろうとしたエレナより先に慌ててハチマキを引っぺがし、腰巻に突っ込んだ。

「怪我したの？血がついていたわ」

やはりそれで姉の表情を曇らせてしまったのか。フェルダは首を振った。

「汚らわしいものを見せてしまっただけで申し訳ありません。俺はかすり傷一つ負ってなどいません」

待てよ、怪我したと言って自分を心配してくれる姉さんもいい。いや、そんな心配などかけさせてはいけない。でもちょっと疲れたから膝を貸してと言った方がいいか。顔はもちろん姉さん向きに頭を乗せて、腹に顔を埋めて……。ああ、温かいだろうな、いい匂いにするだろうな。

「王子、最後の一文だけが声にでました」後ろでフェルダの側近が控えめに言った。

「ふふ、フェルダは待ちきれないのね。私もいい匂いにお腹がさつきから鳴ってばかりなのよ」

「おい！晚餐の時間を早めろ！」

フェルダがくりりと振り返り誰にもなく怒ったように叫んだ。「はっ！」と従卒がすたこらと廊下を走っていった。

「今日はフェルダの誕生会ですものね。コックの皆さん、とても張り切っていたからとても楽しみなね」

「俺は姉さんのドレス姿を見るのが楽しみで……」

楽しみで、早く帰りたくて、今日の戦は勢い余って100人単位で敵をなぎ倒していったんだよ。

「今日の主役は貴方よ、フェルダ。……15歳。成人ね。おめでとう、フェルダ」

「ん……、ああ、ありがとう。キスしていい？」

「何故」という側近の声は少し強めの風にかき消された。

「ん？ええ、どうぞ」

可憐な笑みで頷き、エレナは頬を前に出して目を瞑った。フェルダは差し出された頬を通り抜けてエレナの艶やかな唇に口付けをした。目を開けたエレナは、触れられなかった頬を染めてもじもじと膝の上に乗せられた花冠に目を向けてしまった。とても可愛い。ふわふわとした白金の長い髪がキスをした時に震えた時は押し倒そうかと思った。

「姉さん、俺は汚れているからそろそろ戻ります」

凱旋して沐浴もせず王に謁見もせず真つ先にここへ来たのはいささか配慮が足らなかつた。今日で成人とはいえ、そういう気配りを忘れてしまうところはまだまだ未熟なのだろうと自らを厳しく戒めた。愛しい人に接する時は自らも清らでありたい。姉は汚れてはいけない。

「フェルダ、待つて。これを貴方にあげるわ」

立ちかけたフェルダはエレナが手にしたものを見るとすぐに膝をつき直し、頭を垂れた。そこへそつと乗せられたのは、エレナが先ほどまで作っていた花の冠だつた。

「貴方は綺麗だからとてもよく似合っているわ」

フェルダは目頭が熱くなつた。姉が自分のために手作りの贈り物をしてくれた。感激しすぎて体の振るえが止まらない。礼は何が良いか。口付けはどうだろう。さつきより深い愛を込めた口付けは姉も喜んでくれるに違いない。しかしそれだけで姉は満足してくれるだろうか。またキスかと呆れられてしまう可能性もある。俺は単細胞ではない。こんなに凝った贈り物をしてくれたのだ。俺では絶対に作れない。この花の冠は部屋へ飾ろう。一生飾ろう。ああそうだ、それでお返しは何にしようか。俺の今日の武勇伝を耳元で囁きながら添い寝するとうか。いやしかし今日の戦は語るほどでもないしょうもない戦だつた。となるとやはり、この冠を作ることでは体が疲れているに違いないのだから体中を愛撫してほぐしてさしあげ

「それでは後ほど、王女」

「ええ、シエンもお疲れ様でした。フェルダを頼みましたよ」

「はっ」

フェルダの側近シエンは、いまだ何やらぶつぶつと呟いているフェルダの耳っ端をつかんでずるずると引きずり去って行った。

今日一日は何とも慌しい一日となった。

戦から帰って来た今日はフェルダの15の誕生日であり、同時に成人を迎えた。

成人を迎えると、王族のみで行われる成人の儀式を行う。フェルダは帰って早々成人の儀式を執り行った。

成人の儀とは、現国王により、メンデルス王国でしかとれない鉱石で作られるという聖剣を与えられる儀式で、それを受け取った後、成人としてみなされるのだ。

昼食後、城の離れにある大聖堂にてそれは厳かに行われた。

国王より剣を賜ったフェルダがそれを腰に差した時、周りで見守っていた親族一同が感極まる声を響かせた。フェルダの姿はもう少年ではない。一国を担う次期国王たる堂々ぶりであった。

しかし当の本人は、前を向きつつも視界の端にはちゃっかり、いや、しっかりと、自分を見つめる姉の姿を入れて自信有り気に口元を上げていただけ、ということとは誰も知る由もない。

姉の衣装は神聖な場に相応しい白のドレスに、頭から光りによって蒼に輝くベールを被っていて聖女のようなだった。

自分も今は白装束に身を包んでいる。二人並べばまるで新郎と新婦

のようだと1人妄想に更け、フェルダは笑んだ。

姉も終始嬉しそうにこちらを見つめていた。もしかすると向こうも同じことを考えていたのではないだろうか。なんという相思相愛。今夜の添い寝のおかずはこの話題にしよう。頭を撫でながら耳元でその話をするのだ。そうすれば姉さんは顔を赤らめる。そのままキスもしてしまおう。うむ。段取りとしては中々のできた。

成人の儀が終わると、休む間も無く城のテラスからメンデルス国民への顔見せが行われた。

ここではテラスの先頭にフェルダ、その後ろに国王と王妃、その横にエレナという配置になる。

「シェン、姉上は公の場には慣れておいではない。だから顔見せでは私が姉上を支えている故、配置変えの旨を父に知らせておいてくれ」

エレナ様は今日もまったくのお元気で、公の場でも立ちすくむようなお方ではないのだが……と思いつつ、すでにフェルダ王子の決めた事は決して覆ることはないの、いや王子が頑固とかそんなことを言っているのではなく……。考えている間にシェンは1人置いてけぼりをくらっていた。

テラスへ続く部屋の中にも、外にいる民衆の歓声は十分に届いていた。

「姉さん、さ、そろそろ行こうか。とても綺麗だ。この場に俺と姉

さんだけだったなら今ここでその愛らしい唇に口　「

シエンが咳き込みながらテラスの窓を開けると、フェルダの声はエレナに届かなくなった。フェルダはがっしりと……しつかりとエレナの腰を支えながら、ゆっくりとテラスへと踏み出した。

若き次期国王の姿を見たメンデルス王国の民達の声が一層大きく空へ轟いた。

皆が歓声を上げ、両手を振り続ける者、フェルダの名前を呼び続ける者、横断幕を掲げている者。皆が彼を愛している。

金に輝き揺れる短い髪。春の晴天を映し出したようなスカイブルーの瞳。

フェルダが微笑みを浮かべれば、民も笑う。彼が手を上げて振って見せれば、民も両手を上げて喝采する。

エレナはいつしか自分の身長をゆうに超えた弟を優しい瞳で見上げた。

いつもどんな時でも優しくて、ちょっと強引な可愛い弟。

でもきつと、自分の知らない弟の力才があるのだろう。戦場に立つ弟の力才は知らない。こうして民のために姿を見せている弟の力才もいつもとはまったく違う。凜としていながらもその笑顔は次期国王にふさわしい輝きを放ち、民を魅了している。

とても嬉しい。弟が誰からも愛される子に育ってくれて。

「ああ、早く部屋へ引つ込みたい」

笑顔で民に手を振りながらフェルダの口からはそれとはまったく逆の言葉が聞こえた。

「どうしたの？気分でも悪くなったの？」

「ええ」

とても気分が悪い。皆が俺の姉さんを見ている。

初めはそんなこと露ほどにも思わなかった。むしろ、自分と姉の並ぶ姿を民衆に見せつけたくて姉を隣へ立たせたのに。

いざ出るとどうしたのか。皆が姉を狙っているような目にしか見えなくなってきた。誤算だった。

これが若氣に至りというやつか。皆に俺と姉の相思相愛の姿を見せつければ、姉を奪おうという輩はあきらめるだろうなどどうしてそんなありえない策略を企ててしまったのか。

逆だ。可憐な姉さんをみせてしまったばかりに、皆の目が姉にだけ向けられてしまう結果となった。

愛する人は誰にも見せてはいけない。

フェルダは今回の自らの失態を嚴重に戒めた。

顔見せを早々に済ませると、フェルダはエレナを連れて彼女の部屋へ向かった。エレナの侍女やシェンも下がらせて、二人きりとなった静かな部屋でエレナをベッドへ座らせた。

「お疲れ様、とつても凜々しかったわ。フェルダ。気分は大丈夫？」

次の策略を馬車馬のように脳内で張り巡らせていたフェルダは引きちぎれそうなほど握りしめていたカーテンを放してエレナを振り返った。

「俺のことより……！」

足早にエレナの元へ寄り、足元に両膝をついてドレスの上から腿に顔を埋めた。

「ごめん、俺は浅はかだった。姉さんを危険な目に合わせてしまった」

スルリとドレスの下から両手でエレナの足を抱く。細くて折れそうで、でもふくらはぎの柔らかさに陶醉する。

頭を姉の手が労わるように撫でってくれる。優しすぎる手つきにこのまま眠ってしまいそうだった。フェルダは目を閉じた。

「フェルダはいつも私の心配をしてくれる優しい子。ありがとう。でも危険なことなんて何もないわ」

フェルダは顔を埋めたまま小さく首を振った。

「姉さん、晩餐会はここにいて」

「それでは貴方の誕生日をお祝いできないわ」

「早々に切り上げてここに来る。それから二人で仕切りなおそう。そうしよう。晚餐で出る料理をここに全て運んでもらうように言うておく。ああ、部屋は暗くして、テーブルにキャンドルをたてよう。蝋燭の明かりに照らされた姉さんは美しい」

「まあ。まだ見てもいないのに」

「見なくても分かります。ああ、今から楽しみだ……」

「ええ、楽しんできてね。晩餐会にはたくさんのご令嬢がいらつしやるから粗相のないように」

姉さんが嫉妬している。可愛い。もっと嫉妬してほしい。ああやはり連れて行こうか。そして俺が他のゴミと話しているところを姉さんが見て、そしてもっと嫉妬するんだ。俺はそれを無視してゴミ達と踊れば、姉さんは俺のための涙を流してくれる。そんな筋書きもいい。

部屋の外からノックの音が聞こえた。扉の向こうからシェンが時間を告げに来た。

「では後ほど、姉さんの欠席は俺から皆に伝えておきます」

エレナは困ったように笑いながら、小さく頷いてフェルダを見送った。

扉を閉めた後、錠をかけるような音を聞いた。きっとそれは空耳で

はなく、本当に鍵をかけたのだろつ。

エレナは窓辺に立ち、中庭に咲き乱れる花を見つめた。

誰からも愛される優しい弟。だんだんと大人の顔を見せてきて、時折その成長を寂しく感じてしまっけれど、それでも頼もしくなっ
てゆく弟を見るのはやはり嬉しい。

「あとは、姉離れをして、いつか心から守ってあげたいと願う人にめぐりあえますように……」

大事な弟が幸せでありますように。

メンデルス王国と聞けば、一昔前：そう、現王の通り名「金龍王」が世に名を馳せ、一目置かれる大国であった。

金の龍。すなわち、王の長い金の髪が戦場でたなびくその姿が、まるで黄金色に輝く龍のようだと誰かが囁き、いつしかそれが通り名となったのが由縁である。

そして金龍王は二人の子を授かり、十数年の時が経ち、今、メンデルス王国の名を聞いて皆々が噂をするのが、金龍王の息子、フェルダである。

彼の通り名は「軍神」

そう呼ばれ始めるのは、もう少し年月を経てからだ¹⁵が、成人になったフェルダはすでに「軍神」として開花しつつあった。

最も簡潔な言葉で彼を例えるならば、完璧。

まだ少年 いや、今日から成人になるのだから青年というのが正しいだろう。いささか顔立ちに幼さの見え隠れする青年は、若かりし頃の金龍王に重なるものがあった。金龍王もまたその通り名で讃えられていた頃は完璧な男だったと鮮明に記憶している。

フェルダ王子の側近、シエンは金龍王に仕えていたこともあるメンデルス王国では古株の1人である。かといって年老いているわけではない。金龍王が20歳の頃、まだ11歳という幼さだったが、生

まれ持った冷静さと聡明さ故に、金龍王の側近の1人として加わっていた……というつまらない話を知っているのはもうメンデルス王国には数人しかいないだろう。

フェルダが生まれてシエンが金龍王の側近からフェルダのお守り……もとい、側近となつてから、シエンはフェルダの全てをその目で見てきた。

成長を重ねてゆく度にどこか金龍王と面影が重なる仕草や言葉遣いも垣間見え、シエンはそれを微笑ましく思えるのだ。

そしてやはり金龍王の息子だと思い知らされたのが、フェルダの初陣である。

この世界は5大国により成り立っている。遙か昔、金龍王が生まれるよりも遠い昔には5つの国々の間では争いが絶えなかったという。

今は各国との平和協定が結ばれ、争うこともなく、時には王の娘を嫁がせたりして友好を深めたりもして安定を保っている。

だがこの時代の問題は大国同士の争いではない。大国内の地域ごとで起こる戦争、つまり内乱だ。

世界が5つしかないということは、当然1つの国は広大であり、それを1つの国家がまとめるのは常識的に無理であり、そうなれば当然、小国に分かれて、それぞれが自治を持つようになる。

メンデルス王国の中には37の自治小国がある。主権はメンデルス王国であるが、小さな決まり事はその各小国に任せている。それが今の世の中の常であった。

しかしなんとも幸運といえはそうなのか、王の人望が飛びぬけて厚かったのか、嘘のようで真の話、メンデルス王国では内乱というものがまったくといっていいほど皆無であった。

つまりは平和である。

しかし軍事力は内乱を勃発させているのが日常の他大国にはまったく引けをとっていないほど強固であるのは、普段からの鍛錬と、もしかしたらこれは、この国の民衆の真面目な性分なのかもしれない。あえて悪くいうのであれば、臆病な性格だからこそ、いつ、何が起きても対処できるよう最善を尽くしている結果、軍事力は高く、治安もすこぶる良い国になってしまった。そんなところだろう。

シエンは晩餐会で現国王の座する横で威風堂々と立ち光り輝いている我が君を見上げた。

15とは思えぬ貫禄あるオーラはもはや現国王の存在を掠めてしまっているかもしれない。しかしそれは国王自身が我が子の成長ぶりを嬉しく思っているからこそなのだとシエンは確信している。もし我が子が自分よりも人望があるのが我慢のならない親だったとしたら、今頃はこのメンデルス王国もきつと内乱の最中だったことだろう。

シエンは思わず目頭が熱くなった。この国に生まれ、この国に、金龍王にフェルダ王子に仕えることができて本当に幸せだ。

そんな幸せな国であるというのに、フェルダが戦場へ立たねばならないのは、自国の為ではない。

メンデルス王国最大の友好国である5大国の1つ、バハン王国で今、大変な内乱が勃発していた。

バハン王国は現国王の妻の故郷、つまり現王妃はバハン王国の王女であり、このメンデルス王国に嫁いで来たのだ。

王妃は心優しい方で、民も城内からも愛されていた。だから他国の内乱を鎮めるための戦いへ赴くというのに、誰も反対はしなかった。

小さな内乱は小部隊を送り込み、彼らでは抑えきれないところで、フェルダ王子の出番というわけだ。此度の闘いも、バハン王国の内乱を鎮めるために出向いた戦だった。

フェルダは遠征すると、驚くべき速さで凱旋した。

シエンはフェルダを見上げながら初陣の時を思い出していた。

金龍王はまさに我が子を谷へ突き落とす教育を施した。フェルダの初陣はそう、わずか8歳だった。

その時王子が心配する私に言った言葉は今でも忘れられない。

「他国では4歳の子供ですら闘っている。……というか、エレナ姉さんと一日でも離れたくないからさっさと終わらせてとっとと帰りたいんだ」

いろんな意味で忘れられない言葉だった。

これは言っているのか分からないが、独り言だと思ってくれればいい。

初陣の日の前夜、フェルダ王子はエレナ王女が眠る前にこう言っていた。

「姉上。姉上が目が覚める時には、僕が隣にいますから安心して眠っててください」

そうして王子は手に持っていた小瓶を口に含むと、王女へ口移しをして、おそらくそれを飲ませた。王女は王子にもたれかかるようにして目を閉じ、深い眠りについた。

王子の初陣にかかる期間は一週間という予定だったが、王子はなんと2日で凱旋したのだ。

そして城に戻るや否や、井戸の水を汲んで頭からおもむろにばつさりと何度もかぶり、身を清めると、眠る王女の部屋へ向かった。

王子が口移しで飲ませた小瓶の中身は眠り薬。その効果は2日。王子は王女の頬に手をあてた。すると王女がゆっくりと目を開けた。そのまだぼんやりとしたつぶらな瞳に、王子は優しく微笑んできた。

「おはようございます、姉上。朝ですよ」

私はその初陣劇をただ静かに見守っていた。

3（後書き）

時系列は「凱旋」「成人の儀」「顔見せ」「誕生晩餐会」です。

3、4で前後しているので、混乱させてしまい申し訳ありません。

1000人は軽く収容できる大広間で、フェルダの誕生会という名目の晩餐会が行われていた。

どこを見回しても艶やかなドレスを着飾った貴婦人あてにそれをエスコートする紳士で埋め尽くされ大いに賑わっていた。

フェルダ王子が玉座のある高い位置に立つと、耳を覆うほどの賑わいはピタリと止んだ。そして誰もが彼に注目する。

フェルダの衣装は成人の儀の時に来ていた白装束から一変、赤の生地に金の刺繍がふんだんに施された正装。腰には成人の証である真新しい剣がまるで彼の一部のようにしっくりと腰に据えてあった。

いつもはふわりと額にかかっている柔らかな前髪は、今は後ろへ長しかつちりと固められてある。それが今までの少年ぽさを一掃して頼もしい青年の顔つきにさせた。肩から背中へ流れる白のマントはまさに王子のためにあると思わせるほど彼によく似合っていた。

堂々たる演説をそこにいる誰もが神を崇めるような気持ちで聞き入った。

成人になったばかりの若い次期国王。だが誰も彼を青二才だとは思わない。貴族達は彼の声を聞きながら想像した。

彼の十年後の姿を。

その頃には国王として立派になられ、祖国をさらなる発展へと導い

てくれているのだろう。

そして誰もが心から思う。

メンデルス王国に生まれて育って良かったと。

喝采に見送られながら階段を降りてゆくと瞬く間に彼の周りに人だかりができた。

フェルダは笑顔を振り撒き、軽く手をあげながら彼らの波をくぐり、階下で控えていた側近のシェンの元へ向かった。彼は目元をハンカチで押さえていたが、フェルダに気がつくたびにやりと顔をゆがめた。

「フェルダ王子……ずばだじい演説でございばじだ……ずびっ」

眩しい。フェルダ王子が眩しすぎて涙が止まらない。

「ああ、ありがとう。それで、料理の手配はしてあるのか」

「は、すべて滞りなく」

それは小さな会話だった。フェルダの言う料理とは、晩餐のための料理ではない。

愛する人と二人で楽しむための方の料理。

フェルダは会場に設置されたケーキを目を細めて見つめた。このつまらない晩餐の後が本当の誕生会である。それも愛する人と二人き

り。姉だけが自分を見つめ、祝いの言葉を言ってくれる。テーブルにケーキを置いて、それを挟んで互いに座る。甘いものは進んで食べようとは思わないが、姉さんは俺が喜んでくれると思ってフオークですくったケーキを俺に突きつけるんだ。俺は仕方なく食べる。礼に俺もケーキを食べさせよう。俺は不器用だからもしかすると姉さんの口にクリームをつけてしまうかもしれない。そうしたら笑いながら舐めとってあげよう。そのクリームはなんとも甘美な味がするだろう。

「しかし、王子の勇姿をエレナ様にお見せできなかったのが残念ではありません。エレナ様とお二人の時の貴方様はちよつと別人……柔らくなっておいになりますから。エレナ様はご存知なのでしょうか。フェルダ様の本来のお姿を」

「おかしなことを言う、シェンよ。俺はいつも自分に正直に生きている。姉上に隠しているような自分などおらんよ」

なるほど、無自覚というわけですね。シェンは二回頷いた。

「よし、そろそろ宴もたけなわだな。皆にはこれでお開きに」

意気揚々と身を翻したフェルダのマントをシェンはがっしりと捕まえ引き止める。

「恐れながら晚餐は始まったばかりでございます」

「何？私はもう十分祝ってもらったつもりだが」

「ご婦人達が貴方様と踊りたくて目を輝かせておりますよ」

「俺は戦で足が折れてしまつて、実は今熱も」

「いつてらっしゃいませ」

秘技、誰にも分からないように王子の背中を押すを発動させて、シエンは貴婦人に揉まれてゆくフェルダを見送った。

「おもむろに舌打ちしましたね、王子」

それにしても、と思う。

フェルダ王子は常にご自分に正直だと仰った。

普段の爽やかに話す彼、私と話す時のかなり……やや不良な彼、戦場の中に立つ軍神を思わせる彼、民の前に立つ凛々しき未来の王の彼、そして、お慕いしている姉君の前の優しさ溢れる彼。

私はそのどれもをずっと見てきた。どれもが極端に変貌する。それでも全てが本当の彼なのだ。おそらく私しかそれらを全て知っている者はいない。

だがそんな私も心の中の彼の姿だけは見たことがない。これらの内のどれかなのか、それとももっと別の顔をした彼がいるのか。

もし後者ならば、きっとそれはとても強く、深く、そして燃えさかる狂気さえをも秘めた

シエンは考えるのを止めた。

この先彼が辿る道がどのような道であろうと、私は彼の後ろをお守りし、ついてゆくのみ。

フェルダ様がこの世にお生まれになったその瞬間から、私の存在意義が貴方そのものとなったのだから。

4（後書き）

アクセスいただき心より感謝いたします。

フェルダが15の成人を迎える少し前、エレナもまた16の誕生日を迎えていた。

王女の誕生会は彼女の慎ましい性格を考慮し、家族だけで夜会をするという形式をとってささやかに行われた。

民に知らされることはなかったが、それでも諸外国からたくさんの祝いの品が城へ届けられた。

部屋を埋め尽くすほどの贈り物が一国の姫に贈られることは珍しい。だが可憐なエレナは兎角人気があった。

彼女の微笑みを見れば、剣を握るその手からするりと剣を滑らせてしまうだろう。舞踏会で彼女の踊りを見れば、踊る足で相手の足を踏んでしまうだろう。

誰もが彼女を愛し、またエレナ自身も分け隔てない優しさを皆に分け与える。

そんなエレナが16になった。

16は王族にとっては一般的に花嫁になる歳でもある。今年のエレナへの贈り物は、諸外国からのアプローチと、求婚を兼ねた品が多数を占めていた。

その日の夜、誕生会も終わり城内も静かになった頃、エレナは国王である父に1人呼び出された。

父は玉座について片足を組み切れ長の目を階下のエレナに向けた。

「お前は誰か想う者はいるか」

その問いかけに、エレナは「いいえ」と首を振った。エレナは父に呼び出された時すでにどんな話をされるのか大体予想していた。それはやはり予想していた話だった。

16になればそういう話がいつかは来る。それは嫌なことでも悲しいことでもない。誰かと結婚する年齢になってしまった。父は私を誰かと結婚させようとしているのだと心の中で納得した。

「私はできるだけエレナ、お前の意思を尊重したいと思っている。もしお前が誰にも口にできぬような者を慕っているのだとしても、私はその者をお前の夫にするつもりでいる」

金龍王と呼ばれた国王はそれは威厳に満ちた王の中の王だと誰もが口にするが、エレナは彼を優しい父親だと心から思っている。今も娘の意見を尊重するとまで言ってくれた。

しかしエレナにはまったく心を奪われるような存在に巡り会っていなかった。

たくさんのアプローチや、殿方に出会う機会は数え切れないほどあった。彼女自身も恋に奥手だとか、恋に疎いという性格でもない。エレナは恋愛の読み物が好きだったし、素敵な殿方を見かければ、心臓を高鳴らせることもする。

だがエレナは無理にでも心の底から男の影を引きずり出せと言われ

たところで、1人の男の名も出ることはなかった。

娘の意思を尊重する筈が、これは困ったものだ、国王は適当に思いつく諸外国の王子や世に名を馳せる名将の名前を挙げてみた。エレナは深窓の姫君でも知っているような有名な名の数々に驚くばかりだったが、全てに何か感じるようなところはなく、王も10人目を上げるところでため息を吐いてしまった。

「まいったな。我が娘は星の数の男に愛されているというのに、娘はまだ巡り会えていないのか」

「お父様は私と誰かを結婚させようとお考えなのですね」

その時王の瞳が動いた。エレナは困ったように笑う。

「やはりそうでしたか。もし急ぎでないのなら、私は婚期を逃しても、晩婚と噂されるような歳になろうとも、ゆるりと運命の殿方に出会えるその日を心待ちにしたいと思っていましたが……」

特に相手もない今なら、敬愛する父の役に立てるかもしれない。心優しい姫は自分の幸せより、誰かのために役立ちたいと願わずにいられない。

「シュベール帝国」

王がその名を口にした時、エレナはハッと顔を上げた。

視線と視線が静かに緊張を保ったまま交差する。

どのくらいの沈黙が玉座の間に流れただろう。やがて微笑んだのは

エレナだった。

「喜んでお受けいたしますわ、お父様」

エレナは目を開けた。

いつの間にか転寝をしていた。頬に触れる柔らかさを感じ、ゆるりと笑った。

「お誕生会は終わったの？フェルダ」

エレナの頬を撫でながらフェルダは頷いた。

「お待たせしてしまい申し訳ありません。姉さんの寝顔をずっと眺めていたかったのですが……」

エレナが上半身を起こすと、フェルダの手がその背を支えた。

「着替えたのね、フェルダ。姉さん、貴方の正装を見たかったわ」

フェルダはここへ来る前に晚餐で着飾っていた煌びやかな衣装を脱ぎ捨て、固めていた髪も湯浴みでさっぱりとさらさらした髪へ戻し、新しい服を着てエレナの部屋を訪れた。やはり早々に晚餐を切り上げるなどできるはずもなく、さんざんゴミと踊らされ体に雑菌をつけられ、この会場をまるごと爆破してしまおうかと本気で考えてしまったほど苛立ちを募らせていた。

すっかり月も天に上りきってしまった頃にエレナの元を訪れたフェ

ルダは、一体どう詫びればよいのか何通りも考えながら姉の寝顔を見つめていた。

かわいそうに、腹が空きすぎて眠ってしまったのだろう。可愛い寝顔だ。

まずは謝罪を込めた口付けを落とす。長い睫毛が震えたのを見つけて瞼にも口付けた。白く細い指を剣を握りなれた己の手の平に乗せ、指先にも口付ける。これで許してもらえらるだろうか。

それにしても晚餐では酷い目にあつた。分厚い化粧を施したゴミどもは執拗に体を摺り寄せてきて何度吐き気をもよおしたことが。あの柔らかさは苦痛以外の何者でもない。それに比べ姉さんのこの柔らかさといったらどうだ。シーツの上から見てとれる胸の丘陵。顔を埋めれば優しさが俺を包み込んでくれる。手の平に心地よく吸い付く胸の弾力

「祝いの準備、整いました。フェルダ王子。ああ、聞いておられませんか。私はこれで失礼します」

「お前はもう休んでくれて構わないよ。俺は今宵はここで眠らせてもらう」

「あ、聞いておられましたか。かしこまりました。エレナ王女の配下の者達にも私から伝えておきます」

「やはり直に撫でて差し上げたほうが失礼にはあたらないかな？」

「私に聞かれなくても」

「ああ早く食べたい」

「料理の話だと信じてよろしいでしょうか」

失礼します、と言ってフェルダの側近は退室していった。

少し遅めの誕生会が始まった。

まずはグラスを交わして乾杯。部屋を暗くしてテーブルにキャンドルを灯しただけの明かりに照らされる姉の姿は慈愛に満ちた聖母そのものだ。

姉と共に食事をするために、晚餐の料理には一口も手をつけなかった。二人で会話をしながら食べる料理のなんたる美味なこと。これは料理長に褒美をとらせるようシェンへ伝えておこう。

会話の内容は大体俺の遠征の話や、戦の基礎という姫君には縁のない話だったが、食事の手を止めさせてしまうほど熱心に聞いてくれる姉の姿を見ていると、得意分野の話にますます花が咲く。と、正直なところ、手持ちの話題がそんな食卓に合わないようなものしかないのが俺の汚点でもある。

俺の話が終わると今度は俺が姉さんの話を聞いた。今、城下で流行っている髪飾りや洋服のこと、美味しいパン屋ができたこと。よし、早速明日買占めに行つてこよう。

「願いごとが叶う泉があるらしいの」

「姉さんの願いごとは俺が全て叶えて差し上げますよ」

「そうね。フェルダはメンデルス国を幸せに導いてくれる」

「それが姉さんの願いですか？」

「ええ。だけれど、貴方自身にも幸せになつてほしいわ」

「俺は今幸せを噛み締めていますよ」

向かいの席から姉の隣へ移動し、ケーキをフォークに小さくすくつた。姉さんは可愛い小さい口をしているから、一すくいを少量にしなければならぬ。姉の腰に腕をまわして、覗き込むようにフォークを姉の口元へ運んだ。照れているんだろう。すぐには口を開けず、少し身じろいでいる。いいよ、いつまでも待っていいよ。待てよ、もしかすると口移しが礼儀だろうか。俺はこの辺のマナーに関しては少々乱雑なところがある。直さなければと常日頃から戒めているのだが、まだまだ、姉を前にすると頭が真っ白になってしまうようだ。

愛とは難しいものだ。

食事を楽しんだ後、エレナは入浴をするために席を立った。

フェルダも続いて立ち上がる。さっきここへ来る前に浴びた湯は汚れを落としただけの簡素なもので、疲れを癒すものではなかった。姉の浴場は暖かみのあるタイルが敷き詰められていて、安らぎたい時にはここで入浴するのが最も効果的なのだ。

エレナが浴室へ姿を消した後、フェルダが軽く指を鳴らすと、控え

の部屋の扉が開き、シェンとエレナの侍女が入ってきた。

「さっさとすませろ」

「は」

シェンは迅速に食事を片付け、綺麗になったテーブルの上には真新しいアロマキャンドルが飾られた。その間エレナ直属の侍女がさっきまで転寝をしていたエレナのベッドをきれいに張り直す。

エレナの侍女がフェルダにお辞儀をし、先に退室していった。

「ところで、ずっと待機していたのか？休んでくれているだけでも構わないと言った筈だが」

「ではお呼びにならないでください、王子」

「もう呼ばないよ」

「寝着は枕元へ置いておきました。明日の着衣は長椅子の方に」

フェルダは着衣をばいばいと放り捨てるように脱いだ。彼の若々しい15の肉体には傷1つついていない。無駄のない筋肉はまだまだこれから成長しつづけることだろうと思いながら、シェンは脱ぎ捨てられた服を拾い集めた。

裸体になったフェルダが浴室の部屋の中へ消えるまで見送ると、誰もいなくなった部屋に一礼して、シェンは静かに退室した。

シュベール帝国 世界の中心にある孤島。

この世界の構図を説明すると、シュベールの島の周りをぐるりと1つの大陸が囲んでいるカタチで世界は成り立っている。シュベールの島へは橋はかかっていない。大陸と連絡を取る手段は船のみ。その船でも一日はかかるほどの距離である。

そんな特殊な地形のために、いつしか大陸側の人々はその孤島を聖地と呼び始めた。

シュベールが大国同士の争いに巻き込まれなかったのも、その頃にはシュベールはすでに神聖な地として人々に根付いていたのが幸いしていたからだろう。

兎角シュベールは謎の多い国である。

軍事介入がないことはそこに住まう人々にとってはありがたいことであるに違いないが、逆にその民は極力島から出てこようとしないう。つまり大陸との交流がまったくといっていいほどなかった。こちらから出向こうにも、島を囲む海は複雑な海流が交差し、島からの道標がなければとてもではないが辿り着くことはできない。

だから金龍王を始めとする五大国のトップですらもシュベール帝国の内情はあまり把握していないのが現状だった。

だが全てが謎の国かといえばそうではない。

シュベール帝国の最高位に座する人物は代々女帝である。

大陸の人々は彼女を「女神」と呼ぶ。そしてその国は世襲ではないということも分かっている。彼女がどのような決まりで女帝に選ばれるのかは分かっていない。嗜好きの民たちは、彼女は星の降る夜に流星が運んでくるのだの、何か災いが起こりそうになると玉座に突如現れるのだと夢物語のように想像をかきたてる。

そしてその「女神」には今、息子が1人いるらしい。年齢不詳、容姿不詳、人間であるかすら不詳……それはないと思うが、要するにその息子が妻を娶ることになったということだ。

「その候補が、私……」

エレナは湯煙が立ち上る湯船の中でまだ見ぬ夫となる人物を想像していた。

どんなお方なのだろう。お歳はいくつかしら。優しい方だといけれど。私を愛してくださるかしら。

私は彼を愛せるかしら。

エレナは首を振る。たとえどのような人物であつても、愛することに全力を尽くすのが妻の役目だ。彼を支えられるような妻でありたい。

それにしても父はどうやってその話を知ったのだろう。シュベール帝国の内情を知るのは国王である父ですら容易ではないはず。女神様と個人的な交流があるのだろうか。

父は私に良縁を望んだのではない。父の瞳を見てすぐに察した。

メンデルス王国とシュベール帝国の同盟。シュベールはどの国とも関わりうとしないことは内政にあまり詳しくない私でも知っている。

おそらく婚姻の話を持ちかけたのは父の方からだろう。

女神様のご子息が妻を娶るという情報を他国より先に何らかの方法で知った。そうでなければ、今頃は他国中から自分の国の娘を差し出すことに躍起になり、事態が重くなれば平和協定の均衡が崩れる可能性もある。しかしそんな話題はまったく聞かない。

となると、女神様が父だけにその話をした

「うーん、もしかしてお友達だったりして」

なんてね、と肩をすくめると、エレナはふと、そうならばなんて素敵なことだろうと嬉しくなって微笑んだ。

「誰と誰がですか？」

突然浴場に声が響いて、エレナは驚いた。入り口の方を振り返ると、すぐ後ろに弟の姿があった。

「ま、まあ、フェルダ……！」

エレナはすぐに視線を彼から逸す。

幼い頃から弟とはこの歳になるまでも何度も沐浴を共にしているの
で自分自身に抵抗はなかったが、いつからだろっ、弟の体つきが大

人びてゆくを感じ始めた時から、まともに見てしまっただけは何か申し訳ないような、気恥ずかしいようなそわそわした気持ちになってしまい、そろそろこういうことは終いにしなければならぬとは思っているのだが……、弟は身内である姉と入るのに何の抵抗も感じていないのだろう、いつも平然と入ってくるので、なかなか言い出せずにいる。

何より家族を拒む理由が男の体を目にするのが恥ずかしいと口にするほどエレナは気丈ではなかった。

それは弟が遅しく育ってくれている証なのではあるが……。

もじもじしているうちに、フェルダはエレナの隣へ身を沈めてきた。何人も余裕をもって入れるほどに広い湯船だが、フェルダはいつも寄り添うようにエレナの傍に腰を下ろす。フェルダの筋肉で引き締まった二の腕にエレナの華奢な肩が吸い付くように触れた。

「はあ、湯浴みは気持ちよいですねえ……」

普段よりもずっと力の抜けた声を出すフェルダに、やはり今日も言い出すことの出来そうにないエレナは「おつかれさま」と言って微笑んだ。

「フェルダは戦から帰って休む間もなかったというのに。お誕生会は明日にすればよかったわ。気が利かなくてごめんなさい」

「とんでもないことです。姉さんとの誕生会が一番の楽しみだったのですから。おかげで戦のことも忘れる事ができました」

「フェルダ……」

フェルダがエレナの体を後ろから抱きすくめ引き寄せた。フェルダの腕が少し震えているような気がして、エレナはそのままじっとした。かわいそうに。成人とはいえ、弟はまだ15なのに辛い戦いに何度も立たなければならいなんて。何もしてあげられない自分は何んと非力なことが。

と考えていると、肩に腕を回していたフェルダの手がずりりとエレナの上気した胸に滑り落ち、その手の平が二つの膨らみを包み込んだ。弟とはいえ、さすがのエレナも思わず体を硬直させてしまう。

しかし間を空けず首筋にフェルダの湿った柔らかな髪がかかったかと思うと、フェルダの唇がエレナの華奢な肩をまるで吟味しているようにゆっくりと撫でていった。

「フェ、ルダ…？どうしたの？あの……」

だが抵抗したり拒絶するのは弟を傷つけてしまいそうで、どう言葉を出していいのか、代わりに少し困ったように歪めた顔をフェルダへ向けた。それを待っていたかのようにとても自然な流れでエレナの唇がフェルダに塞がれた。その口付けはすぐに、しかしそっと離れ、エレナが驚く前には再びフェルダは唇を重ね合わせた。

濡れた舌と唇の交わりあう音は湯水が跳ねている音と錯覚させてしまうように浴場に響き続ける。

だが、エレナの腕がフェルダの胸を押そうと力を込めたとき、弾かれるようにフェルダは唇を放し、エレナの両肩を強く掴んだ。

「ごめん…！ごめん、姉さん…！俺は今姉さんにとっても酷いことを

してしまっ た……！姉にこんなことを強いてしまうなんて！ああ、俺は罪人だ。姉さん、俺を罰して。俺は姉さんに殺されるなら本望だ」

いきなりまくし立てて謝罪と後悔の念を露にしたフェルダに、戸惑っていたエレナは逆に自分が悪いことをしてしまったような気持ちにさせられ、今にも泣き出しそうな顔のフェルダの頭を労わるように撫でた。

「落ち着いて、フェルダ、私は怒ったりなんてしていないから。かわいそうに、疲れているのね。大丈夫。ちよつとびくりしてしまっただけだから」

「……そうですか？こんな愚かな弟を罰しないと？」

エレナが気付くはずもない。フェルダの変調に。彼の緻密な策略に。

「罰するだなんて……でもね、その、ああいうことをするのはちよつと……」

あたふたし始めてゆく姉の姿を湯煙越しにフェルダは黙って見下ろしていた。その口元がほんのり上がっていることにエレナは気付きもしない。

「ああいうこと、とは？」

「えっ、だからほら、貴方が今私にしたような……」

「弟が家族と湯浴みをすることは恥でしたか？」

エレナは慌てて顔を上げて首を振った。

「そのことではなくてっ、あのね、フェルダ、聞いて。ああいう…
…挨拶ではないキスは私にするものではないの。体を触ったりする
のも……そういうことは恋人とするものだと思うから……」

「姉さんに言いにくいことを言わせてしまう俺はやはり愚かな男で
す。でも、1つだけ、恥を忍んで俺に弁解する機会を与えていた
けますか？」

「え…？え、ええ」

「俺には心の底から愛している女性がいます」

エレナは目を瞬かせた。

「まあ……！」

すっかり気を抜いたその瞬間をフェルダは見逃さなかった。恋愛物
語が大好きで、人を気遣うことの出来る心優しいエレナにとってこ
の手の話題を持ちかければ目を輝かさなはずがないことをフェル
ダは熟知している。

彼の側近が聞けば、あからさまに嘘くさいと横槍をいれられそうな
フェルダの自称巧みな作り話は、あっという間にエレナを飲み込ん
でいった。

素直になれない姉の姿は実に官能的だ。

俺の裸を見ただけであんなに頬を染めてあからさまに顔をそっぽ向けてしまう。遠慮などしなくてもいいのに。俺の胸板から腹部に走る引き締まった直線を指でなぞりたいに違いないのに、内気な姉は俯いてしまう。そこがまた可憐で愛しい。

姉が男を知らないことは俺が誰よりも知っている。

俺が戦で城を空けている時は部屋に鍵をかけて不埒な者が入らないよう厳重にお守りしているし、俺がいなくて不安だろう長い戦の時は、そつと眠り薬を食事に仕込ませて、俺が戻るまで安心して眠っているようにしている。それでも俺がその目で確かめることができない限り姉に全く危険が及ばないとは限らないから、俺の直属の側近のシエンに姉の身の護衛をつけている。内密に。

姉にも専属の側近はいるが、あやつらは本来は要らない人間だ。何故なら俺が姉をお守りしているから。しかし王族にはそれぞれ側近をつけなければならぬ決まりがある。俺が国王になった暁には姉の従卒らは外すと決めている。シエンには俺と姉二人分の働きをしてもらわなければならないな。

姉さんは俺の隣で安心していればいい。

「俺が姉さんに誤解させるような行動をとっていたのは理由があったのです……その……いや、ああしかしあんなことを姉さんにお願

いするというのは……」

しゅんとしたような、しかしどこか恥じているような態度を見せると、エレナはもう弟を心配する姉としてやすやすとフェルダの顔を覗きこんだ。どこまでも優しい姉さんだ。

「なあに？ 私に遠慮をする必要なんてないのよ。何か悩んでいることがあるの？」

フェルダは苦しそうに眉を寄せ、エレナから顔を逸らした。

「ごめん、姉さん……俺には頼めない。それは姉さんを傷つけてしまつかもしれないから」

「そんなことない。大事な大事な弟だもの。私は貴方のためならどんなことでも力になってあげたいのよ」

大事を二回も言ってくれる。ああ、俺こそ貴女のためならば王位を捨てることも厭わない。だがそれは出来ない。将来を共にする姉さんに苦勞をさせるような暮らしをさせてしまうのはあってはならない。それに姉さんは俺が王になるのを心待ちにしてくれている。俺は貴女の期待に応えられる王になってみせるのだから。

「分かりました……ですが、その……」

「ん？」

フェルダはポツと顔を赤らめた。

「絶対に……笑わないでくださいますか」

「もちろんよ」

姉を覗き見ると、真剣な表情そのもので俺を見上げてくれている。こんなに想われている俺は世界一幸せな男だ。

フェルダはエレナにくるりと背を向け、背中を丸めた。弟の名を心配そうに呼んで背中に手を添えてくれる姉の気遣いがなんとも心地よい。

「さつきは……いえ、もう随分前から俺が貴女に嫌な思いをさせてしまっていたのはご存知でしょう」

「え……？」

エレナは首を傾げた。弟はいつも優しくしてくれる頼りがいのある子だ。どう記憶を辿っても嫌な思いなど浮かんでこない。

「その……姉さんの了解も得ずに口付けをしたり、体に触れたりしたことです」

「……あ」

たしかに家族がするような触れ合いの度を越した接触はここ最近で増えたような気がしていた。現に今の今も体に触れられて少し怖いとさえ思ってしまった自分がいた。

「俺は……女性とどう接してよいのか分からないのです……どれほどの口付けをすれば良いのか、どう……女性の体に触れてよいのか……」

そうだんだんと小さな声になってゆくフェルダに、エレナは心底いたたまれない気持ちになり、顔を歪めた。

「それで……卑劣な俺は……優しい姉さんを……利用して……」

口付けをしたり、入浴中に抱きしめたり、眠らせて夜に全裸にさせて愛撫したり、首からいつもかけている守り袋の中には気付かれなように切った姉の美しい髪の毛を一房大事に入れているのだ。

「俺にはさつきも告げましたが、愛している人がいます。ですが……そういったことには……少々疎く……かと言って、次期国王などと勝手にもてはやされてしまっている俺が女性の扱いを誰かに相談するなどとんだ恥さらしでしかない……だから俺は……」

性欲に目覚め始めた時から、行きたくもない城下へ忍んでゴミ漁りにも出かけたし、姉を想って湧き上がる欲をそやつらで代用したりもしている。あんな鼻の曲がりそうな匂いを体から放ち、我慢して快樂を与えているこっちの身にもなってほしいものだ。毎度行方を終えて城に戻るとあまりのあやつらの不快さに吐いたりもした。辛い日々。

それもこれも全ては姉に悦んでもらうための俺の苦行。

だがそれはまだ青臭いガキでしかなかった頃の話だ。今は女性の扱いなど手馴れている。技術もある。どんなゴミどもも俺の手の平で踊らせることができる。

姉さんには全身全霊で優しくして差し上げたい。辛くないよう、心配させないよう愛撫をして俺の愛を姉さんに注ぎ込もう。その日が

楽しみで、今も体が震えるほどの高揚を必死で噛み殺しているんだ。

「ごめん、ごめん姉さん……俺を軽蔑してくれてかまいません……でも…俺、愛する人に嫌われたくない……女性の扱いも上手くこなせない男など、男として恥でしかないんだ……っ」

「フェルダ……。その人をとて愛しているのね」

「はい、この世の全てに引き換えても」

姉さん、貴女のことを。

「貴方がそんなに悩んでいたなんて、私全然気付いてあげられなかった。ううん、それどころか、本当はさっき貴方をちよつと怖いとさえ思ってしまったの。駄目な姉ね……」

何？姉さんに怖い思いをさせてしまっていたのか。姉さんの愛情を軽んじてしまった己の未熟さが姉さんを怯えさせてしまっていたとは。ああそれでさっきの口付けで可愛い抵抗を見せたのだな。大丈夫、次はもっと愛を込めて丹念に愛撫するよ。

「そう……、いつも助けてもらっているのだから、私もフェルダの役にたたなきゃいけないわね」

「……いいのですか？」

くるりとエレナに向き合う。

姉さんも素直じゃない。でもだからこそ俺の愛する姉さんだ。

「……その、でも私なんかでいい練習台になるとは思わないのだけれど……フェルダの幸せのためなもの」

大丈夫。今までは遠慮していたけど、もう遠慮しないから。安心して身を任せてくれればいい。

「俺、頑張つて勉強します。姉さんが辛いと感じてしまう前に上達します……！」

フェルダは本当に、心から慕っている人を幸せにしたいと思つている。エレナはそう素直に気持ちを汲み取った。その真剣な気持ちを自分の身勝手な感情で断ることなど家族としてやってはいけないことだ。

そう思つてしまえば、今まで弟が執拗に触れてきていたことも納得した。

あれはいろんな世俗に縛られた弟の、私への必死の助けの合図だったというのに。

それに気付かず、ちょっとキスをされたり抱きしめられた程度で一人慌てて、まして怖いだなどと思つてしまつたりしていたなど、どうしようもない不甲斐無い姉だ。

弟の成長を手助けしてあげることが姉として大事なことだ。弟が恥じることなどどこにもない。そして私もちゃんとそれを受け止めてあげなければいけない。

「でもね……フェルダ。恥ずかしいから私も言えなかったのだけれど、私もその……男の人のことはよく知らないから……やっぱり驚

くと思うの。だから、突然……とか、人がいる前でというのは許してほしいの」

「もちろん配慮します」

フェルダはニツコリと微笑んだ。さっきまでの次期国王に似つかわしくない頼りなさげな少年の顔がまったく一変して今は余裕さえ見えるその顔にエレナは気付いていない。

ここまでくれば後はもう知略に長けているフェルダが主導権を握るのは容易い。女のことには初心者な子供のフリをして姉に公然の了解を得ることは、成人になったら行う計画の1つであった。それは今日見事に達成された。

これからはウブな姉さんにいろんなことを教えてあげよう。そして俺から離れては生きていけないほどに愛してあげるよ。

エレナはほっと胸を撫で下ろして小さく笑った。

「よかった……。これで最後に貴方へ恩返しができるのね」

「え？」

フェルダは肩を抱きすくめようと伸ばした両手を止めた。今、何か耳を疑うような言葉が姉の口から出たのは聞き違いか？

「私、もうフェルダの傍にいてあげられなくなってしまつから……」

がしつと両肩を掴んだ手の力の強さに、エレナの華奢な体がゆれる。あまりに理解不能な言葉にフェルダは口を動かすが、何を言っているのかまったく分からなかった。

「何、ですか、それ……」

姉が円らな瞳を悲しげに伏せて微笑んだ。何だ、その表情は。傍にいられない？俺の？

最後　　？

「貴方が成人になったように、フェルダ、私もお嫁さんになる時がやってきたの」

「　　な……っ」

駄目だ、まったく思考が追いつかない。頭が真っ白で姉が何を言っているのか理解できない。

嫁？貴方は俺の花嫁だ。形式上では無理だが、国王の座に就いた暁には二人だけで挙式をあげると決めている。いや、城の者は俺達を祝福してくれるだろうから同席させてやってもいい。そのことを言っているのか？しかしそれでは俺と離ればなれになるという姉の言葉と矛盾する。

「今から一週間後、私は……シユベール帝国へ嫁いでゆきます」

フェルダの両手がエレナの肩から滑り落ちた。

金龍王と呼ばれていたフェルダの父、クラウドはベッドに沈み込んでいる妻のエレノアの唇に軽く口付けると、ゆったりと体を起こした。

「妻との営みを見学でもしにきたか？お子様の我が息子」

壊れてしまうのではないかと思えるほどけたたましく開いた扉から、「父上！」と怒鳴りながら大股で入り込んできた無粋な息子は、両親が何をやっていた最中かなど全くお構い無しに近づいた。

廊下が何やら騒がしかったのは気配で分かっていたが、扉の前に控えている番兵を押しつけて入ってくる根性は褒めてやってもいいとクラウドは口端を上げた。

「息を切らしてこんな夜更けに王の寝室へ乗り込んで来た理由を聞こう。そして早く去れ。時間が惜しい」

クラウドは笑みを含ませた口調で言いながら金の長いまつすぐな髪をかきあげた。とても四十代とは思えぬ端正な上半身裸のクラウドの肉体は、ほのかに灯る蠟燭の明かりで何とも艶っぽく映し出されていた。

だが老若男女問わず誰もが魅了されるその肉体美を目の前にしても今のフェルダには一切見えていない。その瞳は怒りに満ちて血走っていた。

「姉上の結婚は今すぐ取り消してください！」

「それは無理だ」

「父上！」

クラウドは気だるそうに息をつく。

「見て分からねか。私は今、妻を愛でている最中だ。子供は空気が読めなくて困る」

「俺は子供じゃない！」

「そう食いつくところが子供だと主張している証だ」

「そんな話をしに来たんじゃない！俺は結婚の話なんて聞いていなかった！」

「聞いていればここへ邪魔をしに来なかったか？」

一瞬クラウドの鋭く細められた瞳を向けられ、フェルダは思わず体を強張らせた。金龍王の名はダテではない。まるで蛇……いや、まさに龍に睨まれた蛙の気分だ。

「姉上はどこにも行かない！結婚など……！父上は姉上をこのメンデルス国から追いやるおつもりか！それもよりによってあの……っ」

聖地シュベール帝国などと　　！

「……お前は姉を祝福してやらのか？16になったら女は嫁になる。それは女の夢だろう？」

「貴方が無理やり決めた政略結婚でしょう！そんな結婚のどこに夢があるのです！」

姉は俺と一生暮らすことこそが幸せの極み！俺がお守りすると決めているのだ。

「無理やりとは心外だな。私も娘の幸せを願う者の1人だ。だから私はエレナに最初に聞いた。結婚したい者はいるのかと」

フェルダは目を見開いた。いつの間にそんな会話をしていたのかと思うと腹立たしいが、政略結婚は父が一方的に決めたとばかり思っていた。

「そ、それは勿論……っ」

「エレナは“いない”と答えた」

今、フェルダの胸の中が鈍器で殴られたような感覚が走った。なんだろう、姉が結婚したい奴がないというのは安堵ではないのか。ではどうして。姉が俺の名前を出さなかったから……？

「しかし！それが政略結婚を強いる理由にはならない！」

シュベール帝国。あきらかに同盟を結び他国と差をつけようと画策しているのが見え見えではないか。

「あのような訳の分からぬ国と同盟など結ばずとも、すでにメンデルス国は他国より秀でています！それは貴方が確固たるものにし、今はこの俺がいる！俺をすぐに王にしてください！俺が五大国随一

の国家にしてみせます！」

その時クラウドの妻のエレノアが起き上がろうとしたが、「そのままでよい」と金龍王は首を振った。

「フェルダ」

クラウドが今までで一番鋭い声で名を呼んだ。だが今度は怯まない。逆に王の鋭い視線を跳ね返すほど父を睨み返した。

「お前はエレナを嫁に出したくないのか、王位が欲しいのか、どちらだ」

フェルダの中で何かが切れる音がした。

「姉さんも王位も俺のものだ……！どちらも手にいれる……っ！姉さんは……姉さんは俺が守る……どこにも行かせない……！」

クラウドが次の言葉を切り出す前に、フェルダは踵かかとを返し荒々しく部屋から去って行った。

後に残った静けさの中で、フェルダの母のエレノアがそつと身を起こした。

「あの子は私の血を濃く引いているのね……」

クラウドはエレノアを胸に抱き寄せた。

「そうだな。ケビンの血を受け継いでしまったようだ」

エレノアは「ごめんなさい」と小さく体を震わせクラウドの胸の中で俯いた。クラウドはエレノアの頭に頬を寄せ、体を優しく擦った。

ケビン

その男のことを思い出すのは何年ぶりだろうか。

ケビンは妻エレノアの弟だった。

だった。

そう、今はもうこの世にはいない。ケビンが死んだのはそう、今のフェルダの歳の時だった。

「フェルダ・・・あの子はまるでケビンの生き写しね・・・。あの子は娘を・・・エレナを愛しているわ」

エレノアはその事実を何となく認識していた。フェルダが物心ついた時にはもう感じていたのか、もう少し後だったか。息子がエレナに特別な視線を向けるようになったのは。

エレノアがそれに誰よりも早く気づいたのは、自分自身もまた、過去に同じ経験をしていたからだった。

ケビンは姉のエレノアを女としてしか見ず、愛した。だが異常とも言える愛情はやがて狂気になり・・・エレノアを強要した。

その時にエレノアをケビンの狂気から救い出したのが金龍王クラウド

ドだった。

エレノアとクラウドは愛し合い、クラウドの治めるメンデルス王国へと嫁いでいった。

愛していたエレノアが自分の手から消えたケビンは、絶望し、彼の故郷バハン王国の海を臨む絶壁から身を投げ命を断った。

「クラウド様・・・もしあの子が・・・フェルダがケビンのように弱い心を持っていたら・・・っ」

クラウドは静かに笑う。

「エレノア、君は1つ忘れていることがある」

「え・・・」

「フェルダはたしかにケビンによく似ている。だが、フェルダの体には私の血もまた半分流れている。どういうことか分かるか」

エレノアは顔を上げた。

「私が人一倍あきらめの悪い男だということは、君をさらった時に嫌というほど思い知らされただろう？」

クラウドはニヤリと笑って、泣き出しそうなエレノアに口付けた。

エレナはぼんやりした頭で目を覚ました。

朝の匂いを含んだ微風が頬を撫でている。窓が開いているのだろうか。風が吹いて来る方に顔を向けると、弟のフェルダがじっと佇んでいた。

朝の清らかな日の光りを浴びて輝きを放つ髪がそよよと優しくゆれている。フェルダはエレナが目を覚まして自分を見ていることに気付いていないのだろう、窓辺にもたれかかり腕組みをして外を見つめていた。

こうして黙って立っていると彫像のようだと、エレナは声は出さずに微笑んだ。

愛すべき弟という鼻肩目を差し引いても、フェルダはとても端正な容姿をしていると思う。風に揺れる金の髪、長い睫毛の奥に輝くスカイブルーの爽やかな瞳。着衣の下に隠れている無駄のない筋肉で引き締まった体。まだこれからもどんどん伸びてゆくだろうすらりとした身長はいつ追い越されたか。

そしてメンデルス国の民からの厚い人望がこの子にはある。誰からも愛される優しく頼もしい弟に育ってくれて本当に姉として嬉しい。将来のメンデルス国もフェルダによって幸せがもたらされるだろう。それを私は遠く離れたシュベール帝国から見守り続けよう。

フェルダがこちらを向いた。

「おはようございます、姉上。昨夜は急に取り乱してしまい申し訳ありません」

さつきは気付かなかったが、こちらへ歩いてくるフェルダはどこか疲れたような顔をしていた。気のせいだろうか。エレナも身を起さず。何も身につけていないのに気付いて、少し焦り気味に枕元にあったガウンに手を伸ばした。

「私、いつの間にか眠っていたのね。昨日湯浴みをしていて…そう、あの話をして…」

シュベール帝国へ嫁ぐという話。

その後フェルダが突然エレナの手をとって浴場から上がると、エレナをタオルで包み、そのままこのベッドへ運んだ。

部屋に香が焚かれていたような気がする。とても心が安らいで、そのまま眠気が押し寄せてきた。そして今日覚めたのだ。

フェルダはずっとこの部屋にいたのだろうか。でもフェルダは眠っていないような顔つきをしている。泣いた？ いや、それは気のせいだろうかと思うが、何故か口に出せなかった。

「姉さん、ごめん。俺が不甲斐無いせいで姉さんがメンデルス国のために犠牲になるうとしていたなんて、俺はちっとも気付かなかった…っ」

犠牲？エレナは首を傾げる。

たしかに、父は私にシュベール帝国との同盟を実現させようと私に結婚を持ちかけた。私だってできれば好きな人と恋に落ちてその人と結婚したいなんていうささやかな夢がなかったわけではない。

けれど、16になると女は嫁いでゆくことは分かっていたし、それまでに好きな人を見つけたことができなかったのだから、仕方のないことと言えばそれで終わってしまうのだが、しかし犠牲というのは少し違う。

結婚式の当日まで夫となる人の顔を知ることができないのが不安でないと言えば嘘になるが、その実、心のどこかでわくわくしている自分がいることも確かだった。

最近読んだ恋愛物語の中の少女が、知らない国へ継ぐことが決まって悲しみに暮れたが、嫁いだ先で初めて見た夫となる男が素敵な殿方で、少女は一目惚れをし、向こうも少女を愛し、一生幸せに暮らしたという結末で終わった。

そんな単純だけどこか憧れてしまうような夢物語がもしかしたら自分にも起こるのではないか。物語はあくまで物語と分かっているとしても、淡い期待をどうしても捨てきれない。

フェルダがベッドに片膝を乗せ、エレナの頭を胸にかき抱いた。

「父は自分の考えを曲げない。話にすらならない。このままだと姉さんは父の思うつぼだ。姉さんが辛い思いをする必要はありません。絶対に俺が何とかします。姉さんは俺が守って見せる。」

最悪、父と対峙することになったとしても。

強く抱きしめるフェルダに少し苦しそうにエレナは顔を上げた。

「フェルダ、待つて。私のことを心配してくれるのはとても嬉しいわ。だけど、これは私が決めたこと。お父様はちゃんと私の意向を聞いてくれた。だからカタチは政略結婚かもしれないけど」

「政略結婚以外の何者でもない！」

「フェルダ……」

扉を叩く音が聞こえ、フェルダの側近シエンが入ってきた。

「おはようございます。フェルダ様、朝食をお持ちいたしました」

エレナを抱きしめたまま動かないフェルダに構わず、シエンは粛々とテーブルセッティングに取り掛かった。今朝の我が君はすこぶる機嫌が悪いようだ。理由は分かっている。だが側近が口を出すべきではない。従者は常に主の決めたことに従う。たとえそれが間違っていた道だとしても。

「フェルダ様、本日の予定ですが、軍事会議が昼まで、夜はスタッドマン伯爵家主催のフェルダ様の成人の祝賀会となっております」

「そんなものは中止にしろ」

「かしこまりました」

「フェルダ、駄目よ、スタッドマン様のご好意をお断りするなんて」

「姉さん、俺はやるべきことがあるのです。姉さんは何も心配しないで。さ、朝食をおとり下さい」

フェルダはエレナの手を引いてベッドから下ろすと、丁重に席へ促した。テーブルの上には二人分の食事があったが、フェルダは向かいの席には座らず、扉の方へ歩いてゆく。

「貴方は？」

フェルダは振り返るとニツコリと微笑んだ。

「姉さんと一緒に朝食をとりたいのは山々ですが……。また、来ます。シェンをここに置いてゆきますので、何かありましたら奴をこき使ってください」

え、とシェンは小さくぼやいた。

「そう。残念ね」

「では」

フェルダは去り際、扉の傍に控えているシェンに「姉上をここから出すな」と耳打ちして出て行った。

1人ぽつんと残されたエレナは目の前の朝食を見つめながらフェルダのことを考えた。

弟の様子がおかしかった。それは自分の結婚の話と関係しているのだろうと思う。

あまり無茶をしないでほしい。弟は優しすぎるから何をしようとしているのか心配でしかたがない。

私が嫌々嫁いでゆくと思ひ込んでいる。多分何を言っても信じてくれないだろう。

何故ならあまりにも分かりやすい政略結婚だから。もし他の国や国内自治区のどこかへ嫁いでゆくのなら、弟が反対するのならば、少し婚期を遅らせてもいいと思う。弟は次期国王となる身。できれば弟の利益になるところへ、弟が薦める国へ嫁いで微力だけれど力になつてあげたい。

それとも、聡明な弟のことだ。もしかすると私がシュベール帝国へ嫁いでゆくことに何らかの良からぬ事情が発生するのだろうか。だから反対をしているのか。

エレナは扉の傍で石像のようにじっと立っているフェルダの側近に顔を向けて微笑んだ。

「一緒に食べませんか？せっかくのお料理がもつたいないわ」

9（後書き）

アクセス、お気に入り登録、心より感謝申し上げます。

もう何十分も口を開かず円卓に広げられた世界地図と睨み合いを続ける次期国王は、戦線においては総司令官も務めておられる。

五大国が平和協定を結んでから大戦と呼ばれるほどの戦争はなくなり、現国王も今は相談役に回り、すっかり息子に任せきりである。

現国王がもう年老いて剣を振るうだけの力がないというのはまったくの誤解だということは先に言っておく。四十路を回られたとはいえ、国王の腰に威厳を放って据えられてある剣が鞘から抜かれた時、おそらく目の前の人間はどんな強者であるとも、あの世を拝むこととなる。

たとえ、こうして若い身空でありながらすでに我々部隊長を魅了するほど輝きを放ち、導いて下さっておられるフェルダ様であろうとも。

「遠いな」

ようやくフェルダの口から漏れた一言によって円卓を囲んでいた十数人の部隊長も気を引き締め、地図を見下ろした。

フェルダの左に座っていた副指令のゴーカートンが指棒をメンデルス国にあてた。

「ここが我々の出発地点。そして」

指棒は聖地シュベール帝国を通り越し、メンデルス国と対極の位置にある場所で止まる。

「モツアト国、か…」

誰かが重い息を吐きながら呟いた。

「遠いな」

もう一度呟いたフェルダに呼応して、別の部隊長もまた重い口を開いた。

「最短ルートは海岸に沿ってゆくことですが、馬で休まず走っても到着までに三日はかかりましょう。内海の激流さえなければ船で一直線…なのですが」

それは無理な話と誰もが分かっているが、皆うんうんと口を曲げて頷く。すでに内戦が始まっている以上、確実に最速ルートを確保し、早ければ明日明後日には出立しなければならない。

遠く離れた国の混乱に他国であるメンデルス国が介入することは今に始まったことではない。

メンデルス国は高い軍事力を備えているにも関わらず、国内においての内乱がまったくと言っていいほど起こらない。すなわち宝の持ち腐れ状態を他国が放っておく筈もなく、内乱を早く鎮めたい国家がメンデルス国に軍を要請してくるのだ。

皆がフェルダの意見を伺うべく注目した。

「フェルダ様？」

「遠い。遠すぎる。船で一日だと？」

「は？」

ゴーカートンが困惑したような面持ちでフェルダを見上げる。フェルダは円卓に手について腕を震わせた。

メンデルス国からシュベール帝国まで最低でも一日もかかるような孤島へ姉さんは連れて行かれるのか。

いや、それはなんとしても阻止するが、しかしどう考えてもシュベール帝国との同盟が我々にそんなに有益になるとは思えない。連絡をとる手段として片道一日もかかるような場所と同盟してなんになるというのか。それならば隣国であり母上の故郷でもあるバハン国と同盟を結んだ方が断然強固になる。無論それは例えばの話で、バハン国はすでに友好関係にあるし、姉さんを嫁がせるなんてことはありはしないが。

フェルダは唇を噛み締め円卓に拳を押し付けた。

「くそ……っ、絶対に阻止してやるぞ……！」

フェルダの異様な意気込みに部隊長達も気圧され、士気を上げた。

結局軍事会議は昼過ぎに終わり、フェルダは早々エレナの部屋へと向かった。正確には、エレナに会うためではない。彼女が部屋から

連れ出されないように見張りをさせている側近に用があった。

軍事会議では姉のことばかりに頭がいつて、本来の会議内容など終盤までまったく耳に入っていなかった。

しかしその内容が重大なものだった。

それは自分と姉に神が試練を与えているとしか思えない。神といえはこの世界ではシュベール帝国の女神が崇拝されているが、今の自分にとってあれは疫病神ではない。

エレナの部屋の中から彼女の楽しそうな声が聞こえていた。何だ？誰かと話をしている？

少し苛立ちを覚えながらフェルダは乱暴に扉を開けた。

「姉さん！」

フェルダは息を呑んだ。

天使がいる。

ふんわりとした純白のドレスに身を包んでいる天使。白金の髪を結い上げ、白いうなじが露になっている。

天使がこちらを見た。

「あ、おかえりなさい、フェルダ」

どうしようもない敗北感だった。認めたくない。だがその衣装は彼

女にとってもよく似合っていた。

ウエディングドレス

あまりに輝かしくて、眩しくて、こんなに近くにいるのに、空に浮かぶ月のように手が届かない。

「綺麗だ……なんて美しい……」

エレナは少し照れた様子で微笑んだ。すぐに抱きしめたい。そして露になっている首筋に、肩に、鎖骨に唇を滑らせたい。

だがとりあえず

「何故お前が姉さんの手をとっている」

エレナの隣に寄り添うように立っているシェンを思いきりぶっ飛ばした。

フェルダ王子の分の朝食を何故か私に食べさせたエレナ王女と穏やかな時間を過ごしていると、仕立て屋と侍女が現れ、王女の婚儀の衣装を合わせ始めるからと男の私は強制撤去されようとしたが、フェルダ王子の勅令により王女の傍を離れることを許されない旨を告げ、侍女らに虫を見るような目で見られつつも開き直ってその場に居座り（一応背は向けた）、お衣装を身につけられたエレナ王女が私を呼んで手を差し出されたので、その手をお取りすると、王女は私を見上げ「結婚式の時はこんな感じで旦那様と立つのかしら」と仰られた時、ちょうどフェルダ様がお越しになられたのです。

という事実を言うともう一発理不尽な拳が飛んでくること必至なので、シェンはヒリヒリと痛む頬を擦りながら口を噤んだ。

むしろ言うつもりはない。何しろ今の弁解のどこを抜粋しても、王子に殴られない部分が見当たらないからだ。

一発だけで救われた、と言った方が正しかった。

フェルダは側近のシェンを王女の部屋から連れ出した。もしや軽く1時間追及が始まるのではと、嫌な冷や汗が流れたが、どうやらその予想は外れた。

軽く2時間だった。

「こんなことをお前と話している時間はないんだ」

シェンの頬の痛みもいい加減抜けた頃、突然フェルダは腰に手をあて、険しい顔つきに変わった。

小2時間険しいことに変わりはないが、この表情は違う。これは総司令官の顔つきだ。これは先ほどの軍事会議で何かあったのだと即座に見抜き、自分も気持ちを切り替えた。

「モツアト国で内戦が勃発している」

シェンはすぐに脳内に世界地図を広げた。このメンデルス王国から聖地シュベール帝国を挟んで向かい側に位置するのがモツアト国だ。モツアト国は100を超える自治区に分かれており、首都は内海沿いにある。

「は、あの砂漠が国内の3分の2を占める国、ですか。モツアト国から要請が？」

「うむ。規模は1万と見ている。俺も出向かなければならぬ大戦だ」

内乱介入要請があった場合、小規模のものであれば、次期国王のフェルダがわざわざ出向く必要はない。フェルダの下には精鋭部隊がある。大抵は精鋭部隊までで事なきを得ているが、一万人規模となると、総司令官でもあるフェルダが大軍を率いて出向かなければならない。

フェルダはようやく成人となったばかりの若さだが、8歳で初陣の指揮をとって以来、その采配ぶりは重鎮から一兵卒に至るまで誰もが認めている。フェルダは金龍王の才能を余すところなく受け継いだ天才だ。

シエンはやや安堵した表情を浮かべる。

「フェルダ王子が先陣を切られるのであれば、すでに内乱は鎮圧したも同じ。一万であろうが問題ではありませんまい」

「いや、問題はそこではない。シエン、お前に何故この話をしていいのか分かるか」

こういう相手に疑問を放り投げる口調も金龍王ゆずりだな、とシエンは心の中で微笑みつつ、フェルダに頷いた。

「貴方の背ならばいつでもお守りいたします」

フェルダは苦々しく笑った。

「年寄りにすまないな」

「まったくです」

「時間が足りないんだ。どう見積もっても姉さんの婚儀までに帰途することができない」

「王子……」

フェルダはどこに持ってゆけばいいか分からない怒りに震えた両拳をシエンの胸に押し付けた。頭1つ分背の高いシエンは主のやりきれない思いを心痛な面持ちで見下ろした。

フェルダ王子はなんとしてもエレナ王女の婚儀を阻止するおつもりでいる。だがそれを阻むように戦が起きた。それも往復で一週間以

上かかる遠い地だ。

王子の実力ならば一万は問題ではない。しかし時間が必要だ。だから王子は私を頼られた。私はかつて金龍王の側近であった。配属は隠密部隊。いわゆる、表の側近達が精鋭部隊であるならば、裏の側近が隠密部隊というわけだ。

私はその部隊長だった。フェルダ王子のお守りをするようクラウド王から命ぜられた時は、まだ首の据わらない赤子を抱いた両手が震えたのを覚えている。俺が20歳の時だ。懐かしい記憶。

私が王子と共に戦場へ立ったのが王子の初陣の時。

それから大戦要請があると私は王子と共に戦場を駆けた。王子が太陽ならば、私は王子の影。我らの行く先に敗北の文字など存在しない。

戦争の渦中、時には敵に包囲されることもあったが、背中合わせでひそひそ交わす言葉は「早く終わらせて姉さんの元に帰りたい」だった。王子は不敵に笑っていた。

「フェルダ王子、私の方からもクラウド王にエレナ王女の婚儀を遅らせるよう進言してみましよう。戦の方は問題ありません。最短で終わらせ、一週間ジャストで凱旋しましょう」

「・・・お前には苦勞をかける」

シエンは笑った。

「今に始まったことはありません」

さて、忙しくなるな、とシェンは久しぶりに胸を高揚させた。

出陣を明朝に控え、フェルダはエレナの部屋で二人きりの夕食をとった。

いつもは王族専用の部屋に両親と四人で食卓を囲むところだが、フェルダはとてもそんな気になれなかった。

今は父の顔など見たくもない。姉と俺の仲を無理やり引き剥がし、王の権力を振り翳して卑怯な策略を企てた父を初めて憎いと思った。なんとしても姉を救わなければならない。姉はいつも自分を犠牲にして他人のために生きようとする。

政略結婚を嫌な顔1つ見せず受け入れているのも、父……メンデルス国王のためだ。この国のために姉1人が犠牲になる。

フェルダはテーブルの下で拳を握り締めた。

今すぐにでも姉を救いたいのに、今の俺では何もできない。父が現国王でいる限り、いくら次期国王と言えど俺には父の命令を覆す権限がない。もし俺が国王ならば、姉さんを俺の妻にし、シュベール帝国が我が国に必要なとあれば、何なら武力行使に出て制圧しても構わない。とにかく父の強引で姉を傷つけるやり方がどうしても許せなかった。

刻一刻と姉と離れてしまう時間が迫っているというのに何の答えも見出せないまま、気がつくと夕食は終わり、テーブルはいつの間にかきれいに片付いていた。どうやら周りが見えないほど混乱してい

るようだ。姉さんとの楽しい食卓すらあまり記憶に残っていないほど、今の俺は余裕がないのが自分でも分かる。

「すみません、姉さん…、貴女を楽しませるような食事にして差し上げられなくて…」

エレナは優しく微笑み首を振る。その表情は慈悲深ささえうかがわせる聖母のようだ。それはフェルダをさらに落ち込ませる要因にもなった。

「そんなことないわ。それに…貴方は明日から戦いに赴くのですもの。私の方こそ、こんなところで大事な時間を費やしていて何だか申し訳ないわ」

「姉さん」

我知らず俯いていた顔を上げた。何故、俺の姉はこんなに人を思いやれるのか。

姉は自らを犠牲にして結婚してしまう。こんな時に。こんな時に俺は傍にもいられない、何もできない…！

エレナは目を見張った。自分を見つめるフェルダの青の瞳から大粒の涙が零れ落ちていた。急いで席を立つと、フェルダの傍へゆきハンカチでそっと涙を拭ってやった。その手をフェルダが掴む。

「姉さん…っ。姉さん…っ。俺は…っ」

エレナは涙を止めない弟に、心配そうに顔を歪め背中を擦った。

「フェルダ、どうしたの、大丈夫…大丈夫よ。ね、だから泣き止んで。姉さん、傍にいるから」

「傍にいて…傍にいてほしいんだ…っ」

フェルダはエレナの背中に両腕を回してその胸に顔を埋めた。勢いでハンカチが床に落ちる。

戦の前になるとよく弟は不安定になっていた。おそらくまた今回もその類なのだろう。そして、自分の婚儀に弟の参列が間に合わないことをエレナは感じ取った。それは今日で一緒に過ごせる日が最後ということの意味している。弟は姉を慕ってくれる本当に心の優しい子だった。きつと、弟は姉と離れることを寂しがっている。その二つの不安が涙を流させる原因になっているのだろう。

エレナはフェルダの柔らかな猫毛の頭を優しく撫でた。

「ええ、傍にいるわ。大丈夫よ。よしよし、いい子いい子…」

「違う！」

エレナの手を払いのけるようにして立ち上がる。フェルダの射抜くような瞳からエレナは目が離せず、思わず一歩後ずさった。

「姉さん…俺は…」

「フェル
」

フェルダはエレナに覆いかぶさるようにその華奢な体を強く抱きしめた。頬をエレナの頭に擦りつけると、愛しさが無限に込み上げて

くる。

「フエ、フェル…っ」

「離れたくない…っ、離したくないんだ…！」

「フェルダ、落ち着きなさい…っ」

「俺の傍から離れないで…っ、お願いだ、姉さん。俺の傍にいて。結婚なんてしないでいいっ、俺が守るから、ずっと一生守るから…！」

今離れたら、きつともう全てが終わってしまう。フェルダはそんな気がしていた。

戦を無視することはできない。婚儀を破棄させることもできない。

「姉さんがいなくなったら俺は…狂ってしまう…」

フェルダはずるずるとその場に崩れ落ちた。

「フェルダ…」

エレナは膝を折って、フェルダの頬に流れ落ちて止まない涙を指で拭いた。その手の上にフェルダは手を重ね、エレナの頭を引き寄せ、口付けた。

何かを言おうとして思わず口を緩めたエレナの中にフェルダの舌が侵入した。エレナは思わず体を強張らせ顔を引こうとしたが、逆に力強く頭を押さえられ、体もフェルダの腕に捕らわれ身動きができ

なくなってしまった。

「ん…あつ、フェ…んっ」

待つて、と口を動かすとまるで自分も口付けを堪能してしまっているかのような唇の動きになってしまい、それはフェルダの口付けをいっそう濃厚にさせた。エレナは両手を精一杯フェルダの胸に押し当てるが、壁のようにまったく動かない。

フェルダが唇を離すと、エレナは苦しそうに息継ぎをした。だが、エレナの呼吸も落ち着かぬまま、フェルダはエレナの体を抱き上げ、ベッドへ仰向けに寝かせると、そのままエレナの体を挟むようにして覆いかぶさった。それにはさすがのエレナも瞳を大きく見開いて驚いた。

「フェ…ルダ…」

「姉さん……ごめん」

「フェルダ…！待つ　！」

耳の奥底で姉さんの悲鳴が聞こえたような気がした。

だが、俺はそれをどこか他人事のように聞き流した。

今はただ、姉さんの燃えるように熱い肌と香気で我を失いこの柔らかな白い肌に喰らいつく獣。

獣だけど涙が止まらないんだ。

嬉しいのか悲しいのか分からないんだ。

ああ、あんな演技するんじゃないかった。

どうせ姉さんをこんなにするなら、めいいつぱいの愛を囁いて、照れて真っ赤になった姉さんを抱けばよかった。俺、初心者じゃないよ。姉さんを愛するためになんだったよ。

俺、優しくするって決めていたんだ。

だから涙が止まらない。

こんなに俺は悪魔だった。

姉さん

姉さんの中、俺を溶かすほど熱いよ

山肌から日の出が薄っすら顔を見せ始める中、城門広場では精鋭部隊長率いる軍隊がすでに整列し、待機していた。総数500。一部隊100人を率いる部隊長が5人。いずれも他国から一目置かれていたエリート達だ。

その部隊長達が絶大な信頼を寄せているのが、御大将フェルダである。ようやく皆が待ち望んだ若き総司令の成人は、この戦においても圧倒的な士気を上げる要因にもなった。

誰かが噂をする。

もしかすると、フェルダ王子は金龍王を凌ぐ国王になれるのではないかと。

突如城門広場にどよめきが起こった。

城から白馬にまたがって出てきた若き青年に、皆が刮目した。

「おお、なんとご立派なお姿か…」

部隊長の1人が感極まったように呟きを漏らした。それに同調して頷く者、同じ言葉を心の中で漏らす者、はたまた一兵卒に至っては魅了され時を止める者がほとんどだ。彼のもはやトレードマークでもある白のハチマキは、戦う前からすでに勝利の印のように、堂々と風にたなびいていた。

さらに、フェルダの後から彼の直属の側近であるシェンの姿が現れると、どよめきは一層尾を引いた。

この側近は軍隊には所属しておらず、簡単に言えばフェルダの世話役のような役職であり、戦士ではない筈なのだが、大きな戦になるとひょっこりフェルダにひつついてくる不思議な人物である。

というのが端兵や、ペーパー兵達の見解である。

彼が昔、金龍王の側近で、裏で暗躍する隠密部隊の隊長であったことはあまり知られていない。総司令官がフェルダに世代交代したように、兵士達もまたこの数年で世代交代している。親が金龍王と共に戦場を駆け巡っていた戦士であれば、その息子はシェンのことを伝え聞いているだろう。彼が隊長クラスの實力を兼ね備えた人物であるということ。

しかしその他のペーパー達には、彼がこうしてフェルダの右腕となっているほど實力を持っているのに、何故部隊長になっていないのか、それどころか彼は軍隊所属ですらもないというのが理解できないらしい。

だからシェンはよく「不思議ちゃん」というネーミングで囁かれたりする。無論当人がそんな可愛らしい愛称をつけられていることなど知る由もない。

ただ1つ確実に言えることは、この戦いに赴く兵士達は皆、フェルダと不思議ちゃんが戦前に立ってくれるということがとてつもない心強さになるということだ。

時は総司令官フェルダが城門広場へ登場する数刻前に遡る。

フェルダはいつものように、幅広の白布を大雑把にぐるぐると額に巻きつけ括り付けていた。シエンはそれを斜め後ろから黙って見つめていた。

フェルダの顔はすでに戦士としての表情に変わっている。戦況を見据えるまっすぐな瞳。軍隊を率いるトップの風格。

それをいつもは子を思う親のような眼差しで、しかし眩しく見つめていた。だが今はその姿を見るのが心苦しい。そして己の無力さを憎まずにはいられなかった。

「お前が私に無茶を言っ^つて来たのは何年ぶりかな」

金龍王の前で跪いたシエンは、冗談めいて言い放った国王にも表情を変えず、まっすぐな瞳を向けていた。

「たしかに、フェルダ付きとはいえ、一臣下にすぎぬお前の願いをやすやす叶えてやるほど、国王たる者は安易であってはならん。1つ間違えれば、処罰は免れぬ非礼にもなりうる。お前はそれを承知で私の元へ来たのか？」

国王クラウドは玉座に肘をついて階下のシエンを見下ろした。

「私の首1つで我が主の望みが叶うのであれば、どんな非礼もいたしましょう」

「ふつ、相変らず恐れを知らぬ態度のデカなことだ」

クラウドは無礼な態度のシェンを咎めるどころか、楽しそうに鼻で笑った。

シェンはクラウドが20歳の時、彼の隠れた才を逸早く見抜き、側近として傍に置いた男の1人だ。

黒い前髪は11才だった彼の紫水晶の瞳を覆い隠していたが、クラウドは自ら切り刃を持ち、シェンの前髪をばつさり切った。当然ガサツに切られた前髪はシェン少年の顔を滑稽に見せたが、クラウドは「これで男前だ」と言ってニヤリと笑った。今日では前髪を真ん中で分け、後ろも肩にとどかない短さに切りそろえている。柔らかな猫毛のフェルダと違い、雨が降ってもうねることのないさらさらの直毛が、端正な顔付きを一層際立てた。

シェンはクラウドに頭を垂れた。

「非礼も承知、無茶も承知。クラウド王、どうか！エレナ王女のシユベール帝国への婚姻を破棄していただきたく…！」

「ほう、大きくでたな」

「それが最もの願いでございますれば」

「フェルダは延期を望んでいたのではなかったのか？」

シェンは顔を上げた。何もかもお見通しというわけか。さすがに五

大國一と謳われる金龍王に隠し事はできないようだ。

「はい、たしかにフェルダ王子は延期を訴えられておいででした。無論、破棄を前提としてのこと。ですから率直に述べさせていただいた所存です」

「そういう余計な気の回しも昔と変わらん」

「恐れ入ります」

クラウドは笑うが、シェンは一向に笑みを見せない。これは相当本気のような、とクラウドはおどけるように肩をすくめた。

「お前も明日の準備で時間が惜しいことだろう。こんなところで油を売っている暇などないのではないか？」

「ご心配には及びません」

「たしかに。すでに戦闘装束の身なりでここへ来たあたり、後は朝が来るのを待つだけのようだ」

シェンはいつも平服でフェルダに仕えている。しかし今の身なりは普段の彼とは全く想像できないほど別人のようであった。

闇に溶け込むような黒装束。その腰には細身の剣が両脇に一本ずつ。それは金龍王の側近として暗躍していた隠密部隊長の頃の姿そのものだった。フェルダのお守り^もをするようになって隠密部隊も解散し、彼を知る重鎮達は、シェンはすっかり丸くなったと口を揃えて言うかもしれないが、シェンの放つ闇色の気はまったく衰えていなかった。それは未だ最強で居続けるクラウドの目が見抜いているのだから。

ら、真実だ。

「お前をフェルダ付きにしたのは失敗だったかな」

「私の話はもう結構でございます。王、どうか我が願いをお聞き入れいただきたい」

クラウドは頬杖をつきながらため息を吐いた。

「早く奴は婚期を逃す。だからか、お前がいつまで経っても妻を娶れんのは。どうだ？エレナを嫁にでもするか」

シエンは啞然となるほど驚愕して顔を上げた。

「なんだ、まんざらでもないか？私は反対しないぞ。お前のことは私が一番よく知っている。お前になら喜んでエレナをやろう」

「クラウド王！！」

怒りの感情が押さえきれず、シエンは立ち上がった。

「あ、貴方は何を仰っておられるのです……！？エレナ王女はシュベール帝国との同盟のために嫁いでゆかれるのではないのか！？それはもう揺るがぬ契約ではなかったのですか！？」

「揺るがぬと分かっているのにここへ来たお前はなんだ？言うてみる」

「ぐ……っ！」

シエンは押し黙る。あまりに正論で、己のやっていることが無駄でしかないことが分かつているからこそ、どうしようもない怒りと悔しさで何も言い返せない。

「延期……も無理なのですか。せめて、フェルダ王子が戦からお戻りになられるまで……っ」

「ほう……妥協に走ったか」

「クラウド王……、私は貴方と昔のように他愛のない押し問答をしに参ったではありません。何故……何故貴方はエレナ王女をシュベル帝国に……いえ」

シエンは顔を上げた。

「何故、フェルダ王子からエレナ王女を引き離そうとするのです！」

クラウドとシエンの間に痛烈な沈黙が走った。

言葉に出せない。しかしはつきりと二人は意思疎通する。その言葉の本当の意味を。

フェルダが姉に対し恋愛感情を抱いている事実を

クラウドが先に口を開いた。

「お前はエレナをもらってくれる気はないか」

「クラウド王……！！！！」

「まだ分からんか、シェン」

クラウドの鋭い一喝に、シェンは体を強張らせた。

「シュベール帝国のような辺境地へエレナをやるのも、エレナをお前にやっても良いと言ったこともすべて、フェルダからエレナへの思慕を諦めさせるが故だということを」

「王……」

シェンはがくりと床に両手をついた。

「フェルダ様のエレナ様への愛情は真実のものです……それでも」

「それがエレナも同じように同じだけの愛情を持ち、フェルダへ返していると言えるか？」

「そ……それは……」

シェンはすでに心が折れていた。一縷の望みを捨てずに訴えていた己のなんと滑稽なことか。娘を思う1人の父親を自分如きが説得できる筈もない。

王は決して王女を政略結婚の道具にしようとしたのではなかった。そして私に王女との婚姻を持ちかけたのも、あれはおそらく本気であったのだろう。

姉のエレナ王女を弟の執拗な愛情から逃がすことこそが王の、いや、父親の役目であると、自ら憎まれ役となってまで娘を助けようとしたのだ。

それはやはり、王はあの事と重ねておられるからだろう。

エレノア王妃と、その弟君であられたケビン殿の事を

あの事件は表には知られなかった歴史の1つだ。

私がそれを知っていたのは、私はその頃にはすでにクロウド王の側近を勤めていたからというのもあるが、ケビン殿からエレノア王妃を引き離すために向かったクロウド王の補佐に就いたのが私だったからだ。

愛する姉を奪われ孤独になったケビン殿はその後、絶望に我を失い、海へ身を投げ命を絶った。

しかしだからと言って、フェルダ王子がケビン殿と同じ過ちを犯しているとは思えない。

私は王子が産まれた時からずっと見ている。

王子がエレナ王女に恋心を抱き始めた時も知っている。フェルダ王子の心は本人にしか分からないが、それでも私の知る限り、フェルダ王子とケビン殿は同じ道を歩んでいるようには見えないのだ。

だからフェルダ王子の行き過ぎた愛情も見守ることができた。たとえば、エレナ王女がそれに応えるのであっても、私は一生お二人をお

支えるだろう。お二人の絶大な人望を考えれば、民衆さえ二人を祝福してくれるかもしれない。

それでも王はやはりフェルダ王子からエレナ王女を引き離そうとお考えなのか。

「話は終わりだ。明日へ備え、下がるがいい」

「クラウド…王……」

なんと

なんと私は無力なのだろうか

その後、私の足はそのままフェルダ王子を探し、やがてエレナ王女の部屋へと辿り着いた。

そこで部屋の中から聞こえたエレナ王女の悲痛な声に、私はただ愕然と崩れ落ちるしかなかったのだ

ハチマキを締め終えたフェルダの顔がどことなく笑っていたように感じ、シエンはたまらず聞いてみた。

「フェルダ王子？何かありましたか？」

言った後で、失言だったと悔いる。何かあったかなど。もう手遅れだというのに。

「ん？……いや、何も…ないよ」

笑った

いや、泣きだしそうなのか、悲しいのか。

王子は今、何を考え、何を嘆いておられるのだろうか。王子は私の無力に何も言わず、咎めもしてくれなかった。王子の優しさが何より心苦しかった。

フェルダは風に旗めくハチマキにそつと触れた。長い睫毛を伏せ口元を上げる。

「俺が目覚めた時、この白布が俺の手首に巻かれていたんだ」

巻かれていた

誰かが巻いた。それはつまり

「なあシェンよ、悪魔にも天使は慈悲というやつをくれるのだろうか……」

「悪魔も誰も彼も、天使はご慈悲を与えてくださるでしょう」

「……そうか」

フェルダ王子はそれだけ独り言のように呟くと、もう口を開かなかった。

彼の頭にいつも巻かれている白布は、初陣の時からいつも彼の姉であるエレナ王女がお守り代わりに差し上げておられたものだ。

きつと王女は今でも……弟の身を案じて止まない心の美しい天使なのであろう。

シェンは祈るように目を閉じた。

出発の呼び出しがかかるまで、エレナは私室で1人座っていた。

こうして黙って静かに目を閉じていると、人というのはどこまでも記憶を呼び起こせるものなのだと、遠い昔を懐古しながら微笑んだ。

初めて城から出て、城下町を見たのは6歳だっただろうか。父に抱かれ馬という乗り物に乗ったのもそれが初めてだった。5歳の弟はその時すでに1人で馬に乗っていたと思う。父の乗る馬の後を、遅れまいと必死でついて来ていた。

それから初めての舞踏会は13歳だった。胸に大きな花のコサージュがついた桃色のドレスを着て、倒れるのではないかと思うほどドキドキしながら、しかしワクワクしながら社交場の階段を上った。

その時にエスコートしてくれたのは弟だった。たしか予定ではゴートン伯爵の子息がエスコートをする予定だったと記憶している。しかし、その人は当日、体調不良ということで、急遽弟が替わりを引き受けてくれたのだ。弟もこの時が初めてのデビューだっただろうに、緊張していた私をちゃんと支えてくれた。

ああそう、とエレナはふと小さく笑った。

その夜だった。舞踏会が終わってヘトヘトだった私は、部屋まで送ってくれた弟と一緒に湯浴みをするようになった。

あの時は社交場という緊張とプレッシャーのせいだと思っていたが、体がやけに気だるかった。加えてお腹の下の辺りが異様に重苦しく、

額にはほんのり汗も滲んでいた。だが弟には内緒にしていた。弟はとても心配性だったし、彼も初めての社交場で相当な疲れを抱えているに違いなかったからだ。弟は次期国王だから、私の何倍もの付き合いをしなければならなかった。

そうして私は体調不良を隠して弟と入浴した。湯船に浸かれればきつと調子も良くなるだろう。二人隣り合って湯船で体を温め、そろそろ上がるうと立ち上がった時だった。

頭の上から一気に血の気が失せる感覚は今でも苦々しく覚えている。目の前が真っ白になったかと思うと、体の力が抜け、崩れ落ちた。

いや、崩れ落ちそうになったところを、驚いた弟が間一髪で抱き止めてくれたのだ。そして、何か言おうとした私の言葉を遮るように、弟が絶叫したのだ。

私も朦朧としていて、あの冷静な弟が何故叫び声を上げたのか、あの時は分からなかった。私も気を抜いたらすぐにでも意識を手放しそうなほどに気分が悪かったから、とにかくもう体に力が入らなくてずっと弟に支えられていたように思う。

後から分かった。私はあの時初潮を迎えたのだ。倒れそうになった私を支えた弟が、私の足が鮮血で濡れていたことに酷く動揺して、思わず叫んでしまったようだ。

弟を驚かせてしまって申し訳ないと思っている。それでも弟は私をしつかり抱いて自分も血に塗れながらもタオルを巻いてくれて、すぐに医師も呼んでくれた。この時の感謝を今でも思い出話のように言くと弟は照れ隠しなのだと思う、ぷい、とバツが悪そうにそっぽを向いてしまうのだった。

こうして思い出すと、私の記憶にはいつも弟フェルダの存在があった。彼が片時も私から離れようとしなかったことが、今ではとても心寂しく感じられる。

エレナは手首を見た。

体中についていた赤い痣は、2日もすれば綺麗に消えていた。だが、強く掴まれた跡のあった手首の痣は、一週間たった今でもかすかに残っていた。

一週間前、フェルダに……弟に体を抱かれてから、数日私は高熱にうなされ床に伏せた。医師には何もないと、ただ夜風にあたり風邪を引いてしまったただだからと、診察を拒み、体に触れさせなかった。体中の痣を見せるわけにはいかなかった。弟のために。弟の名誉のために。彼はいずれ国王となる身。そんな将来を期待された弟が姉に無理強いを働いたなど絶対に知られてはならない。

それに、あの時はやっぱり驚いて、怖くて抵抗してしまっただけで、だからといって弟を憎んだり、許さないなんていうことは一ミリも思っていない。いつか言っていた、自分は女性に不器用だと。私の体で弟が自信をつけてくれたのなら、それこそ何の恩返しもしてあげることのできなかった自分の、最初で最後の恩返しができたのだと思う。

だから、弟に涙を見せてしまったのは彼を傷つけることになってしまったのかもしれないと、少しだけ心が痛んだ。

あの後、疲れきった私の横で、弟も疲れ果てたのだろう、私の体を

抱きしめていた腕からそつと抜け出しても弟は目を覚まさないほど深い眠りについていていた。

私はどこもかしこも軋む体を引きずって、化粧棚から一本の白布を取り出した。それはいつも弟が戦いへ赴く時に、もしも怪我をしたらそれを包帯の代わりにしてほしいという目的であげていたものだ。それを眠っている弟の手首にそつと巻くと、私もすぐに深い眠りに堕ちた。

扉を叩く音が聞こえ、エレナは返事をした。

「エレナ様、出発の準備が整いました」

従卒がそう伝令に來ると、エレナは分かりました、と言って椅子から立ち上がった。

一度部屋の中を見回す。いつも見慣れている筈の調度品が何故かとても懐かしく感じてしまい、エレナは目に涙を溜めた。

私は今から、祖国メンデルス国を離れ、シュベール帝国へ嫁いでゆきます。

愛する家族、お城の皆さん、そして国民の皆さん。

今日までたくさんの愛をいただきました。ありがとうございます。

私は遠くの地へ行きますが、いつも皆さんの幸せを祈っています。

14（後書き）

アクセス、お気に入り登録本当にありがとうございます。

モツアト国最大の自治区であるパデ地区。今ここでは乾季による水不足と、国王が打ち出した増税による反発で大規模クーデターが発生している。

モツアト国王は一万の民衆によるデモ隊に五千の兵で鎮静を目論んだが、数日で終わると予測していたクーデターは、一週間経った今でもまだ終局の兆しを見せようとしていない状態にあった。

そんな状況を早く終結したいのだろうモツアト国王は、軍の損失を惜しみ、とある国へ軍の増援を要請した。それがメンデルス国王軍である。要請人数は五千。

メンデルス国といえば、平和ボケしているくせにやたらと兵の数が多いことで有名だ。そして1人1人の兵力も高い。何故あんな戦争もしていないような国が いや今はそんなどうでもいいことを考えている場合ではない。

モツアト国王は対面している少年を睨んだ。玉座の間は呼吸の音すら立てては罰せられそうなほどに静まり返っていた。

「メンデルスの若造よ。余は五千の軍を要請したというのに、蓋を開けてみればたった五百。しかも、余は彼^かの英雄金龍王に出向いて戴くよう親書を送った筈だが」

どこでどう手違いがあり、五千の軍勢が十分の一になってしまったのか、しかも世界最強とも謳われる金龍王の代わりに、こんなまだ年若いひよこが出向いてくるとは。

金龍王とモツアト国王は表向きには平和協定の関係にあったが、その実、昔からモツアト国王は、このいけ好かないメンデルスの国王が嫌いだった。金龍王は冷静の皮を被っているが、中身はかなり強引な男だ。人を見下すような目をしているくせに、民は奴の外見に惚れ込み、世界的にも奴を支持する輩は多い。

いつかその化けの皮を剥いで国王の座から引きずり落としてやる。

モツアト国王はその機会を虎視眈々とうかがっていたのだ。とはいえ、金龍王の名はダテではない。一戦交えようものなら悔しいがこちらが不利だ。だが、混乱に乗じて奴の顔に傷をつけることぐらいならできるはずだ。そのために、今回の要請の際、我が軍には、場合によってはメンデルス軍を打尽にすることも止む無しと言っていた。

ところがどうだ。やって来たのは奴のまだ成人したての息子で兵の数も十分の一。金龍王はどこまで余を馬鹿にすれば気がすむのか。

メンデルス国の失態を理由に貸しを作ることもできる。だが今はまず自国の鎮圧が先だ。

一万の一般人を相手に我が軍五千で対抗することは不利ではない。そもそも武力が違う。では何故未だ紛争が治まらないのか。それは国が国民相手に武力を使えないからだ。

一人一人の兵力こそ一般民と軍人では力量に差はあれど、石を投げた国民を剣で切り裂くことなど国は簡単にやってはならないのだ。

そんな時に利用できるのが他国からの介入である。

国内の戦は国は民衆にやすやすと手が出せない。だが、他国はその限りではない。国が殺傷許可を出した上で要請をすれば、同国軍にできないことを他国軍が代わりにやりのけてくれる。つまり、国内軍は手を汚さずにすむという、国民にとっては卑怯極まりない手立てだった。

「さてメンデルスの若造、ぬしはたった五百でどうこの状況を打破するつもりかな」

フェルダは両手を軽く上げた。その様子にモツアト国王は訝しげに眉を寄せる。

「モツアト国王。貴方と討論する時間が今の私にはありません」

「ふん、こちらとて一刻も早い鎮圧を望んでいるのだ。だが、人数を違えたのはメンデルスの方であろう？この事態をどう」

「私は同じ事を申し上げる時間もないのです。姉」

イックシヨイ！！とメンデルス総司令の言葉を無理やり遮るようにクシャミをしたのは、いつの間にかモツアト王の背後に立っていたフェルダの側近シェンだった。国王は心臓が飛び出そうになるほど驚いて振り返った。

「なっ、なんだ貴様は…！」

「すみません、砂漠の砂に鼻がやられてまして」

モツアト国王が次の言葉を発する暇も考える猶予も無かった。

ただ、何故か視界がぐるりと一周した。

その後どうなったのか、モツァート国王が知ることは永遠に無かった。

「行きましょう、王子。すでにあちらの代表には待機していただいております」

シエンは自らの刃についた血糊を振り払い鞘に収めると、階下へスマートに飛び降りた。

「鼻は大丈夫なのか？」

「はい、今治りました」

「そうか。あんまり男前ではないクシャミだったから心配したぞ」

「私もできれば男前にクシャミをしたかったです」

「それにしても呆気無い終幕だったな。国を統べる者によって、国はどうとでも変わる」

「王子は良い王になりますよ」

フェルダは悲しそうに口元を上げた。

「姉さんのいない国など私はどうだっていいんだ……」

「王子……」

シェンは顔を引き締めた。

「王子、さあ、参りましょう。まだ、間に合います」

「……ああ。ああ、そうだな。行くぞ」

「は」

二人は玉座とそこに転がり落ちているモノに背を向け玉座の間を後にした。

フェルダがメンデルス国を出発して5日後、モツァト国王は破れ、大規模なクーデターは終わりを告げた。

一万の民の前で演説をする姿はまさに英雄だった。

モツアト国、パデ地区の指導者ハミルは、彼の横に立っているのも
気後れしてしまいそうなほど、まだ若いメンデルスの次期国王の姿
に眩しさを感じた。

彼は民衆デモ隊の先頭とモツアト国王軍の先頭で膠着状態（けあくじょう）となつて
いた我らのど真ん中に突如姿を現した。彼が何者で、何をしようと
しているのかを考え始めた時には、彼はすでにモツアト軍の中へ1
人突進していた。我ら民衆は啞然と立ち尽くした。

彼の通った後に道ができた。その後ろを五百の軍隊が続く。やがて
噴水のようにモツアト軍が空へ舞い上がった。その中心にいたのが
彼だった。彼は剣の一振りで百の国王軍を空へ舞い上げた。

人込みの中、私は一瞬、その時の彼の顔を確認することができた。

何か事を急いている。それはこの内乱とはまったく別の。

何故だろう、私はそう感じた。

その軍隊の正体がどの者か、伝令が入った。

彼らはここから対極の位置にあるメンデルス国の国王軍で、なんと
今我らと敵対しているモツアト国王軍からの要請で増援に來た部隊

だった。

指導者ハミルは首を捻った。では目の前でモツァト国王軍を蹴散らしている彼らは一体何をしているのだ？彼らは我々を討ちに來たのではないのか？

たった五百足らずのメンデルス国王軍は、五千のモツァト国王軍をいともあっさり呑み込んでいった。兵力の差が違うのだろうか。いやおそらく、メンデルスの大将の剣技能力が飛び抜けて高いのだ。人が塵のように空へ舞い上がるなど見たこともない。しかもそれをやりのけているのは自分よりひと回り以上も歳若い少年だ。

「クーデターの指導者ハミル殿ですね」

背筋が凍るとはこのことだ。まるで耳の中で囁かれたような低く静かな声に、ハミルは体が固まった。

冷や汗を浮かべながら振り返った時、ハミルのすぐ後ろに一人の黒装束の男が影のように立っていた。周りにいたハミルの仲間も突然現れた男に大層驚いていた。

彼はメンデルス国王軍の１人だと名乗ると、指導者である私にこう告げた。

もうじきメンデルス国より大量の救援物資がパデ地区へ到着すると、モツァト国王軍が一般民を強行排除しないよう、メンデルス軍２万が守りを固めていること。

「それでハミル殿には、すぐにモツァト軍の救護にとりかかっていただくよう、皆に指令をお願いします」

「私達がやつらを！？」

奴らを殺す動機はあっても、介抱する理由はない。しかも、斬り合
いをしているのは当のメンデルス軍ではないか。

そんな心の内を読み取ったのだろう、黒装束は困ったように笑った。

「申し訳ない、モツアト国王に会うためにはこの道を通つ切るのが
一番の近道だったのだ」

こんな状況下で、おどける様に笑うこの男は一体何なのだ。ハミル
にはとんと理解できるものではなかった。

だが、彼の目は笑っていない。またハミルは鳥肌を立てた。

ハミルは未だ爆発のように吹き上がるモツアト軍を見回した。よく
見ると、兵士達は倒れてはいるものの、死者が出ている様子がまる
でなかった。

「まさか……峰討ちをしているというのか！？」

「彼らも犠牲者ですから」

「犠牲者だって！？」

黒装束は語り始めた。

「この国の情勢は調べさせていただきました。干ばつによる深刻な
水不足、それに伴う食糧不足、それに畳み掛けるように民衆の苦し

みを無視した増税政策。モツアトの城には莫大な地下水が常に湧き出ている。にもかかわらず王は国民に分け与えることなく毎日湯水のように使っている。物資や資金も唸るほどあるというのに、それも埋蔵したまま」

「そのとおりだ……くそっ」

ハミルは的確なことを指摘され、唇を噛み締めた。もう長い間この国王の一族が国のトップに立ってから、民は困窮するばかりだった。誰もが戸惑いを隠せないまま、ハミルは言われるがままに仲間へ通達した。皆も動揺しながらもとりあえず動いた。やがて救護班が駆けつける頃には、民は皆必死で兵士達の救護に取り掛かっていた。

そして荒廃した建物の瓦礫が崩れ落ちてきた時、真下にいた民衆をとっさにかばったのは兵士だった。

「信じられん……」

さっきまで対立していた者同士が次の瞬間には助け合っている。私は黒装束の男に振り返った。

「あんた達は一体……」

「私達は何もしておりません。命令を下したのは貴方です。今後貴方はこの国の代表となるでしょう。その代価を今から戴きにあげます」

指導者ハミルは息を呑んだ。

「まさか……」

黒装束は頷く。

「モツアト国王のお命ただ1つ」

「ハミル殿。それで、1つ頼みたいことがあるのだが」

城のテラスから大歓声が沸き起こっている中、ハミルは我に返ったように顔を上げた。日の光りを浴びて輝く金の髪の少年が眩しくて目を細める。

「頼み、ですか。え、ええ、私のような者にできることがあれば何なりと」

「内海を渡る船を貸していただけないか」

ハミルは眉を寄せた。

「船？それは何の目的で」

船といえば、海を渡るものだが、内海となると話は変わる。内海の流れは浅瀬で漁を行う人間でさえ読みきれない複雑さであり、海には船を襲う海獣もいる。

そんな海域を往来できるのは、内海のある聖地シュベール帝国の船のみ。

「まさかとは思いますが、フェルダ殿は聖地へ行こうとなされておられるのか？」

「ああそうだ。できれば今すぐに用意してもらいたいのだが」

あのセントモツァティエル号を　とフェルダが指を指したのは、ここから遠くに見える湾岸に停泊しているモツァト国王専用の軍艦だった。

「ま、待つてください！あれは国王の…！私には何の権限も！」

「貴方が国王ですよ」

「え？」

城のテラスの下にはパデ地区の民衆に加え、他地区からもわんざかと人が訪れ溢れかえっていたが、群集の中からは「ハミル新国王万歳」などという声援が聞こえてくる。

「なっ」

そういえば、あの黒装束の男が言っていた。私がこの国の代表となると。しかし私は国王の血族でも何でもない、ただの一般民だ。昔から何かとリーダーにされがちで、今回のクーデターも国王があまりに国民を無下にしたような政策を打ち出してきたのが許せなくて起こしたデモだった。最初は数十人たらずの小さな抗議だったが、あれよという間に一万の大規模の指導者になっていた。

「彼らも異議はないみたいだが？」

「へ？」

ハミルは振り返った。うわっ！と体が海老反る。

いつの間にやら後ろに控えていたのは、モツアト国王に仕えていたあまりにも有名な騎士隊長や重鎮達だった。皆、きらきらと目を輝かせているのは気のせいだろうか。

「まあ、国王という名に縛られる必要はあるまい。しかし、この国を守り、支えてゆく代表はなければならない。そうなる覚悟を持って起こしたデモだったのだろうか？」

いいえ全く、とは口が裂けても言えない。モツアトは元来国民投票によつて国王が決められていたが、いつしか今の国王の一族が世襲にってしまったため、長らくその決まりを忘れてしまっていた。

「しかし私に務まるかどうか。私はただの一般民ですし」

「その点についてはこの者達が一から叩き込んでくれるだろう」

ああこのやけにキラキラした目で訴えかけてくる騎士や重鎮達か。よほどあの国王は酷かったと窺える。その結果が今回のクーデターだったのだから、おそらく城内でも反国王派は多かったのだろう。

「私、30ですが、今から覚えられますかねえ……」

「問題ありますまい。貴方より4つ年上の私の右腕は今現在しっかりと働いていますよ」

「王子、最近私、腰痛が……」

どこからか聞こえてきた声がその右腕なのだろう。ハミルは観念して頷いた。

「ありがとう、メンデルスの若き英雄フェルダ殿。貴殿が王になった頃には私もモツァートを守る立派な指導者になっていられるようこれから努力してゆこう」

それから数刻の後、モツァート国の港から一隻の軍艦が出航していった。

16（後書き）

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます。
私も腰痛が……。

メンデルス王国城の庭園は年に数回一般公開され、城門でメンデルス国民証を提示して本人確認が取れた後、この庭園を見学することができる。

王女エレナの好きだった中庭で今桃色の花が咲き誇っているように、この時期は庭園も春色の賑わいを見せていた。

この庭園はもともと軍事演習広場として使われていたが、今の国王クロウド王が妻エレノアを驚かせようと庭園に変えてしまったのだ。ちなみに軍事演習場の行方かというと、庭園から見えない位置に造り替えられた。兎角メンデルス王国城は広大な敷地だ。いくらでも何でも、大袈裟に言えばもう1つ同じ城を建てるくらいわけのない広さなのである。

庭園を見渡すと、家族連れ、恋人、友人同士、絵描きなど様々な民がそれぞれに楽しい時を過ごしている様子が窺えた。

「私は植物に特別興味があるわけではないが、皆が喜んでいるのならば、素晴らしい庭園造りなのだろうな、フォン」

窓の外に目を向けていたクロウドは後ろで控えて立っている五十代の男の方へ視線を移した。黒の短髪は前髪から全て後ろへ長し、紫水晶の瞳が鋭い目の中で輝いている。

「もったいなきお言葉、恐れ入ります、クロウド王」

「精鋭部隊長だったお前があの時……そう、我が妻エレノアのため

に庭園を造ろうとした時、まさか庭園設計図に線を入れるとは予想もしていなかった」

フォンは困った顔をして姿勢を低くした。

「王、またそのお話ですか…」

「猛虎とも恐れられたお前が意気揚々と草木や花と戯れ始めた時は」
「」

「はい、“お前は本物のお前か”と仰いながら私の頬を何度も叩かれました」
「」

「人の趣味とは見た目で判断するものではないとつくづく実感した。今も庭弄りに勤しんでいるようだな」

「はい。老後の楽しみなもので」

「未だ私と剣を交えればなかなか決着をつけさせようしないお前のどこが老後だ」

「先日息子と手合わせした際、負けてしまいました」

クラウドは口元を上げ、小さく笑った。

一時の沈黙が訪れる。

話が途切れると、フォンはため息をつき、やれやれと首を横に振った。

「息子に私直下の兵を根こそぎ持つて行かれました……」

二万　それは今、フォンが率いている部隊の全人数である。フォンはすでに精鋭部隊長の座から自己申告で降りたが、金魚のナニのようにひつついて離れたくない部下二万が、今もフォンの直下に所属しているのだ。よって、フォンは剣を置こうにも置けないまま、今は一部隊として戦に関わっていた。

ただし、フォンが出なければならぬような大きな戦はめったに起こらないため、今や本業に成り果てている趣味の庭弄りに支障はきたしていない。

その二万の兵を全て此度要請があつたモツァト国内戦に駆り出したのは、フォンの息子シェンだった。

「まったく。紛争は一箇所のみで起こっているわけではないというに。ちょうど今他の要請がないから良かったものの……軍隊の出勤は王の許可が必要と分かっている筈なのに、王よ。おそらくは……」

「ああ、ま、無断。だな」

フォンは米嚙を押さえながらまたため息をついた。

「はあ。元は貴方様の影でお仕えさせて頂いた身というのにあのバカ息子め。恩を仇で返しおつて」

クラウドは困ったような様子を見せているフォンを楽しげに見ていた。

クラウドがまだ息子フェルダに総指揮を丸投げ…任せる前、つまり

現役だった頃、クラウドは精鋭部隊長にフォン、そして隠密部隊長にその息子シェンを従えていた。

フォンが11になる息子シェンをクラウドに紹介したのがきっかけで、シェンは幼い身ながら大人顔負けの才をクラウドに見抜かれ、親子でクラウドに仕えることとなったのだ。

フェルダが生まれると、隠密部隊は解散し、シェンはフェルダのお守り^もを丸投げし任されることとなった。誤解を招かないように補足をする、エレノアが育児放棄をしたり、乳母制があったというわけではない。クラウドのフェルダへの軍事教育は谷底ならぬ地獄へ突き落とすライオンさながらだったし、エレノアはエレナとフェルダをこよなく愛し育てた。

クラウドはフォンとシェンを気に入っている。フォンは曲がることのできない堅物のような男だ。だから彼の息子も同じように成長するのかと思っていたが、シェンは柔軟性を上手く使いこなせる男だった。それは貴重な人材だが、1つ間違えれば危険でもある。

ただ、金龍王クラウドが健在であるうちはそれも杞憂で終わる。つまり、どんなに部下が優れていようと、また危険分子があるうと、クラウドと部下との間には超えられない力と才の差があるというわけだ。

それはクラウドとその息子フェルダにも同じことが言える。今のフェルダでは父親にまるで齒が立たない。

だからフェルダはエレナを止めることが出来なかった。

しかし彼を助長することに命さえも惜しまないような男がいる。それがフォンの息子シェンだ。

シエンはモツアト国の情勢を逸早く把握すると、モツアト国の将来をどちら……王と民衆、どちらに委ねるかを考査した。そして出した結果が要請五千の兵を無視して五百のモツアト王討伐隊を組み、二万のフォンの兵をこっそり拝借してモツアトの民を救援という策だった。こっそりというからには……こっそりだ。

「シエンはフェルダ様のお関わりになられることとなるとどうにも周りが見えなくなる……いえ、見なくなると言っただ方が正しいでしょうか」

あまりにフォンが悲愴な表情を見せるので、クラウドはしばらく愉しもうと思っていたが、切り上げて助け舟を出してやることにした。

「お前の息子は父親の私より父親のようにフェルダに接してくれている」

「は……」

おや、助け舟のつもりが、フォンの背中をさらに丸くさせてしまったようだ。クラウドは昔からフォンをからかうのが愉しくて仕方がない。

「好きにするがいい、と言っているんだ、フォン」

フォンはようやく背中を真っ直ぐ伸ばした。

「我が息子フェルダの為にメンデルス全軍を勝手に持っていったとしても、私はお前の息子の首を刎ねることはしない」

えええ！！とフォンは容姿に似合わず大声を上げた。クラウドはとうとう吹きだして笑った。まったくもってからかいがいのある男だと思う。

「些細なことだ」

息子のフェルダが出陣して早4日。今頃はモツアト国の王と対面していることだろう。メンデルス国の備蓄品もフォンの息子が持ち出していった。これは備蓄管理長が大慌てで伝えに来てくれた情報だ。おそらく困窮しているモツアトの民への救援物資。あの国は今回の内乱により王政が変わる筈だ。その時にモツアト国民はメンデルス国を大恩ある国として讃えるだろう。

二万の軍と大量の救援物資でそれを得られるならばなんと安いものか。

「お前の息子は腹黒だな？」

最後にもう一度、クラウドはフォンの背中を丸めさせた。

フェルダと彼の側近を乗せたセントナントカ号は、モツアト国の港を慌しく^{あわただ}出発し、内海のある聖地シユベール帝国に向かって帆を進めていた。

モツアト国で鎮圧した内乱は今頃、新しい国のリーダーによって再建計画が立てられていることだろう。

そのための、密かに連れてきた……というにはいささか大軍ではあるが、二万のメンデルス国軍は紛争被害の大きかったパデ地区を中心に、今回クーデターに参加していた民衆と共に支援にあたらせるよう、フェルダの側近シエンはメンデルス国軍指揮官ネルソンに指示を与えておいた。彼はこの二万の兵の親隊長フォンの熱狂的なストーカーもとい支持者であるから、巧いことおだてれば予想以上の力を発揮してくれるので、放置していても問題はない。

もう一つの部隊、そう、フェルダの率いてきた少数精鋭部隊五百は、モツアト国の新しいリーダーハミルが演説をしている間に颯爽と撤退させ、今頃はメンデルス国への凱旋の途中だ。さすが我が祖国の誇る精鋭部隊、死者を一人も出さず且つ我らが総司令を補助してみせたあたりはよくやったと言えるだろう。おつといけない、一人だけ亡き者にしていた。まあそれは私個人の行いなので、数には含まれない。

我らは媚を売らない。用が済んだら長いをしない。だが関わった惨事の後始末は相手が自立できるまできっちり面倒を見る。それを確認した後は前者通り、さつと引き上げる。今回二万の軍をあてたの

で、パデ地区とその周辺はひと月で終わらせるよう言っている。フオンの名を出しておいたから皆勢い勇んで取り組むだろう。

「シェン、お前を連れてきて正解だった。感謝している」

フェルダはまだまだシュベール帝国の島の片鱗すら見えない水平線を見つめながらぼつりと言った。

シェンは胸を熱くさせた。

この一言が私をどれほど歓喜させるか、きっと我が主は知る由も無いだろう。半分、否、9割は策略を愉しんで立てて実行していたが、残りの1割は、その策略が成功した後にもかすれば戴けるかもしれないこの一言のために、今回私は腰を擦りながら頑張ったのだ。うむ、我ながら健気だ。

主はとにかく元気がなかった。周りの人間は誰一人気付きはしない。普段は目に見えて分かる主の態度（姉君が関わった時は分かりやすくて助かる）であるのでそれに応じた応対ができる。

だが、主が本当にお辛い時、このお方はそれを隠される。私はそれを何度も見ている。若い身空でそのような特技を身につけられるとはどうにも不憫としか言いようがない。しかしそれも当然といえば当然なのだ。愛したお方があの方である限り、難しい人生を歩み続けるしかないのだから。

今も主の頭の中では姉君への葛藤で苦しんでおられる。

私も正直どの道を選ぶべきか迷っている。勿論お決めになるのは王

子自身ということは分かっている。

とりあえずその言葉の通り、船に乗った。

我らが祖国メンデルスを出発して五日目。もう太陽が水平線に近づいている時間だからその五日目ももう残り少ない。

エレナ王女がシュベール帝国へ嫁ぐため出立されるのはおそらく明日。

もしモツアト国から往路と同じ道で帰路すると、やはりどんなに馬にムチ打ったところで三日はかかる。行きでさえ馬と兵達には頑張ってもらったがそれでも三日かかった。無理だ。間に合わない。ここでいう「間に合う」が何を指すのかはまだあえて言及しない。何でもいい、とにかく間に合わせるための策を出さなければ私は王子の傍にいる価値など無い。

陸路では間に合わない。我が国が誇る最速伝達鳥ピツピ（名前は小鳥のようだが、人が乗れるほど巨大な怪鳥で力オもびっくりするほど怖い）に王子をくくりつけて飛ばすことができた。ちよつと本気でそれも考えたことは秘密にしておく。エレナ王女ならば乗れたかもしれない。彼女は生物に愛される宿命の下に生まれてきたと言ってもいい。王子は姉君への煩惱が鰻登りだから鰻には好かれるだろう。冗談を言っている時ではない。

そうなると海路という選択が出てきた。

船を使えば二日で帰還できる。しかし事はそう単純ではない。穏やかに船を通してくれる優しい内海であれば可能な距離も、内海にくつつも走る激海流、そして海獣が行く手を阻む。海獣は本当は人や

船は襲わない。ただその大きさから、ひょっこり海面に体を覗かせたところにたまたま船がいたら乗り上げて沈むだけだ。コミカルに聞こえるが、実際それがこの内海の恐ろしさであり、これまでの歴史で聖地シュベール帝国が聖地であれた所以^{ゆえん}なのだ。

そう考えた時、私の策略ひしめく脳にエクスクラメーションが煌いた。

それが今現在進行しているルートである。

民衆デモ隊の中に潜り込んだ時、シュベール帝国でモツアト国の品を売り込むために、しょっちゅう船で内海を行き来しているという商人をほんのちよっぴり可愛がつて仲良くなったので、この船に同乗してもらい、先導をしてもらっている最中だ。だからこの船は複雑な海流を上手くすり抜けながら進んでいる。

この船はあと一日後、聖地シュベール帝国へ辿り着く。

つまり、我らはメンデルス国でエレナ王女奪還を敢行するのではない。

待ち構えておけば良いだけの話だったのだ。敵地で。そう、あそこはもはや敵地と呼んでよい。フェルダ王子を幸せに導かぬモノは全て敵だ。

この計画がすんなり実現すれば、我らはシュベール帝国で胡坐^{あぐら}すらかいてのんびり待ってられる。無論上陸はだめだ。沖合いで船を停泊させ、エレナ王女を乗せた船が見えたら、その船が上陸する前に王女を取り戻す。王女の乗っている船はシュベール帝国が寄越したものだ。あちらは内海を渡る術^{すべ}を心得ているからなんなく一日で

連れてくるだろう。王女の婚儀は無期限延期になったとか、王が危篤で一旦帰ることとなったなどいくらでも理由をつけて、とにかく一刻も早くフェルダ王子とエレナ王女をお引き合わせするのだ。

私ごときの心情などどうでもよいのだが、あえて言わせていただくならば、エレナ王女の婚儀は急ぎすぎている。

金龍王は過去の事件と、エレナ王妃の亡くなられた弟ケビン殿に似すぎているフェルダ王子の心配をしてでの今回の決行だとは分かっている。

フェルダ様は若い。歳のことを言っているのではない。視野のことだ。成人したての15の歳で、もはやフェルダ様は昔の金龍王もそうであられた、完璧な容姿、頭脳を備えておられる。だが、感情が人を愛する感情だけが偏りすぎてしまっている。

この先まだまだフェルダ様は成長されてゆく。その時に己がどうあるべきか、どのような選択肢が増えているか。フェルダ様の愛情を知れば、いつかエレナ王女も応えてくれるかもしれないという選択肢を金龍王は何故与えようとなさらないのか。

「王子、そろそろ船室へ。夜風はお体に障ります」

さっきまであった燃えるような赤の太陽はすっかり水平線に沈んでいた。夜は海獣の活動時間帯に入るので甲板に出ているのは危険が伴う。

王子は放っておいたらおそろく到着するまでここに立っているだろう。

かわいそうに。おそらくエレナ王女と無事お会いできても、どう接してよいか分からないという力才をなされているのに、それでも取り返したくてたまらない感情が王子を支配する。

シエンはフェルダにもう一度船内へ入るよう促し、ようやくピクリとも動こうとしなかったフェルダは甲板を後にした。

シエンもそれに続く。扉を閉める前に一度外を振り返った。

光りのない闇。それは王子の行く末なのか。

しかしその空に確実に光る星々がある。

シエンは拳を握り締めると、闇夜に背を向け静かに扉を閉めた。

時が経つと記憶や事象というものは次第に薄れてゆくものだと言う。だとすれば、俺が姉を愛している事実はいったいどれほどの時をかければ消えるだろう。

姉さん。俺は貴女を忘れることなどできない。俺以外の奴にくれてやるつもりもない。

俺が貴女を連れ戻しに現れたらきつと驚きますね。

姉はあの夜、俺と今生の別れをしたつもりだったのだろう。ひどい弟だときつと貴女は思っている。あんな抱き方をするつもりじゃなかったんだ。だけど本当は貴女が嫁いでゆこうがゆくまいが、貴女と一日でも離れる時はいつも抱いてしまおうと思っていた。それを実行したのがたまたま貴女が嫁ぐタイミングと重なってしまっただけだ。

フェルダは船内の寢室のベッドに座り、深くうな垂れていた。うま／＼海流を避けて走行しているのだろう、ひどい揺れはない。

夕食をとるよう側近のシェンが言ってきたが断った。食欲などない。フェルダはずっと考えていた。姉を奪還する。それはもうじき成功するだろう。

今回姉の出立とモツアト国のクーデターが重なったことは運が悪かったとしか言いようがない。

何しろ距離がありすぎた。とても一週間で戻ることはできない。シエンが機転を利かせて今海路をとっているわけだが、たとえ陸路だったとして間に合わなかったとしても、そこで諦めるつもりはなかった。

だがおそらくその場合は父が俺を城から出さないようにしただろう。そうなると間に合わなくなる。俺が間に合わないと言った真の意味はそこだった。

父は俺が姉さんを愛していることを快く思っていない。姉を慕うことの何がいけない。父以外の誰もが俺と姉さんの仲を認めてくれているのに。

もし陸路で帰り、父に拘束されればその間に姉は結婚してしまう。婚儀をしてしまうともう奪い返すことはできなくなる。…… たった一つの方法を除いては。

ただその方法は世界を混乱に導くだろう。それでもそれで姉さんが俺の元に帰って来てくれるのなら俺は喜んで悪になろう。

だが姉さんを辛い境遇に置いてしまうことになる。俺は姉さんのために立派な王であらねばならない。そして傍で姉さんがいつも笑ってくれていればいい。

だから海路をシエンが用意してくれたことは本当に感謝している。とにかく婚儀だけはさせてはいけない。第一シュベール帝国の女神に息子など本当にいるのか。息子がいるという噂はあれど、その存在を目で見たことがない以上、どうにも何かが腑に落ちない。本当に奇怪極まりない国だ。シュベール帝国は。

それで問題は姉を取り戻した後だ。シュベール帝国側への対応はまったく問題ない。いくらでも理由づけができる。そして日を置いて正式に結婚破棄の書状を送ればいい。

姉を完璧に俺の傍に置くために邪魔な存在がある。

父クロウドだ。

父だけが俺と姉を祝福しない。俺と姉さんの仲を認めようとしない。憎い。

父が憎い。父は俺と姉さんの将来にとって邪魔な存在だ。

俺は父を殺さなければならない。

母は悲しむだろう。俺は今度は憎まれる立場になるだろう。だが息子の幸せを願うのは母親なら当たり前だ。息子の幸せのために父にはこの世から去ってもらう。

という筋書きはある。しかしそれを実行するには俺は力が足りない。

悔しいが、俺は父を殺す力がない。父は強い。息子だから親を過剰評価しているのではない。

あの人は間違いなくこの世で最も強い。四十を過ぎているというのにまったく歯が立たない。現役だった頃は一体どれほどの男だったのだろう。

フェルダはその恐ろしさを想像し、身震いした。

仮に父に刃を向けることになるとしても、まずそこへ辿り着くまでには難関が立ちほだかっている。

父の側近達だ。今は重鎮として引っ込んでいる者ばかりだが、父を若い頃から支え守り続けた者達だ。彼らも老いたとはいえ、一戦交えれば正直勝てる見込みは少ないかもしれない。

今は私の側近となっているシェンもかつて父の側近だった。俺はシェンとよく手合いをする。俺はほぼあいつには勝つ。だが知っている。あいつは最後の最後で力を抜く。俺は気付いていないと思っっているのだろうが、何かと理由をつけては剣を鞘に収めて強制終了したり、わざと胸元に飛び込んで俺に寸前で剣先を止めさせるような小賢しい真似こめがをしてみせる。

フェルダは重いため息を吐くと、そのまま後ろに倒れこんだ。天井の照明が眩しくて手の甲で目を覆う。

「姉さん……」

早く会いたい

だが姉さんは俺を見たらどんな顔をするだろう。

姉さんは俺に会いたいのだろうか。いいや会いたくない筈がない。何故なら俺は姉さんのたった一人の弟だ。俺は会いたい。だから姉さんも会いたいには違いない。

姉さん、俺に抱かれた時ずっと泣いていた。

辛かった？痛かった？怖かった？

俺に止めるようずっと叫び続けていた。

だけど姉さんは一度も逃げようとしなかった。俺と深く繋がっている間もまだ俺を説得しようとしていたから、俺は途中からその口を塞いだ。姉さんは優しい人だから俺の舌を噛み切ったりしなかった。でも俺はあの時自分を抑えられなかったから姉さんのいるんなところに噛み付いた。柔らかい唇も夢中で貪っていたら切れて血が滲んでしまった。それを舐め取ると俺と同じ血の味がした。俺と姉さんは誰よりも近くにいる。だからこれからも俺達は寄り添っているのが幸せなんだ。

姉さん

姉さん

どこにも行かないで。俺の傍に居て。

「俺を愛して……姉さん……」

扉が丁寧な音でノックされた。さっきから定期的に訪れては俺に食事をとれと言ってくるシェンだ。

フェルダはずっと独りにしてくれと言い続けていたが、今度は「入っていい」と返事をした。扉は静かに開き、シェンが入ってきた。優しい酸味の香りが漂った。おそらくウサギの形をしたリングゴでも持ってきたのだろう。

シェンは何も言ってこなかった。ベッドの脇でカチャカチャと食器を置く音だけが耳に入ってくる。

口を開いたのはフェルダの方だった。

「なあシェンよ」

「はい」

「今お前が本気で俺と剣を交えたら俺は勝てるか」

「勿論ですよ。私今満腹で。脇腹痛くなつて本気出せませんので瞬殺です」

フェルダは小さく笑った。

「後どれだけ俺は剣を振るえば万全のお前に勝てるだろうな」

「毎回勝つてるではありませんか」

「毎回腰痛だと言っているじゃないか」

「そうでした」

フェルダは体を起こした。サイドテーブルに置かれている果実はやはりウサギの形をしていた。1つ手に取り口へ運ぶ。モツァルト国産のリンゴだろう。祖国の味と何となく違う。しかし甘くて心が少しだけ落ち着いた。まだありますよ、と言いながらシェンは手品のように後ろから丸ごとのリンゴを出した。フェルダはまた小さく笑った。

1つ2つと口へ運ぶ内に、8匹いたウサギはいつの間にか皆いなくなってしまうていた。知らずのうちにかなり体力を消耗していたのだろう。食欲はなくても体は正直なものだ。後から入れてくれた温かいミルクココアも飲み干してしまった。

「そうですね……」

唐突にシエンは微笑みを浮かべながらフェルダに言った。

「あと10年もすればお父上に勝てると思いますよ」

「それは長いな」

「30過ぎれば時の流れなどあつという間です」

「俺はまだ15だ」

そう、まだ15。シエンは俺に真実を教えてくれたのだろう。

今父を殺すことなど無理だということを。

そして、10年後には必然的に父は年老いて、俺は成長することで勝つことができる。

それはつまり、25の俺でもやはり今の父には勝てる確証はないというわけだ。

「お前は時々辛辣しんらつだな」

シェンは大袈裟に肩を上げた。

「え！？何か言ってますか、私」

「今の俺はお前に勝てるか」

「勝てません」

シェンは笑った。

「今手合わせしたら王子の脇腹が痛くなってしまうですよ」

18（後書き）

アクセス、お気に入り登録、本当にありがとうございます！

もう祖国は背伸びをしても見えなくなっていた。

緩やかな曲線を描く金の長い髪は、走行する船の前方から後ろへ向いて吹き続けている風に流されるがままになっている。そのそよぐ髪の先の遙か彼方に祖国メンデルス国はある。

エレナは船というものに初めて乗った。

海は見たことはある。多分幼い頃は父や母が港まで連れてきてくれて、もしかすると船にも乗ったのかもしれないが、自分が覚えていた記憶では、数年前に弟が馬に乗せて海を見に連れて行ってくれたことしかない。港ではなく、足を海につけることのできる砂浜に。

その時に見た海は、水の底まで見えるほど澄んでいて、綺麗な色の模様をした小さな魚がたくさん泳いでいて、空が赤くなるまでそれを弟と一緒に眺めたものだ。

けれど今眼下に見えるまるで世界の果てまで広がっているような海は、深く暗い色をしていて水中はおろか魚の姿も見えない。あの時見た海と同じ海だというのが嘘のように思えてくる。

波を見ていると酔ってしまいそうになるので顔を上げた。ため息も何故か一緒に出た。

今まで周りにいた人達が今は誰もいない。護衛も世話係も全てシュベール帝国側が用意してくれるらしく、メンデルス国側の人間は必要なしのことだった。せめて1人でも自分を知る人がいてくれた

ら、きつと今でたため息も出なかっただろう。そう、これはきつと心細さからでたため息なのだ。

しかし今からしぼんだ心を持っていては、これからお世話になる人達に失礼だ。迎えに来てくれたこの船にいる人達も口数は少ないが、ちゃんと礼節をわきまえて接してくれている。ただ誰もシュベール帝国の王子　これから自分の夫となる人の話をしてくれないことだけが少しだけ心を不安にさせた。あちらの国では王族のことを口にすることは無礼なのだろうか。少なくともメンデルス国ではそんな決まりはない。

ああこの時期は城の庭園を国民の皆のために開放している頃だ。

だめだ。頭を切り替えなければと言い聞かせてはいても、脳裏に浮かぶのは祖国のことばかり。

そう、弟は無事でいるのだろうか。怪我をしていないだろうか。

せめて弟が無事に帰ってきてくれるまで出発を待つてほしかった。父は先方を待たせることはできないと言って私の願いは叶わなかった。

もしもう一度会えたなら、謝りたい。そしてちゃんと貴方を愛していることを言っておきたい。もうあの子の力になってあげられないけど、あの子が言っていた“心から愛している人”と添い遂げられるよう、姉はいつも祈っています。きつと大丈夫。フェルダは皆から愛されてる優しい子。そんなあの子の想いを受け入れない人はきつといないと思う。

次に会う時が来るなら、あの子はきつとメンデルス国の立派な王に

なっているだろう。

だから私もシュベール帝国の力に少しでもなれるよう、そしてメンデルス国と友好な関係でいられるよう、今から頑張ろう。

エレナは顔を上げ、向かい風に顔を向けた。まだシュベール帝国の島は見えない。

船内へ続く扉が開いて使者が姿を現した。船内へ入るようエレナに告げたので、分かりましたと返事をして甲板を後にした。

船がシュベール帝国へ着いたのは翌日だった。

いや、正確には帝国の港へ入る一歩手前の沖合いで船は停まった。

船室で読書をしていると、廊下を使者の方々だろう、どこか忙しく行き交う足音が聞こえた。

だんだんざわめきも聞こえ始めてきた。気にしない方がよいかと本の文字を目で追っていたが、内容が頭に入らないほど気になってきたので、そつと部屋の扉を開け廊下に首を覗かせてみた。ちょうど使者が通りかかった。

「あの、何かあったのですか？」

使者は一瞬ためらったが、理由を簡単に説明した。

どうやら一隻の船が行く手を遮っているらしい。通りで船が止まったわけだ。少しだけ不安が募る。故障してしまって動けないのだから

うか。

それとも、この船に何か用でもあるのだろうか。この船は宝船でも貨物船でもない。自分を迎えに来ただけの船だ。使者の方に用があったのか、もしかすると自分に話が？

何かできることがないだろうかと今呼び止めた使者に言ってみたが、何も心配はないから部屋の中から出ないようにしてほしいとだけ言い、慌しく去っていった。

そう言われてしまうと、客人の身としては勝手に出歩くのは失礼だし迷惑もかけてしまうだろう。エレナは部屋の中で大人しくしていることにした。

不安という感情なのか、嫌な予感というのだろうか。

その予感が運命を大きく左右する前兆だとこの時に知ることができていたら。

私の未来は大きく変わっていたのだろうか

うと、と首が落ちそうになってエレナは意識を起こした。

たしかさっきまで部屋の外が騒がしかった。けれど今はとても静かだ。足元に本が転がっている。膝から滑り落ちたのだろう。それを拾うと表紙を手で払ってテーブルの上に置いた。

窓の外を見る。まだ停泊したままのようだ。一面海しかその窓には映していないから進んだところで景色は全く変わらない。もしかするとあれから進んだのかもしれないが、なんとなく進んではいけない気がした。

そろそろ出てみても良いだろうか。部屋から出るなとは言われたが、今度はあまりの静けさに不安がぶり返してきた。怒られたら謝って戻ろう。少し戸惑ったが、扉を開けた。

甲板へ出た。船内に誰もいなかったからだ。この辺りに人が船を降りられるような陸地はない。船内に誰もいないということは、あとは甲板しかない。皆はそこにいるはずだ。

やはり、とエレナは瞳に差し込んだ陽の光りに目を細めながら心の中で言った。

予想通り、使者達のほとんどが甲板へ集まっていた。

しかしどうしたのだろう。皆うつくまっている。

違う。これは膝をついているのだ。メンデルス王国と形式が同じならば、この座り方は王族と謁見する時にとる姿勢。だが誰に？どこにそのような者がいるのか。

進み出ようと足を一步前に出した時、船の先から誰かの声が聞こえた。

甲板にいる者ではない。そのもつと向こう。船の外。海からだ。

誰？

エレナは潮風に乗るように耳をすませた。

「何故このような沖合いに貴方様のようなお方がおられるのです！
我々は」

よく聞こえない。船からかけられた縄梯子はしで降りたのだろう使者が誰かと会話をしている。エレナの足は自然と前へ進み出ていた。

「あつ、エレナ王女様！」

気付いた使者達をすり抜けてエレナは船の先端まで出た。思わず目を大きく開く。

「おや」

海から聞こえていた声の主がエレナを見つけ、顔を上げた。顔を覆うほどのフードを被っているためどんな顔なのかは分からない。分

かるのは、声が男性だったこと、とても長身の人だということ。

そして、こんな危険な海に小船でその男が1人でいたことだ。

いや、一人じゃない。エレナは少し目を細めた。彼の背後に誰かいた。座っているのか寝ているのか分からない。

「貴女がエレナ姫か？」

突然こちらに話しをふられてエレナの視線はフードの男に戻った。とても静かに浸透するような落ち着いた声。何故か心臓がトクンと跳ねた。

貴方は誰？それを口にしようとしたと同時に、男と向き合っていたこの船の使者も口を開いた。

「とつ、とにかくこちらへお移り下さい！海には危険な生物がいるのです！」

「ああ、いたね。大物が二匹も」

使者はまるで死期を告げられた瞬間のように青ざめた。

「あああなんという！よくぞご無事で……一体何故このようなところに！しかもお1人とはあああなんという……」

倒れそうなのはむしろ使者の方だ。あまりの狼狽ぶりで体をくねくねさせている。

「今日はいい天気だったのね。釣りをしに来たんだ」

「釣つ！？」

釣り！？エレナも心の中で使者と同じように驚いて叫んだ。こんな危険な海域で！そんなすぐに転覆しそうなほど頼りなさそうな小船にたった一人で！？

「おかげで釣れたよ。大物二匹」

えっ、とエレナは思わず手すりを掴んで身を乗り出した。さっき言っていた海獣のことなのか？海の魔物は見たことはない。恐怖心より好奇心が胸をよぎってしまった。もちろんそんな魔物が人間1人で捕らえられるはずが無いことは分かっている。きっと大きな魚のことだろうとは思うが、しかしその期待を込められた視線を感じ取ったのだろう、フードの下から覗いた口元が斜めに上がった。

だが、エレナの期待は直後、蒼白のものとなった。

「そうら、二匹」

そう言つて男が体を横にずらし見せたのは、エレナのとてもよく見知った人間だった。

「え……どう……して……」

二人の人間が傷を負って倒れていた。

1人は黒髪くろかみの男。

そしてもう1人は金髪きんかみの頭に白い布を巻いている青年。

まさか

夢でも見ているのだろうか

何故なら彼らはこんなところにいるはずがない人間なのだから

「フェル……ダ？」

これは夢だ

20（後書き）

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます…！狼狽しております

肩で息をしながらフェルダは構えていた剣を握り直した。荒い息のでている口の端から血がツウと顎に伝い落ちる。

まさかこんな場所で人間と一戦を交えることになるうとは

聖地シュベール帝国は内海のある孤島。周りは海しかないが、船をつけられる港は一箇所しかない。自然が成したものか、はたまた人為的なものなのか、島は数十メートルの断崖絶壁の上に成り立っている。よって、船をつけることができても上陸は叶わない。それが聖地であるまでもう1つの所以ゆえんでもある。

そのたった一つの港はモツアト国側に近い場所に位置する。フェルダの乗った元モツアト国王所有の軍艦がこの難しい海を比較的安全に航海できたのも、その距離の近さからという理由もある。

フェルダ達の乗った船は、シュベール帝国の人間に見つかからない位置で静かに停泊していた。時折船下を黒い巨大な影がぬぼうと横切ったりするたび、案内役のモツアト国の商人が震え上がっていたが、フェルダは甲板に出てずっと水平線を見つめていた。その先から彼の姉を乗せた船が来ることを待ち続けて。

やはり先にここへ着いたのはフェルダ達だった。もし大陸から港までの距離が同じだったならば、この内海を渡る術を知り尽くしているエレナを乗せたシュベール帝国船が先にこの海路を通っただろう。

いくらフェルダ側に案内人がいるとはいえ、内海が庭のようなものであるシュベール帝国の人間には敵わない。エレナを取り返すこともできなかっただろう。

こうしてただ水平線を見つめていると、幼い頃姉と海へ行ったことを思い出す。

靴の中に砂が入ってしまうから姉を抱き上げて砂浜を歩いた。波打ち際で姉を下ろすと、姉は靴を脱いで素足になり、冷たいだろう海に足をつけて楽しそうに笑った。その姿が可愛らしくて、愛しくて、こちらも笑まずにはいられなかった。

そして水平線の彼方に沈んでゆく夕日を二人でいつまでも見つめ、心の中でこれからも姉を守り続けることを強く誓った。

幸せな日々。

だがそれでも、成長してゆく度に何度も突きつけられる絶望。姉弟が死ぬまで一緒にいることはできないという事実。それが王族であるならば尚更確実なものとなる。

もし生まれた境遇が地図にも載らないような山奥の村外れに住む民だったなら、きっといつまでも仲睦まじく姉弟は幸せに暮らせただろう。こんな広い世界。そんな姉弟もどこかでひっそりと、しかし幸せに暮らしているに違いない。羨ましいと思う。王族は権力も財もある。だがその代わり、個人のささやかな願いを叶えることはできない。

しかし願いとは自らが叶えようと動かなければ何一つ変わらない。

だから俺は動いた。

姉を幸せにする。姉を守る。

それを叶えるのはシュベール帝国ではない。父でも母でもない。この俺だ。

「エレナもそれを望んでいるのか」　いつか父に確信を突かれた。それは……そうに違いない……のだ。なのにそれを考える度に心が黒く澱む。俺といるということは、姉の、女としての幸せを一生叶えることができないということだ。もし、姉にそのことを責められたら……俺は何もできない。何も言えない。

いや、姉は心優しき人。きっとそのことを自分の罪だと考えて俺を氣遣い、心を痛めるだろう。

分かっているのだ。この道がどんなに光りの射さない道であるかなど。

それでも、何もかもを傷つけても、俺は

「フェルダ王子」

側近のシェンが声をかけてきた。振り返る。

「どうした」

「いえ、それが」

シェンが難しい表情を浮かべた時だった。凄まじい地響きが船とフ

エルダ達を大きく揺さぶった。否、ここは海面。衝撃波が起こるはずがない。まして乗っているのは軍艦だ。軍艦を揺らすほどの衝撃はそうやすやすと起きる筈がない。座礁するような浅瀬でもない。第一船は停泊している。波も穏やかそのものだ。

「なんだっ!？」

船が傾き、フェルダは手すりを強く掴んで体勢を保った。

シエンが逸早く動いた。このような不安定さはかつて暗殺部隊長を務めていた者にとっては問題ではない。足場さえあればたとえ棒の先にさえ立てる。それが暗殺部隊の人間だ。シエンはフェルダの反対側の甲板へ移動し、海を見下ろした。

「どうした、何かいるのか」

ようやく歩けるほどに船の揺れはおさまり、フェルダは何も言わず海を見下ろしているシエンの隣りへ歩み寄り海下を見下ろした。

人間がいる。

軍艦が象だと例えるなら、蟻ありのような小船が一艘浮かんでいた。その小船の上にフードを深く被った魔術師のような風貌の人間がぼつんと立っていた。

悪寒が走った。この感覚は…そう、父の鋭い瞳に見つめられた時のようなあの絶対的敗北を突きつけられる感覚。その正体を知っている。圧倒的な力の差だ。

フェルダは息を呑んだ。隣りに立つシェンも何も言わない。かつて父の側近だったこの男が無言でいるということは、今感じている悪寒は勘違いではないことを示している証だ。これはマズい。フェルダの直感が、全身が、危険信号を放った。

「ん？……これは驚いた。てっきり小物かと思えば」

小船の人物の声は男。20代か30代か。落ち着いているような、しかしその奥にとても油断の出来ない何か潜んでいる。

「今のは貴殿がやったのか？」

シェンの声色が張り詰めた響きに変わっている。こいつは相当な非常事態だ。腰の聖剣は常に据えてある。いざとなったら

「ああ、失礼失礼。わざとじゃないのだよ。ん？わざとか。いやいや悪気……もあつたか」

フードの下からまったくと言っていいほど悪意の無い笑い声が発せられた。

しかしフェルダとシェンは気を緩めなかった。シェンは「この軍艦を傾かせたのはお前か」と言ったのだ。それを理解しての返答がこれだとしたら……相当の手足れた。金龍王と呼ばれる父クロウドに匹敵するとも劣らない力の持ち主の可能性が高い。

「貴殿は何者だ？この危険な海域にそのような小船で1人、一体何を……いや、それよりもこの船がモツアト国王の軍艦と知っていないが、がらけしかけてきたのか」

相変らずシェンも構えたまま話しかける。一瞬も男から目を離さない。

「まあね。モツアトの国印がでかかと刻まれているから間違いようがないよ。ん、ああ、モツアトは嫌いなんだ。こんなところにいる方が悪いよ。邪魔だ」

「我々はモツアトの者ではない」

「そのようだね。有名な顔がいる。奪ったのかな？」

この船はモツアト国のものとはいえ、乗船しているのは大国メンデルスの王子だ。シェンは険しい表情で口を開いたが、フェルダに待て、と制された。代わりにフェルダ自身が口を開いた。

「申し訳ないが、ここを動くことはできない。大事な用があるのだ。それが終わったら直ちに船は退く。それで勘弁してはくれまいか。無論モツアトとは何の関係もない」

「君がここで何をするのか、興味はない。が、私は釣りをしに来たんだ。目の前にこんなデカブツがいたら釣れるものも釣れないのだよ」

「先も申ししたが、ここを動くつもりはない。釣りがしたいならそのような小船よりこちらにお移りください。その方が大物が釣れるというものでしょう」

「大物、ね。なるほど、ではそちらに移り、釣らせてもらおうか。大物二匹をね……」

風が男のフードを押し上げた。

俺が4歳、エレナ姉さんが5歳の時、俺は姉の手をとって先日父に付き添った狩りで見つけた花畑に連れ出した。

夜中にこっそり城を抜け出した。その花畑は夜になるとルビーのような赤の光りが一面に浮かぶらしい。それを姉さんに見せたかった。だがそれは宝石ではなく悪魔だった。

赤は山狼の瞳。その花畑は山狼の縄張りだった。夜に活動する獣が終結するその真つ只中へ、俺は姉を連れてきてしまった。

二人の人間の子供を見つけた山狼の群れが囲む。ようやく剣の使い方を覚え始めた俺には、剣は重すぎた。構えるのがやっとで、知らずの内に恐怖で足が竦^{すく}んでいた。

「おやぶんさん出てきなさい！」

その時花畑に姉さんの高らかな声が響き渡った。

正直、頭が真っ白になっていた俺には姉が何を言い始めたのかよく分からなかった。獣に向かって人間が言葉を言ったところで、それが獣に理解できるはずもない。

だが、姉は俺を山狼から隠すように両手を広げて大の字に立った。

山狼達の唸り声がこだまの様に響いていたのが急にシンと静まり返り、群れの中から一際大きな山狼が俺達の前に出てきた。幼かった

俺にも分かった。こいつが“おやぶん”だと。

姉が叫んだから出てきたのか、単に親玉が最初に俺達を食すだけだったのか今は分からない。

姉は一度俺を振り返り、頭を撫でた。優しく微笑みながら「ちよつと目を瞑っていてね」と言うと、もう姉は俺に振り返らなかった。

「おやぶんさん、勝手にうちへおじゃましてごめんなさい。けど、あなたたちのとても綺麗な赤いお目目を見せてもらいました。そのおわびとおれいに、私の腕をさしあげます。もし足りないなら好きなだけ私をあげます」

俺は剣を手から落とした。目を瞑れと言われていたけれど、俺はずっと姉の背中を見続けていた。その姉さんが、今、何を！？

「だから！」

姉が涙をこぼしたのが分かった。

「弟は食べないでください！おねがいします！」

「ね・・・えさ・・・ん」

姉さんがおやぶんの方へ歩いてゆく。

待つて

待つて！

「待つて姉さあああん！！！」

突如、そこにいた全ての山狼がバタバタと倒れ始めた。花畑に広がる赤い光りが全て消え、闇が広がった。一体何が起きたのか。その闇の中に、数人の人影が立っていた。

「フェルダ王子、ご無事ですか」

父の側近達と、俺の側近シェンだった。

「まったく。我らに一服盛って城を抜け出すとは。まあ、金龍王もよくやってましたけど」

シェンはぴくりとも動かない姉を抱き上げていた。慌てて駆け寄る。

「ね、姉さん！姉さんは……！！おい下ろせ！！姉さん！姉さん！！」

「あいたたた、蹴らないで、分かつ、ちょっ、あいたつ」

見かねたらしい父の側近トルストが猫のように俺の首根っこを掴んで持ち上げると、抱かれている姉の方へ近づけた。

「姉……さんは？ま、さか……」

俺はぷらりと垂れ下がったまま、姉の頬におそろおそろ手をあてた。

温かい

途端に俺の目からぼろぼろと涙の粒が零れ落ちてゆく。

「姉さん・・・ねえ・・・さん・・・っ、うっうっ」

「エレナ王女はご無事です。さ、お城へ帰りましょう」

「うっうっ」

俺は泣くことしかできなかった。ぷらりぷらりと俺の体が揺れるたび、止め処なく溢れ出てくる涙もはらはらりと振り落ちていった。

何の力も技量も度量もなかった俺を、姉さんはその身一つを武器にして戦ってくれた。俺を守ってくれた。

だから俺は強くなつて姉を守ることを誓った。姉が俺を命をかけて助けてくれたように、俺が全身全霊をかけて一生守る。

姉の背中を見上げたのは、これが最初で最後だった。

フェルダは薄っすらと目を開けた。体中が引きちぎられたように動かない。口の中で血の味がする。呼吸をするのも辛い。

俺は一体どうしたんだ

世界が揺れている。違う、これは波だ。波が船を揺らしているから

だんだん記憶が蘇ってきた。体が動かない分、唯一動く瞳に力がこ

もり、目を見開く。

そうだ、俺は奴と戦っていたんだ。

奴は　ウエルクボルグと名乗ったあの男は、突然俺とシェンに斬りかかってきた。

釣りをしていたとか何とか言っただけだが、俺もシェンも奴に対して一切の気を抜かなかった。奴は笑っているが、隙を見せない気を纏っていた。ただの釣り人ではないことは一目瞭然だった。

だから奴の突然の攻撃も俺は腰に据えていた聖剣で迎え撃った。

奴の一撃は今まで戦ってきた誰よりも重かった。しかも奴は片手だというのに、こちらは両腕で剣を握り受け止めるのがやっとだ。一歩でも退けば間違いなく一刀両断される。

その時奴の背後からシェンが応戦した。奴の素性が何であれ、俺に剣を向けた時点で奴はシェンの敵となる。

シェンが奴の背中に剣を振り下ろした。だがそれを奴は食い止めた。もう片方の手で。そう、奴は双剣の使い手だったのだ。双剣の使い手は俺達を弾き飛ばし、再び距離をとった。

「ふうむ。さすがに大物。そうやすやすと釣らせてはくれないようだ」

「貴方が何者なのかは知らないが、貴方の方はこの私を知っているようだ。このメンデルス国のフェルダに仇成^{あだ}す者よ」

「いいや、君自身には何の恨み辛みはないよ。反吐の出るモツァト船を沈めようとしたらたまたま君たちが乗っていただけだから」

「おい、貴様！」

シエンの堪忍袋の緒はとうに切れていたらしい。ぼんやりとしたいつもの顔が鬼の相に変わって二人の間に立ち入り剣を相手に突き出した。

「大国メンデルスの次期国王となられるこのお方を知っていて尚この態度か！名を名乗れ！」

「ふむ。貴方はもつと冷静な男と思っていました。その忠心、嫌いではないね」

フェルダは眉を寄せた。シエンはフェルダの側近に過ぎない。自分のことは金龍王の息子ということもあり、知られていても不思議は無いが、一側近を知っているというのは、まさか。

「金龍王の側近にして隠密部隊長シエン。今はそちらの息子さんのお守り^もになったのかな？」

シエンのこめかみに血管が浮き立った。

「名乗れと言っている……！」

「待て、シエン、もしかこの者は」

男が口元を上げた。

「私はウェルクボルグ。その孤島に住む、
もうすぐ花嫁を迎える
ただの釣り好きさ」

眼球を動かすと目の前にウエルクボルグが立っていた。

軍艦の甲板で起きた一戦の決着はとうの昔に終わっていた。

フェルダの敗北。

ウエルクボルグはフードを外してその姿をさらしていた。透き通るような水色の長い髪が海風に馴染むようにそよいでいる。

フェルダは唇を噛み締めた。

まさか、まさかこの男こそ姉が結婚する相手だったとは

「まあ……興味はないけれど、とりあえず聞いておこうか。君たち、何しに来たの？」

ウエルクボルグはフェルダの頭を草履を履いた足でにじり踏みながら飄々と聞いた。

メンデルス国のフェルダの側近という男の方が厄介そうだと見定めると、ウエルクボルグはフェルダを弾き飛ばし、飛び掛ってきたシェンと相対した。彼もまた双剣を使う。四本の剣が金属音を打ち鳴らし、火花を散らした。

再び襲い掛かったフェルダと今度は二対一で挑むが、ウエルクボル

グの強さは予想を遙かに超えたものだった。

一振りですぐ倒すフェルダ、かつて隠密部隊長だったシェン。だがその卓越した戦闘のプロフェッショナルもウェルクボルグの前では赤子も同然の扱いだった。

終幕は早かった。

フェルダに振り下ろされた剣をシェンが庇い倒れた。そして間髪いれず剣戟がフェルダを襲う。シェンが覆いかぶさったことがフェルダの回避を遅らせ、二人共々吹き飛ばされ、船壁に激突し、そこでフェルダの意識は途絶えた。そして意識を取り戻したとき、フェルダは息も乱さず飄々と佇んでいるウェルクボルグの足で頭を踏みつけられていたという結末だ。

「ここを……もうじき船が通る……俺は……その船に用がある……のだ……！」

時間がない。こんなところで呑気に戦闘などしている場合ではない。

「えっ、もしかして君の姉君と私の祝儀のためにわざわざ駆けつけてくれたのかい？」

ウェルクボルグは誤って金塊でも踏んでしまったかのように慌てて足を上げた。だがフェルダは立ち上がらない。ウェルクボルグから受けたダメージがその要因の大部分を占めるが、フェルダの頭の中は彼が今言った言葉で埋め尽くされ激しい衝撃となって襲っていた。

「貴様が……姉上の……だと……？」

フェルダの中ではこの時点からウエルグボルグが万死に値する男と位置づけられた。

この釣り好きが愛して止まない姉の結婚相手という。それが事実であれ、でまかせであれ、フェルダの逆鱗に触れたことは変えようのない事実だ。

「ははは、そうなんだよ。私は結婚する意志などこれっぽっちもないのだけど、母が勝手に決めてしまつてね。はあ。胃が痛い」

「な……っ」

愛する姉は祖国のために犠牲となつて嫁ぐというのに、それをこの男は。

「あれ、表情が硬いままだね。ではこう言つたらどうか」

ウエルクボルグは冷たささえ感じる赤の瞳をフェルダに向けた。

「私はエレナ姫を誰よりも愛している。ずっと一緒になることを夢見続けていた。それがようやく叶つたのだ」

「やめる……！」

ウエルクボルグは肩を上げておどけた様に笑った。

「おや、さらに逆上してしまつたね。なるほど。姉が傷つく結婚には反対。だが？エレナ姫が誰かと結婚するのはもっと反対。というわけだ」

「姉さんの名を気安く呼ぶな!!」

「ほう……つまり」

「ぐ……っ!」

ウェルクボルグの足が再びフェルダの頭上から踏み落とされ、フェルダは顔を歪めた。

「君はここへ我らの婚儀を祝福しに来たのではなく、壊しに来た。そう判断してよいのかな?」

「ね……姉さんは…渡さない…っ」

「そういう台詞もグツと来るけれど」

ウェルクボルグの足がフェルダの頭を通して船床を軋ませる。フェルダは苦しげに声を上げた。

「君のお父上を説得できないようでは、ただの姉を奪われて駄々をこねる子供にしか見えないのだよ」

まあ、まだ子供だから仕方ないか、と鼻で笑い、足を退けると、そのままその足でフェルダの鳩尾みそおちを蹴り上げた。

「かは……っ!!…ね……」

姉さん……

姉……さ……ん

そこで俺の意識は遠退いた。

そしてどれほど気を失っていたのか、今再び目を覚ますとまだ目の前に憎悪の対象が佇んでいた。

体が狭苦しさを感じ、視界の見える範囲で目を動かした。

ここは軍艦じゃない。船の揺れも荒い。奴の乗っていた小船か。

そして奴の向こうに船が見える。あの船は。

「フェルダ！」

名を呼んだ声の持ち主が誰なのか、見なくても分かった。

エレナ姉さん

久しぶりに聞いた愛しい人の声。からからに乾いた俺の全身に染み渡る。やっと会えた。

会えたのに、早く抱きしめたいのに体が動かない。

動かないなら動かせばいい。

「無理だよ。四肢の関節外させてもらったから。後で私の者にハメてもらおうといい」

汚らしい声が頭上から槍のように降り注いだ。

「もつとも、君の体が動くようになるのはメンデルス国の港へ着いてから、だけどね」

「貴……様……！」

ハツと目を見開いた。奴の向こうにある船の上からかけられた縄梯子をつたって、姉が降りようとしている。

危険だ！そんな危ないことをしてはいけない！姉さんの手が縄で擦り切れたらどうするんだ！もし足を滑らせて落ちたりでもしたら……！

「おやおや、深窓の姫君と伺っていましたが、なかなかお転婆なお姫様だ。嫌いじゃないですよ、そういう女性も」

ウエルクボルグは全身を覆っていたマントを取り外した。本当に釣りに来ていたような軽装をしていたが、その布地や香ってくる匂いで皇族の着る服だと分かる。

「きゃ！」

エレナが手を滑らせ、体が傾いた。フェルダはすぐに駆け出していた。しかしそれは頭の中の出来事で、体はまったく動こうとしない。

「姉さん……！」

口から血を吐きながら声を張り上げた。

「おっと」

落下したエレナを受け止めたのは、船下にいたシュベール帝国船の使者でもフェルダでもなかった。

軽やかに飛び移ったウェルクボルグがエレナを抱きとめた。

その光景を目に入れたフェルダは己自身の発する業火で骨まで焼かれた気分だった。

愛する姉が自分ではない人間に触れている。

触れるな……触れるな……！！

「殺してやる……！！！！」

シュベール帝国諸共滅ぼしてやる……！！

「大丈夫ですか？お転婆なお姫様」

黙れ……！姉に触れるな姉を見るな！

「あ……あのっ、ごめんなさい、下ろしてっ。下ろしてください。あの子がっ」

「弟君なら心配いりませんよ。ちょっと船酔いしたようで横になっているだけです」

「え……」

波の音が煩いのか、意識が朦朧としているからなのか分からない。姉が奴と話しているがよく聞こえない。分かるのは、姉が辛い思いをしているということだけだ。それだけで十分だった。

「お願い、下ろしてください！あの子怪我をしているわ！フェルダ！何があつたの！待ってて、今そっちに行くわ！貴方、私を下ろしなさい！」

ウエルクボルグはくつくつと愉快そうに笑った。

「ああまったく元気いっぱいの姫君だ。では、下ろす代わりに、私に口付けでもしていただこうかな」

「分かりました、そんなことで良いのなら」

フェルダは耳を疑った。最愛の人が憎きあの男に口付けをするのか。姉の清らかな唇が下劣な男に蹂躪されるというのか……！

「ふむ。積極的な女性もまたよし。いいよ、下ろしてあげよう」

ウエルクボルグはエレナを船に下ろすと、観劇でもするようにエレナの行動を楽しそうに眺め始めた。

エレナの乗っている小船からフェルダのいる小船まではどんなに助走をつけても飛び移ることは出来ない。それはたかだか10メートルほどの距離だろう。だがエレナにとっては水たまりを目の前にした蟻ありのように絶望的な長さだ。ウロウロして終わり。ウエルクボルグはそう予想して口元を上げていた。

しかし家族を守ろうという想いの強さは深窓の姫も例外ではない。

その場に泣き崩れて終いかと思っていたウエルクボルグは思わず組んでいた腕を解いた。

水飛沫が上がる。

息を呑んだのはウエルクボルグだけではない、それを見ていたフェルダもまた、大きく目を見開き体を震わせた。

「ね……姉さん！……！」

フェルダの視界からエレナの姿が消えた。まるで魚が水面を尾で叩くような音だけが耳に入ってくる。

まさか、まさか泳いで渡ろうとしているのか。馬鹿な。姉は泳げるはずがない。泳いだところを見たこともなければ、彼女は今ドレスさえ身に纏っているのだ。それはすぐに水分を含み、水底へ引きずり込むほどの重さとなる。

フェルダの脳裏に最悪の結末が浮かび青ざめた。なんとか首を上げようと力を込めるが、数センチ上がったところで海面すら見えない。

「姉さん！姉さん！！」

「フェル ……っ」

エレナの声が聞こえた。しかし彼女が叩く水音がそれを邪魔する。見なくても容易に想像がついた。姉がたくさんの海水を飲み込む苦しげな表情。行く方向を阻止するように沈んでゆく体。

フェルダの目から涙が零れ落ちた。

「貴様！！！！後生だ！！姉を……姉さんを助けてくれ！！！」

「もちろんだ。花嫁だからね。さすがの私もこの姿を見て放っておくほど悪魔じゃない」

ああそうだ、悪魔は俺一人で十分だ。姉がこの冷たい海から救われるなら。姉がこの世に生きていてくれるのなら

ウエルクボルグが片手を上げる。

シュベール帝国船の使者が次々と船から飛び降り、海に入った。

フェルダが姉の無事を願うその刹那、辺りが不気味なほどシンとなった。

「しまった、この時間帯は」

それは海を知り尽くしているウエルクボルグの口から呟かれた言葉だった。

彼自身が焦燥して飛び込もうとしたのと同時に、エレナの体が急に海の中へ消えた。

「姉さん？」

フェルダのかすれた小声さえやけに響き渡る。

「来るぞ……!!」

それはウエルクボルグの声だったのか。

海面が山のように盛り上がり、黒い影が浮上してくる。

「く……っ!」

ウエルクボルグが帝国船へ飛び移る。使者が下ろした小船は傾き転覆し、フェルダとシエンの乗せられた船も大きく傾き、水を被る。

「フェルダ……様……っ」

意識を取り戻したシエンもまた深手を負っていたが、関節を外されたのはフェルダだけで、シエンはどうか体を起こし、今起きている摩訶不思議な現象からフェルダを覆い庇う。

だがフェルダの頭の中はエレナのことしか入っていなかった。

姉さんはどうしたんだ。姉さんの姿が見えない。聞こえない。心配すら感じられない。

「姉さ……」

次の瞬間、フェルダは轟音と共に水柱を見た。

海水から吹き上がるそれは帝国船の高さすら超え吹き上がる。

「あ……あ、ああ……ああ……っ!」

フェルダの顔がぐしゃぐしゃに歪んでゆく。シェンも言葉を失った。

水柱の頂点に浮かぶ。

「あああああ！！！」

巨大な海獣の舌に巻かれた物体。

それは

「姉さああああああああん！！！！！！！」

水柱となって飛び上がった海獣はその舌を物体ごと口の中へ入れ、大きな波飛沫と共に海中へ消えていった。

姉さんのいないこの世界など

その日は意識を失われた

二日目、帝国船が我らを祖国の港へ還した。以前意識は取り戻さず

三日目、意識を取り戻されるが、天を仰いだまま心だけがまだ眠つておられる状態

一週間後、まったく動かれる様子のない体に栄養注射を施す。唇が乾き、肌は骨のように白い

二週間後、突然叫び始める。点滴も外れるほど暴れ始めたので、両手足をベッドに固定。舌を噛まないように猿轡さるくつわを噛ませる。

一カ月が過ぎる頃、暴れることはなくなったが、代わりに一日中ただ涙を零されるようになった

三ヶ月が経つ頃、車椅子に乗せて庭園を散歩する。夏の日差しが肌を痛めないようにほんの数十分の日光浴をすることにした。相変らず何も言葉を発さず魂が抜け落ちたように俯いたまま

冬が到来する。ひざ掛けが滑り落ちても気にもかけずただじっと暖炉の炎の揺れる様を見つめておられた

そして季節は巡り1年が過ぎ、あの日がやって来た

メンデルス王国で最も景観の誇る内海を見渡せる崖へ行きたいという申し出を聞いたエレノアは青ざめて膝から崩れ落ちた。それをメンデルス国王クロウドがしっかりと支える。シエンは頭を垂れ膝をついた姿勢のまま静かに言った。

「フェルダ様には私が傍についております故、エレノア様のご心配の及ぶところはございません」

「それはもちろん……、貴方がついていてくれるのでしたら……ですけど……」

泣きそうな顔をして縋りついたエレノアの手をクロウドの手が優しく包む。

「シエンの言うとおりだ。フェルダのことは心配ない。シエン、全てお前に任せる」

「はっ、かしこまりました」

シエンが玉座の間を退室すると、エレノアは目尻に涙を浮かべた。それをクロウドがそっと拭い、つと窓の外空を仰いだ。

「あれからもう1年になるのか。長かったのか、早かったのか」

エレナの訃報、フェルダとその側近の重体、そのどちらをより悲しめばよかったのか。今のフェルダは一年前までの輝かしかった青年の面影など微塵も残っていない、抜け殻のように心の無い姿と成り果てていた。

エレナがどのようにして死んだのか、全てシェンから聞いた。それはエレノアを気絶させ、クラウドも青ざめて思わず玉座に崩れ落ちてしまうほどの事件だった。

それを目の前で見たフェルダの衝撃は一体どれほどのものだっただろうか。姉が目前で、助けることもできずに死んでゆく様だけをその瞳に映したフェルダの悲しみ、悔しさ。それは無念という一言で片付けられるものではない。

フェルダはエレナを愛していた。

愛する者がもうこの世にはいない。それを乗り越えろとは今のクラウドには言うことができなかった。もし妻のエレノアが同じ目にあつたとしたら

「私なら狂い、そして世界を破滅させてしまっただろうな……」

シュベール帝国の女神の子息との婚儀は元々なかった、ということでは処理された。それは向こうからの申し出だったが、クラウドもそれで了解した。

もしエレナをシュベールへやると言わなかったら

クラウドはかき消すように首を静かに横に振った。

「私を殺したいほど憎んでいるだろう」

「クラウド様……！そのようなことを仰るのは止めてください！」

「エレノア……」

強く抱きしめてくるエレノアの温もりが今はとても辛い。自分の下した決断がこのような悲劇を生んでしまったことは変えようのない事実。

だがフェルダは殺したい筈の父親を憎む感情すら失くしてしまった。国民にはエレナは嫁ぎ、フェルダは病気のため長期療養中ということで真実を伏せている。

フェルダの人望は厚い。1年経つ今でも絶え間なく見舞いの品が寄せられてくる。しかしそろそろ限界も来よう。酷なのは分かっているが、彼が生きている限り、次期国王であることには変わりはない。憎むなら一生憎めばいい。それを背負うことは父親の役目だ。

そしていつか、エレナの死を乗り越える時が来たら、フェルダは希代の名王となることだろう。

その時まだ私を殺したいと憎んでいたなら、私はあえて息子の剣をこの身に受けよう。

だから、今は生きろ、フェルダ

「まだ風は冷たいですね」

近くの観光スポットである名所を避け、隠れるように人目の無い崖

の上に、シェンは車椅子のフェルダを連れてきた。気配を探ればフェルダの父のかつての側近達が数人いるのが分かっていたが、今のフェルダにはおそらくそれを感知する能力はないだろう。シェンは黙っておくことにした。

フェルダの膝にはエレナの好きだった薄桃のセティアラの花束が乗せられてある。

今日で1年。エレナ王女がこの内海で眠りについて今日まで、色々なことがあった。否、なかったと言うべきか。きっと我が主の中では時は1年前から止まったまま、その針が進むことはなくなったのだろう。

王妃エレノア様の弟君ケビン殿は、同じように内海を望む絶壁で最期に何を思ったのだろう。

絶望か

憎悪か

悲観か

懺悔か

しかしそれでも、愛した人は生きている。たとえ奪い返すことのできない相手に奪われたとしても、それでもエレノア様はこの世に生きておられる。

シェンはケビンの想いに賛同はしない。彼の想いは狂気となりエレノアを襲った。しかしこうして崖の淵に立つと、なんと死への甘い

誘惑が立ち昇ってくるのか。

ケビン殿はその誘惑に打ち勝つことができなかったのだ。

それを懸念すると、主をここへ連れてくるべきではなかったのかも
しれない。

しかし、誰が断れようか。

「シェン、姉さんのいる海へ連れて行ってくれ」

いつ摘んできたのだろう、その手に花束を抱え、主が微笑んで私に
命令を下された。1年ぶりの主からの命がどんなに私の心を揺さぶ
ったか。

その微笑みを見た時、やはりフェルダ様はケビン殿とは違うのだと
確信した。

お連れしよう、内海を見渡せる絶壁へ。

「俺はまだ死なんよ」

シェンは目を見開いて体を震わせた。

主が……フェルダ王子が車椅子から立ち上がった。花束を握る手も、
地をしっかりと踏む両足も、そして内海を見つめる強い瞳も。

1年前までの凜としたメンデルス王国の次期国王の姿。惹きつけら

れる。

「この花束は姉上への手向けではない。今も姉上の好きだった中庭には花が見事に咲き誇っていることを知らせるために持って来たのだ」

「王……子」

フェルダはそれを海には投げ入れず、絶壁の端へそつと横たえた。

「1年……お前には腑抜けな俺を見せてしまったな」

「そのようなこと!」

「だが俺は……いや、私はまだやらねばならぬことがある。それは姉を偲ぶことでも、父を憎むことでもない」

「王子……」

「私はメンデルスの王になる」

「フェルダ王子……!!」

シエンの目から涙が零れ落ちる。

「シエン、私にはお前が必要だ。1年もお前をほったらかしていた私だが、ついて来てくれるか」

シエンはその場に片膝をつき、頭を垂れた。

「は！このシェン、命尽きるその時まで、貴方様のために」

フェルダは表情を柔らかくして口元を上げた。

「ありがとう、シェン」

フェルダは内海を見渡した。

この海のどこかに姉はいる。これから忙しくなるだろうから毎日ここへ来ることは叶わない。だから城から海を望める部屋を造り、そこを執務室にしよう。

姉さん

貴女がいつも俺に言ってくれた

「立派な王になって」

俺は貴女の望む王になります。

だからこれだけは許して下さい

貴女のことを永久に愛し続けることを

「それにしても、監視されるには人数が多くないか？」

「あれ、気付いておられましたか」

「無論だ。老体が木の影にしがみついているは無視できるものも笑いを堪えるのに必死で無視できまい」

「ええ、私も少し不憫に思っております」

「帰るか。ここの潮風はお前を含めて老体に長居させるにはまだ冷たい」

「私、まだ34です」

「今年35だろう」

「ひどい！35はまだ新鮮ですよ」

「そうか、ではこれからも容赦なくこき使わせてもらおうとしよう」

「はっ、わ、私、持病の腰痛が……」

海に踵を返し、笑いながら去ってゆくフェルダの後ろ姿をシェンは涙を溜めた目を細めて見つめ、その後を追った。

メンデルス王国に新国王が誕生したのは、それから一年後、フェルダが17になった歳だった。

24（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

これで長いプロローグは終わり（！？）次回よりタイトルに沿った本編が始まります。

アクセス、お気に入り登録本当にありがとうございます。
よろしければこの先もお付き合いいただければ幸いです。

ところで、この小説を読んで下さっている方は、姉弟が大好きと考えてよろしいのでしょうか。

いえ、あまりに姉弟というジャンルが浸透せず、姉弟（主に弟攻め）好きの私はあまりに肩身が狭く、こうしてひっそりと姉弟小説を書いている次第で……。

それでは、改めましてここまで読んでいただきありがとうございます！

拙い小説ですが、これからどうぞ宜しくお願いいたします。

さつきから後ろにくくった髪がピンピンと引っ張られている。

私の頭は釣竿か、と心の中でエサも針もついてない釣糸に食いついている小魚にため息を吐いた。

だが私もやらればなしでいるのは性分ではない。ふふん、私の竿にかかろうなど、100万年早いのだ。

いや、この小魚ならばあと十数年で……。

とにかく私は立ち上がった。

「痛—————!!」

たった一秒後に小魚は私の竿にかかった。

「ジハイル王子、酷いです。最近抜け毛が多いの気にしてるのに、はげたらどう責任とってくれるんですか」

立ち上げれば手を伸ばしても背中に垂れ下がっている一房の黒髪には届かないとちょっと大人気ないことをした結果、小さな王子はその髪を掴んだまま一緒に釣り上げられたのだ。

ジハイルはぴかぴか生えたての永久歯を出して無邪気に笑った。

「ははは！僕はシェンがツルツルでも構わんぞ」

「私はいやです」

「外見など王を補佐するのに問題ではあるまい」

「好みの問題です」

「奥方はツルツルがタイプではないのか」

「私の負けです、勘弁してくださいもう」

シェンはもう一度ため息をついた。中庭へ駆け出して行ったジハイルを流れる雲を見つめるような眼差しで見つめる。

メンデルス王国の前国王クラウドとその王妃エレノアの間に生まれた第二王子ジハイルは今年で7歳になる。クラウド似なのだろう、輝くような金の髪と、幼子に似合わず上から目線…大人びた物言い。きっとこの頃の前国王はこのような感じだったのだろう。そうなる。とジハイルの将来はああいう大人だということに必然となる。

「恐ろしい……」

シェンは木陰で花冠を作り始めたミニクラウドを見つめ青ざめた。

そして、その姿に懐かしい光景を思い出し重ねた。

あのお方もよくあの木の根元に腰を下ろし、花輪を作っておられた。

愛する弟のために

ジハイルの傍にリスや小鳥が集まってきた。あのお方も動物に愛される方だった。

懐かしい。そう感じてしまうほどの年月が過ぎた。

私もいめちえんして髪を伸ばしている。おかげでチビ王子の格好の餌食だ。

私は今はもう世界で起こる戦に参加はしていない。歳だから、と言いたいが、私などがいなくても最早負ける戦などメンデルス国王軍には存在しないからだ。

軍さえもいらないかもしれない。現国王が戦前に立つ限り。

あれからもう

「国王様のご帰還である――！！」

城中に響き渡った伝令にシエンは懐かしんでいた目を元に戻した。ベトヴェン国で起きた大規模な内乱を鎮めに出向いていた王が城に帰ってきたのだ。

戦況報告は伝令鳥ピッピによりすでに知っている。勝利。此度の戦も城で待っている者達の心配など無用の凱旋だ。

シエンは城門へ向かうべく、踵を返した。

「兄上え~~~~!!!!」

横を小さな台風がビューンとすり抜けていった。シエンは今日二度のため息をついた。しかしその口元は笑みが浮かんでいる。

「走ると転びますよー」

もう疾とづくに過ぎ去った嵐だが、シエンは嵐の通り道に向かって言った。

ジハイル王子は本当に歳離れた兄が大好きだ。それは憧れと敬愛も混じっているのだろう。

私のお仕えるただ一人の主。それがジハイル王子の兄だ。おっといけない、これも歳のせいだろうか。考え事をする足が止まってしまうのは。

シエンは少々早足で城門へ急いだ。

「おかえりなさいませ！兄上様」

ジハイルはメンデルス軍の筆頭をゆく兄を膝をつき敬礼したまま出迎えた。白馬に乗った兄は口元を上げ一度頷いた。

「私の留守中しっかり城を守ってくれたか」

「はっ！とどこおりなく！」

貴方、私の執務の邪魔ばかりしていたでしょう。という台詞を顔に思い切り書いたように口を曲げながら後から来たシェンは帰ってきた主を出迎えた。

「おかえりなさいませ、フェルダ王」

「ああ、ただいま、シェン」

ごくろうだったな、とフェルダはジハイルに気付かれないように小さく笑って、骨折りシェンを^{おなひ}労った。

「ジハイル、顔を上げて楽にしなさい。お前は私の可愛い弟。私に對し礼節は必要ないよ」

「兄上……！」

ジハイルはパツと顔を上げて目を煌かせた。フェルダが体を倒して手を差し伸べると、ジハイルはまるで母親に抱きつくようにその腕に絡みついた。そのまま腕を引き上げ、フェルダはジハイルを馬に乗せた。

うぐぐ、ジハイル様め、すでにお一人で馬にお乗りになられるくせにわざと乗れないフリをなされるとはなんたる策士！お疲れのフェルダ様に磁石のようにぴったりとひつつかれて猫をかぶってうぐ！今チラ見された！この私をチラ見してなんたるしてやったり顔をお向けになられやがった！

「兄上。僕、兄上様のためにコレを作ったのです。受け取っていただけですか」

「ん？何かな」

「えっと、えっと……っ」

頬を赤らめて自分の手首に巻いていた花輪を切れないように慎重に外してフェルダに見せた。

「これ……なのです。本当は花冠を作りたかったのですが、時間が足りなくて……」

「これは……」

「フェルダ王……」

フェルダが花輪に向けた表情が変わったことに気付いたのはシェンだけだった。止めるべきか。

しかしフェルダはにこり微笑み、それを受け取った。

「ありがとうジハイル。一生宝物にするよ」

「兄上……！！！」

フェルダは抱きついた弟の頭をよしよしと撫でた。それをシェンは何も言わず見守ることにした。

あの時も貴方はそう仰った。宝物にすると。それは言葉通り、今も彼の寝室に飾られてあることを私は知っている。

「兄上、今日は一緒にいられますか」

「ああ今日は」

「ジハイル様、フェルダ王は戦から帰られて大変お疲れなのですよ。明日からずっと一緒にいられるのですから、今日はゆっくり休ませてあげてください」

うぐつ、睨まれた！その鋭い瞳は金龍王を思い出したぞ！

「兄上……すみません、僕全然気がつかなくて……。シエンの言うとおりでした。今日はゆっくり休んでください」

「そうだな、ではそうさせてもらおう。明日、お前の話を聞かせてくれるか？」

「はい！二人きりでたんまりと！」

「楽しみにしてるよ」

白馬から降り、ジハイルを片腕に乗せたまま城内へ入ってゆく直前、シエンはまたジハイルの勝利の笑みに心を折った。

「また戦前に立たれたのですか？」

「ああ」

フェルダがようやく解放され、シエンと二人で城の廊下を歩く。す

ると自然に二人の会話は濃密な話題へと切り替わった。それは王のフェルダではなく、かつての姉を慕って止まない頃に見せていたフェルダの姿と、それを見守るシェンの姿だった。

「あのですね、いくらの方が早いからといって、一軍の大將はいわば切り札。最奥でどっしり構えてこそ軍の士気は高まり、同時に皆もそれで安心して戦うことができるのです」

「仕方なかつた。私は早く帰還せねばならぬ事情があるのだから」

「……それは存じておりますが。それで、今日は？」

「うむ。1000単位でイツたから、終えるのに一時間もかからなかつたぞ」

まるで他人事のように笑い出したフェルダにシェンはピクピクと米噛の血管を揺らした。

「また1000人斬りですか。どれだけ世に噂を流させるおつもりですか貴方は」

当人は一言も言いふらしていないが、城下へ出ても、他国へ行つても、メンデルス国王フェルダの通り名が「1000人斬り」だの「軍神」だのと呼ばれている。それは決して悪いことではないのだが、あまり崇高な名をつけられては、それに挑もうとする果敢なチャレンジャーが出てきて困るのだ。

城門を叩いては「軍神フェルダにたのもー！」だのと乗り込んで来る者達は大抵そのまま信者になつてメンデルス軍の一員になるか（勿論厳正なテストがある）、魂が抜けたようにひよろひよると帰つ

てゆく者のどちらかだ。正直面倒くさい。

「まったく。貴方は神にでもなるおつもりですか」

「私の願いを叶えることが出来る神になれるのならば、私は世界を敵にしてもなるよ」

「フェルダ王…」

ではな、と爽やかに笑ってフェルダは執務室の隣にある私室へ入っていった。

「王……」

8年の間欠かさず続けられている彼の日課。

フェルダ様はこの部屋であのお方と対話されるのだ。唯一彼を支えるあの方と。

この日課は私以外誰も知らない。クラウド王も、エレノア王妃も、ジハイル王子も。一日に数時間、フェルダ様はこの部屋に籠られる。

そして、最愛の人と話をする。延々と。

そのことについて私は何も言うつもりはない。

フェルダ様は王となられてから今日まで立派にメンデルス国を支え守っている。そのお力ももはや私など足元にも及ばないほどになった。クラウド王との手試合はないが、もし今剣を交わせばおそらく。

あの方がこの世から去り、私は正直、もうフェルダ様は立ち直ることではないと思っていた。それは私にとっては何の問題もないことである。たとえフェルダ様が魂の抜け殻のようになられたとしても、私にとっては彼こそが我が主であり、忠誠を誓うただ一人のお方。

しかし彼はあのお方が亡くなった一年後、自らの意志で立ち上がり、メンデルス国の王になること。フェルダ様はあのお方の願いを忠実に守られたのだ。そして今は押しも押されもせぬ世界屈指の王となり、絶大な人望を得られている。

そんな彼を支えているのがまさか、幻想の中のお方だと誰が知りえようか。

もしこの部屋の中のフェルダ様を見た者が彼を狂っていると言ったら、私は誰であろうとその者を切り裂くだろう。そう、彼の血縁でさえも。

立派な王になられたフェルダ様。

だがそのお心はあの中から止まったまま。

彼の心の中には今も姉君、エレナ様が生き続けておられるのだ。

「あれからもう、9年の歳月が過ぎたのか……」

これがフェルダ様にとっての幸せなのかどうなのか。

それでも私は生き続けて欲しいと願っている。

「ふ、私の方こそ狂っているのかもしれない」

今のフェルダ様の微笑みも、凜々しさも、優しさも全てが取り繕ったものだとしても。

心の中が凍りついたまま時を止めてしまっていて。

「何故でしょうね、私は貴方を樂にしてあげたいと思えないんですよ」

シエンは結った長い髪を揺らし、その場を立ち去った。

1（後書き）

本編（ ）スタートです。

あらためまして、これからもどうぞ宜しくお願い致します。
アクセス、お気に入り登録本当にありがとうございます。

フェルダは部屋に入ると三段棚の引き出しを開け、きれいに並べられてある白のハチマキの数を確認した。増えることも減ることもないそれは、今日も同じ数だけある。

最後にハチマキを巻いたのは9年前にモツアト国で起きた内乱だった。モツアト国軍からの要請だったが、メンデルス国軍は民衆側につき、あの国の王政は滅んだ。今はその時民衆の指導者だったハミルがモツアト国の代表として国をまとめている。あの時が縁でハミルとは時折文を交わしたり、近くへ寄った折には訪ねたりして友好関係を築いている。

フェルダは引き出しを閉じた。

続いて窓を開ける。フェルダの表情が一国の王のものから一人の青年に変わり、柔らかな笑みを浮かべた。

「ただいま、姉さん。俺がいなくて寂しい思いをさせてしまいましたが？俺も寂しかった。姉さんがいつもお守りとしてくれるハチマキがないからどうにも気分が乗らなかったけど、早く貴女の元へ帰りたくて、今日は1000人単位で敵を倒していったよ。ああ、怪我はしていないから心配しないで。姉さんは心配症だから、俺は体に傷なんてつけないよ。でもわざと傷を作って姉さんに手当てしてもらうのもいい。目に涙を浮かべて俺の胸に包帯を巻いてくれる姉さん。俺は巻き終わるのが待てなくてそのまま姉さんを抱きしめてしまうだろうけど怒らないで。ふふ、怒っても離さないけどね。それに涙を浮かべたまま怒る姿の姉さんも可愛い。そうしたら姉さんの唇を塞いで涙を止めてあげよう」

フェルダはその一連を堪能すると、満足気に口元を上げ、深く息を吸い込み、海から微かに漂ってくる潮風を体中に浸透させた。姉さんが俺を抱きしめてくれる。

空は今日も晴れ渡り、海の景色もくつきりと見える。優しい風がフェルダの柔らかな金の髪をそよそよと揺らす。

「ああそうだ、姉さん、俺、髪が伸びてしまって。姉さん、そろそろ切ってほしいんだ。シエンより姉さんが切ってくれる方が上手いんだ。だから姉さんに切ってもらおうと放っておいたらワカメのようになってしまったね。シエンに無理やり切られたよ。まったく。俺の髪は姉さんが切るために存在しているようなものだというのが」

窓際に設置されたテーブルにつくと、調度良いタイミングで扉がノックされ、シエンが入ってきた。

「お茶をお持ちいたしました」

フェルダは窓に顔を向けていて返事はしなかったが、それはいつものことなので特に気にすることもなく、シエンは紅茶の用意を始めた。

カップをフェルダと、その向かいの空席に1つ置く。それもいつものことだ。ちらりとシエンは主の顔を覗いた。とても穏やかな顔をして海を見つめていた。おそらく幻想の中の姉君と会話をしているのだろう。シエンもつられて穏やかに瞳を細め、紅茶を二つのカップに注いだ。

「それでは失礼します」

「お前も一緒に飲もう」

シエンは下げた頭を上げて首を傾げた。いつもはそんなことは言わないのに。フェルダがやっとシエンと目を合わせた。

「一人は寂しいんだ」

「王……」

こみ上げる気持ちをグッと押さえ込む。フェルダ様自身も本当は分かっただけなのに。幻想は幻想でしかないことを。

エレナ様はもう死んでしまったことを。

それでも、気が振れてしまったと思われても仕方ない振る舞いも、本当はそれを誰かに咎めてほしくて、止めてほしくて。

姉君はもういないと言ってほしくて。

フェルダ様はそれを望んでいるのだ。そしてそれができるのはこのシエンしかない。

メンデルス国王となられて7年。24歳になられた今もフェルダ様は王妃を娶らず、お一人で国を支えておられる。

父君である前国王クラウド様もあれからそういう話をフェルダ様にもちかけるようなことはなかった。おそらくエレナ様のことに少なからず責任を感じていらっしやっただろう。城内でも、そういう

話題はわざとらしいほどに持ち上がらなかった。

フェルダ様を慕うメンデルスの国民は、フェルダ様の明るさにどこか感じるところがあるのだろう、今でも毎日どこかしらから花や野菜やパンなどが城に贈られて来る。皆、王が好きでたまらないのだ。良い国だと心底思う。それは前国王クロウド様が礎^{いしずえ}を築き、フェルダ様が確固たるものへと導かれた。未だ内乱が起こらないのも国として誇れることだ。だからそれ故、国民はフェルダ様に対して敏感になっているのかもしれない。

フェルダ様が笑っている顔を見るのが本当は辛いとは決して口にできない。

早く姉君のことは忘れて、たとえ忘れられなくとも、新しい出会いは必ずあるからそれを探されてはどうか。

そんなことを言える筈も思える筈さえもない。

本当に愛する人を失った時の末路が今のフェルダ様のようならば。私ならその孤独に耐えることが果たしてできるだろうか。

今のフェルダ様は片足ほどの幅の崖の上をひたすらに歩き続けている。たったお独りで。その命が果てるまで。きっと。

「ではお言葉に甘えてご一緒させていただきませうね。はあ、もうジハイル王子のやんちゃぶりで疲労困憊ですよ」

シエンは勧められてエレナ様の席へ腰を下ろした。

「元気なことは何よりだ。城も明るくなって良いことだ」

「いつも王の傍にひっついていてくれれば楽なんですがね」

「はは、私もできるならそうしていてやりたいところだよ」

フェルダは海を眺めた。

「姉上がいたらきつと……あの子はもつと幸せだったろうね」

だけれどフェルダ様、このシェンは貴方様にエレナ様を忘れるとは
言いません。

それがたとえ貴方にとって残酷なことであろうとも。

愛し抜いて尽きる人生もまた、星の数ほどある愛し方の1つだと、
私は思うのですよ、フェルダ様。

3 (前書き)

カテゴリー「ファンタジー」らしく、少々ファンタジー要素がありますのでご容赦願います

メンデルス国の隣に位置し、かつモツアト国の隣国でもあるシヨパー二国は世界5大大国の中でもっとも広く、そして平凡な国である。

シヨパー二国王もメンデルス国王のような誉れ高き人望があるわけでもなく、軍事力も五国の中では最も低い。しかし食糧自給率だけはトップである。つまり簡単に言えば田舎の国、そう世界から認識されていた。

そのシヨパー二国の自治区の1つ、マズイル地区はモツアト国寄りの内海沿いにあり、漁業が盛んな所だ。

浜は膨大な広さのため、国から特に何も制定されていない今は、漁村の民たちが自由に固有の浜を持ち、いわゆる私有地として使っている。

この、岩に挟まれた浜も私有地の1つだが、その地形のため、ここを私有地として住んでいる民は近くの漁村から孤立するように暮らしていた。無論、もう一度言うが、それは地形の所為であり、決して村八分にされているわけでもない。

ここの私有地であるパペット爺さんは白髭を顎に蓄えた穏やかな人物で、村民からは慕われている爺さんだ。

「うおーい、口を開けてくれ」

何かに遮断されたようなこもった声が聞こえ、砂浜で定置網の縫合をしていたエリイは、手を止めると慌てて立ち上がり棧橋へ駆け寄

った。

「まあ、ボエ、またおじいさんを困らせて。ダメよ。おやつみたい焼が食べられなくなってもいいの？」

海面から晒している山のような形の背中では太陽の日差しと潮風ですっかり乾き、長い毛並みもふもふと風になびいている。その毛の中にエリイは手を入れて、梳くように撫でた。すると、パペット爺さんを飲み込んでいた口がパカつとがま口のように開いた。ボエは舌の上で呑気に胡坐をかいていたパペット爺さんを舌に乗せたまま棧橋へ下ろした。

「ふう、助かったわい。こいつはわしの言うことなどんと聞かんからのう。せつかく齒磨きをしてやっていたというのに、恩知らずなやつじゃ」

ボエはシュンとした……かどうかは分からないが、落ち込んだように「ぼえ」と低い声で鳴くと、背中からプシューと海水を噴出した。もふもふしていた毛がかかった水でべったりと湿った。

「おじいさんにかまってもらいたかったのね。今が一番遊んでもらいたい時期だもの。おじいさんを母親のように思っているのだわ」

「どうだかのう。おぬしとあやつは互いの言葉をまるで理解しとるように意思疎通するが、わしは動物の考えることなど分からんからのう」

パペット爺さんはボエを見上げた。まだ一歳とはいえ、身の丈はゆうに10メートルを超えている。成長すれば、数十メートル単位の大きさになる。

ボエは内海に潜む海獣で、正式名称は難しくて長つたらしいのでこの場では割愛させていただく。鳴き声が「ぼえ〜」なので、名前をボエにしたのは何を隠そう今飲み込まれていたパペット爺さんだ。恩知らずといえは恩知らずだったが、エリイの言うとおり、ボエはただ口の中を気持ちよくブラッシングしてくれていたパペット爺さんじゃれていただけである。

ボエは見た目は物語に出てくるようなぶっくりとしたクジラだが、ラッコのようにもふもふとした毛が全身を覆っている。すぐに水分が蒸発してしまう毛質のため、海面に姿を覗かせると数分でふんわりとした毛が風に揺れる。ボエの色の種類は多種多様だが、このボエはウニのように真っ黒だ。

見た目が可愛らしいのか恐ろしいのかよく分からない哺乳類だが、性格はいたって大人しい。人間は襲わず、魚や海藻を食べる。だがキラキラしたものが大好きで、光り物を見つけると何でもかんでも口に入れてしまう傾向にあるのが特徴だ。そのため、たまに口の中に宝石や金貨が紛れ込んでいるので、それを見つけた日は、パペット家ではご馳走が出るのだ。

パペット爺さんは噴水のように海水を出しているボエを懐かしそうに瞳を細めて見上げた。ボエの背中をまたぐように虹がかかっている。

「こいつの母親はわしに宝物を二つも運んできてくれたわい。あれから何年になるかのう……」

「おじいさん……」

ちょうどその時、沖合いから船が戻ってくるのが見えた。

「あつ、おじいさん、帰って来ましたわ」

「おお、今回も大漁の旗が上がっておるの。あのもやしのように白くてひよろひよろだったガキンちよもすっかり一人前の漁師になりおって」

パペット爺さんはエリイにも顔を向けた。

「お前さんもじゃよ、エリイ。毎日花や菓子売りでわしを養ってくれておる。わしは感謝しとるよ」

「ううん、感謝しているのは私の方。記憶のない私を今日までここに置いてくれたのはおじいさんだもの」

「もう家族じゃ」

「はい」

二人は微笑み合った。

そうこうしている間に、船は栈橋へつけられ、船から降りた男はロープで船を固定し始めた。二人がそちらへ向かう。ボエも背中に虹を背負ったままぶかぶかについてゆく。

「おかえりなさい、ケビン」

そう呼ばれて振り向いた男は、金のサラサラとした短い髪を揺らし、

静かに口元を上げた。

「ただいま、エリイ」

3（後書き）

アクセス、お気に入り登録本当にありがとうございます。

シヨパー二国マズイル地区沿岸で暮らすパペットは、彼が50の時に妻を亡くした。

二人の間には子供はいなかった。時に寂しさを感じることはあったが、パペットと妻は穏やかな日々を過ごし、妻も最期は「幸せでした」と微笑んで眠りについた。

そんな普通の人生ではあったが、独りというのは思ったよりも静かなものだった。

漁に出て、帰ってきた時に家の明かりがついていないと、闇夜に佇むボロ家はまるで廃墟のようだった。

もともと村から外れたところに住んでいることに加え、パペットの家は壁のような岩に挟まれ孤立している。パペットは歳を取ってからのんびり暮らしていたが、それでも心の奥の寂しさは日々募るばかりだった。

妻を埋葬した翌月、月に一度の引き潮がおとずれた。

船をつけている桟橋の先の距離でさえ、腰が浸るか浸かないかほどに水位が下がり、パペットは貝堀りをしようと浜辺へ出た。

やや。

昨日までは何もなかった海岸に、ぼてんと黒い山ができている。思

わず二度見をしてしまったが、何度見ても夢ではないようだった。

大きさはどれほどであろうか。10メートル、20、いや、それ以上かもしれない。マイ漁船が小魚に見えるほどでかい。

貝堀道具を置いて黒い山に近づくと、全体が苔コケというべきか、藻モというべきか、なにやらもふもふした毛が潮風で揺れていた。手その中にずぼりを入れると、山は体温を持っていた。

「こりゃあ、山じゃない。海坊主じゃ」

その時いきなり顔の横で毛が割れ、黒の宝石のようなツルツルテカテカとした丸が現れた。それは海坊主の目玉だった。思い切りその瞳にパペットを映している。

海坊主はパカッと口を開けた。とても大きな口だ。口の中で気を付けが余裕でできるだろう。

一瞬、食べられてしまうかと心臓が跳ね上がったが、その口の中からペツと何かが飛び出てきた。

「うおっ」

それはゴロゴロと砂浜を転がり、止まった。パペットは顎に手をあて、髭をじりじりとさすった。なんとも冷静な自分がいる。

「ふむ。あれじゃな。どうみても……」

それは人間だった。

青年……いや少年のようでもある。砂塗^{まみ}れのその小坊主はピクリとも動かなかった。

死んでいる

それがパペットの見立てだった。常識的に考えて、怪物の口から出てきた時点ですでに生きている確率は0に近いと言わざるを得ない。

パペットは海坊主の目と向き合った。

「お前さん、ここは三途の向こう側ではないんじゃないが」

死体を持ち込まれても、とても困る。海坊主は口を開けっ放しにしたまま山のように動かない。

「おい？どうした？何固まっとるんじゃない。しまりのない口をしているとモテンぞ」

しかし動かない。その時、何故そんな行動をとったのか自分自身にも分からない。パペットは開いたままの口の中をひよいと覗いてみた。

洞窟のような暗い喉の奥で何かが光った。そろそろ老眼だったが、遠くのはよく見えるのが老眼の特徴で助かった。よく見ると、それは首飾りだった。喉の奥に引っかかっている。

パペットはなんとなく嫌な予感がしたが、とりあえず確認してみた。

「お前さん、あの首飾りは実はお前さんの武器で、欲深い人間がそれを取ろうと口の中へ入った瞬間にぱくりとかいう展開じゃなかる

うな」

砂浜で砂塗れになっている小坊主をチラ見する。もしやあの小坊主はその巧妙なワナに引っかけた成れの果てなのではないだろうか。だがパペットは口の中へ足を踏み入れた。食べられてしまうかもしれないという恐怖がまったくなかった。それはそれで構わないとさえ実は思っていた。この先孤独に死んでゆくのであれば、コイツのエサになれば少なくともコイツは今日一日は生き延びるだろう。見たところ、引き潮で乗り上げ、デカイ図体は自分の力で海へ帰れなくなってしまうている。まったくドジな海坊主だ。

海坊主の口の中は見えた目以上に広がった。さらに驚いたことに、歩きにくいぶよぶよとした舌の脇にはよく見ると宝石や金貨、ガラス瓶、それが割れた破片さえもあった。痛々しくも、それは口内に刺さっていた。

パペットは喉の最奥にぶら下がっていた首飾りを手に取り、いったん外へ出た。

すると、まるで目的を終えたかのように、海坊主は口を閉じ、そしてあの顔ほどある黒目も閉じられ、もふもふした毛に隠れて再び山のようになった。

パペットは首飾りを目の高さまで持ち上げてみた。エメラルドが光りに反射してとても美しく、おそらくは相当高価なものだと直感した。

振り返り、砂塗れの小坊主を見る。よく見ると金髪で綺麗な顔をしていた。砂を洗い流せば、もしかすると相当な男前かもしれない。

彼にこの宝石は何故かとても似合う気がした。

「もしや、これはお前さんのかの？」

宝石の裏に、「エレノア」という文字が彫ってあった。それは女性の名前だ。この小坊主の大切な人の名前なのか、それともまったく関係がないのか。どちらにせよ、それを確認する術はもうない。何故ならこの坊主はすでに

「エ……レ……」

息がある！

パペットはさっきの海坊主のように大きく口を開けると、大慌てで家まで戻り、魚や海藻を乗せて引く砂ゾリを持ってまたやって来ると、小坊主を乗せてどうにか家まで引く張っていった。

水をかけて砂を流してタオルで体を拭き、くるんだままベッドへ寝かせると、首筋に手をあててみた。血液の循環する鼓動が伝わってくる。

「お前さん、頑張るんじゃないぞ」

エレノア

小坊主が口にしたのはたしかに宝石の裏に彫られてあった名前だった。

パペットは坊主の枕元にさっきの首飾りをそっと置くと、またさっきの海坊主の元へ戻って行った。

「おいお前さん、口の中に刺さったガラスの破片を抜いてやるから、口を開けてはくれんか」

もふつもふつと口の上を叩いてみるが、海坊主はぐったりしているようで、口も目も開けようとしない。

太陽は容赦なく燦々^{さんさん}と海坊主の体を乾かしている。この背中の上で昼寝をしたら気持ち良さそうだが、コイツにしてみれば今まさに危機的状況である。自分で海へ戻れない海の生き物の行く末は1つしかない。

引き潮が通常の海面の高さに戻るのは今夜だ。それまでに生き延びさせてやる事ができれば、海坊主は自力で帰ることができる。

パペットは家から取りつけたけのタオルと布を持ってきた。

海坊主の目の横にハシゴを立てかけ、海水を含ませたタオルや布を背中に広げてゆく。今がまだ真夏でなくて助かった。もしこれが真夏であれば、布が乾く時間と水をかける時間が間に合わず、海坊主はカラカラになってしまったであろう。

「頑張るんじゃぞ、頑張るんじゃぞ」

気が付くと、夜空に星が瞬いていた。

「どうやら、お前さんは運が良かったようじゃのう」

パペットは胸まで海水に浸りながら、ぺしょぺしょと海坊主の口の上を叩いた。もう水をかけなくても、波が海坊主の体を濡らし、自らも気持ち良さそうに背中から噴水のように水を噴出した。

ハシゴもタオルもどこかに浮いているだろうが、今日はいろんなことに体力を使ってしまった。ここは穏やかな海。明日もその辺に全部ぶかぶかと浮いているだろうから、もう今日は何もしないことに決めた。

「お前さんのガラスの破片を抜いてやりたかったんじやがのう。もう……行ってしまうのだろう？ ほれ、お前さんの住むべき場所へお帰り。あんまり変なモンを飲み込むんじゃないぞ」

パペットは最後にもう一度口の上をぺしりと叩くと、ニツと笑って浜辺へ戻り、もう海坊主を振り返ることはなかった。

家に帰ると、真っ暗の部屋に明かりを灯した。ベッドには運び入れた時と同じ状態のまま、小坊主が眠っていた。

小さな明かりをベッド脇の棚へ置くと、小坊主の顔が淡く照らされた。拾った時は慌てていたから顔をよく見なかったが、こうして今見ると、かなりやせ細っていた。色もイカのように白い。

「まったく。今日はとんだ一日だったわい」

パペットは濡れた服を脱ぐと、着替えの服が入っている棚を見てため息をついた。全棚開けっ放しの引き出しは全部空っぽだった。今

頃はそこらの海上をクラゲのように漂っていることだろう。

暖炉に弱い火を灯し、椅子の背に服をかけると、パペットは自分のベッドへもぐりこんだ。隣に眠る小坊主のベッドは妻が使用していたものだ。早々片付けなくて良かった。

その日の夜は、寂しさを感じることなくぐっすりと眠ることができた。

大きなくしゃみで目を覚ましたパペットは、真っ裸の自分に一瞬驚いたが、昨日の一件を思い出すと暖炉の傍で乾かしていた衣服を身につけた。海水を被ったまま干していたのでパリパリして海臭い。

暖炉の火は消えて灰だけが残っていた。そして、妻のベッドに寝かせていたあの金髪の小坊主の姿も消えていた。

もしかして夢だったのか

まだ出会って一日しか経っておらず、会話も何もしていない小坊主がいなくなったところで寂しいだのという感情は芽生えるはずもないが、目を覚ましたのならせめて朝飯を食わせてやるぐらいの義理はさせてほしいものだ。それを寂しさというのなら、あえて否定はしない。

パペットはため息をつきながら扉を開けて外に出た。

と同時に絶叫しながら全速で駆け出した。まったく昨日といい、老体に全速力させるとは何たる恩知らずか。

「うおおーいー！待て待てい！そいつは食いモンじゃないぞおい！ー」

あ、喰われてしまった。

昨日自分で吐いておいて、再びそれを食べてしまうとは。

パペットは肩で息をしながら目の前までやって来ると、棧橋の上に胡坐あぐらをかいて座った。やはり冷静な自分である。

デカイ口は相変わらずだ。

「お前さん、帰ったんじゃないのか？」

ギョロリとあの黒い目玉がこちらに向いた。最も、余すところなく黒いので、こちらを向いたのかどうかは正直判断しかねる。

「まあ、それはそうと、すまんが今飲み込んだモノを出してくれんかの。アレはきつと不味くて腹を壊してしまう」

しばらく沈黙が流れた。目を逸らしたら負けだ。何の勝負が分からないが、負けられない。

「オボロ」

がま口のような口がパカリと開いた。パペットの勝ちだ。これが勝利品というわけだ。

「おおい小坊主、生きとるか」

舌のベッドに横倒れている戦利品に声をかけてみる。首にはあのエメラルドの首飾りがかけてあった。やはり大事なものだっただろう。それにはあまり触れない方がいいのかもしれない。パペットは首飾りのことは一旦忘れることにした。

「早く胃液で溶けてくれればいいのに……」

「ああ？なんだって？」

薄っすらと目を開けた小坊主は、蹲うすくまったままボソボソと喋った。最近耳も聞こえにくいんだから小声で喋られてもよく聞こえないのだ。第一男ならハッキリクッキリ大きな声で喋るべきだ。それがパペットの今まで生きてきた人生の男道だったが、今はすっかり角も丸くなつてのんびり屋に転職してしまっている。

兎にも角にも、どうにもこの小坊主は生きようとする意志がないということとは分かった。

そしてこのデカブツだ。この黒い山のようなクジラ……とはちよつと違う。ラッコ……最近のラッコは20メートルくらいあるものなのか。まあ何でもいい。漁に出てこの道40年。海にはまだまだ知らない生物がいるということのを改めて思い知った。

「ボロ、お前さんの名だ。ボロ、とりあえずその人生をなめきつている小坊主を返してくれんか」

「オボロ」

どうやら今度は「ペツ」ではなく、空飛ぶ魔法の絨毯のように彼を舌に乗せたまま、予想外に長い舌をにょろんと伸ばして棧橋の上に置いた。再び日の目を拝むことができた少年（青年かとも思ったが、どうみても十代の子供だ）は、まだ独り言のように何かをブツブツと呟つぶやいている。

仕方ない。

パペットは覚悟を決めた。

「お前さんの命はこのパペットが今この時をもって預かることにした。いいか、小坊主。死にたい時はまずワシに言え。ワシが首を縦に振ったら、後の人生は好きなように決めるといい」

そしてお前もじゃ！と、黒い山のボロと向き合う。ボロは驚いたのかどうなのか真相は分からないが、少しはびくりしたのだろう。波を立てて開いていた口がパクリと閉じた。

「お前さんもこの小坊主は喰わないこと。こいつはエサじゃない。あと、これも何かの縁とワシは思うことにした。お前さんの口の中を後できれいにしてやるからの」

最後に穏やかに笑いかけると、ボロは背中からプシューと噴水した。ボロの上に見事な虹がかかった。

「さて。まずは腹ごしらえかの。お前さんも歩いて栈橋まで来れたということは、目立った怪我はしてないんじゃないやろ。少しボロと遊んでおれ。朝飯を用意して来るからの」

「ボロ」

クジラッコ（もうややこしいのでくつつけた）はひと鳴きすると、そのバカデカい図体を豪快に翻して海中へ潜っていった。案の定、パペットも小坊主もぼっそり水を被った。もしやそのままもう二度と現れないのかもしれない。と考えること数十秒後、遠くの海に水柱が上がった。そのまま天を貫いてしまうのではないかとも思うほどの高さとその圧巻さにパペットはしばし釘付けになる。

水柱はボロが海上に跳ね上がったものだった。そして次の瞬間に再

び海中へダイブする。大波が押し寄せ、棧橋に繋いであった船が大きく揺れ、当然ながらまたパペット達は水を盛大に被った。

何も言い返す言葉が見当たらない。そう思った時、目の前にひょっこりまたボロが顔を覗かせた。可愛らしい表現を使ったが、そのデカさから、真実が相当ど派手であつたことはもう一々説明すまい。パペットもこれが常だと納得することにした。

「なんじゃ」

「ボロ」

ボロはまたがま口を開けた。その中身を見た瞬間、パペットは笑顔を引きつらせた。

「お前さんはワシを廃業に追い込むつもりかの」

漁師顔負けの大漁の魚達が口の中でピチピチと新鮮に飛び跳ねていた。

その後、この生物の正体は同じ漁師仲間に聞いたり図鑑を見たりして判明した。正式名称はボロの全長くらい長かったため、自分で「ボロ」と名称変更した。

ボロは魚と海藻しか食べない哺乳類で、光り物に目がないらしい。なるほど、どこぞで漂っていた小坊主を食べたのではなく、彼の首にかけられた宝石がボロのキラキラレーダーに反応してしまったの

だ。だからボロの口の中はピンキリの光り物で溢れかえっていたのだ。しかしボロには、その中にボロにとって凶器になってしまうものがあることなど判別が付く筈もない。今までよく海賊の落とした剣などを飲み込まなかったとパペットは安堵する。

とにかく、口の中の鋭いものは全部取り除いてやった。宝石はそのままにしておいたが、口内から出ると、ボロは舌の上に収集物を乗せてパペットの前にべろーんと出した。ほとんどがガラスだったが、パペットは「ありがとう」と微笑んで口の上を撫でた。

しかし問題は海獣ではなく、同じ人間である金髪の小坊主の方だった。

とにかく人の話を聞かない。食事もほとんどとらない。動かない。ボウとして遠くを見つめるような目でどこかを見ている。

何故ボロに喰われる（今はそう表現しておく）ような場所、つまり海にいたのか、どこから来たのか、名前は、身元は、年齢は。そしてこれからどう在りたいのか。帰りたいのか、それとも

「息子になるか？」

パペットは虚ろな顔で海を見つめて砂浜にぽつんと座っている小坊主に言ってみた。

無論、彼にもおそらく家族がいて、向こうも彼を搜索しているかもしれない。あの首飾りの名前の女性もこの子の帰りを待っているかもしれない。

だが、その逆だったら。

たった独りで、居るべき場所に居られなくて、帰るに帰れなくて、いや帰りたくなくて。誰も待っていないかったら。

小坊主が着ていた衣服は海水で痛んでいたが、とても庶民の着れるような素材の服ではなかった。あの首飾りも、親指と人差し指で丸を作った程に大きな宝石など、一生拝むことのない高級品だ。

そして何より彼には内から滲み出る気品があった。おそらく……いや間違いなく高貴な身分だ。きっと、我が国シヨパー二国の政府に彼のことを伝えれば、そう時間がかからない内にどこの誰だか分かるのだろう。

しかしそれをもし望んでいなかったら。

いいや分かっているのだ。たとえどんなに無口でも、正体不明でも。

独りというものがどれだけ寂しいのか知ってしまえばもう。

独りになりたくないのは自分の方だ。

「ケビン」

パペットは目頭を熱くさせた。顔も綺麗だが、声も綺麗だった。

優しく微笑んで頷き、金髪の頭の上にポンと手を乗せた。

「ワシはパペットじゃ。さて、夕飯の魚を捕りに行こうかの」

ボロ、と低く鳴きながら沖合いで噴水しているボロの背中にはまた虹がかかっていた。

「またその話が、爺さん。25年も前の話を何度も聞かされるこっちの身にもなってくれ」

ケ빈はうんざりした顔で言うと、空になった皿の上にスプンを置いた。斜め向かいに座るエリイも困ったように笑っている。エリイの隣に座っているパペット爺さんはまったく気にしていない様子で続きを喋り始めた。

今日の夕食時の話題は、もう何度も聞かされて結末も覚えてしまったパペット爺さんのいつもの昔話だった。ようやくケ빈がここで暮らし始めるようになった経緯まで物語は進んだが、まだ物語の中間盤と言ったところだ。

パペット爺さんの話はまだまだ続きそうだ。ケ빈はエリイにスプンのおかわりを頼んだ。

15歳だと言う他には、ケ빈は自分のことを何も語ろうとしなかった。

もともと無口な少年なのか、それともやはり言いたくないことがあるのか。おそらく後者だろう。だが無理に身元を聞き出したりはしないことにした。話したくなったら話せばいい。帰りたくなったら……それを止める権利はない。その時が来るまで、息子でいてくれればいい。

それにしてもケビンは黙っていてもその滲み出る気品は隠し切れていないようだった。

高貴な物腰の中に垣間見える貴族ならではの目線。貴族全部がそうだとは言わないが、少なくとも平民の目からすれば、貴族など金にまみれて優雅な暮らしをしているようにしか見えない。ケビンはその貴族の中でも別格の階級か、もうここまでくればもしかや王族ではないかと思う時があった。

当初のケビンはとにかくそんな感じだった。

飯を見て「これは食べ物なのか」と眉間にシワを寄せ、スプンを渡せば不潔だと口を曲げる。まだまだたくさんある。ベッドが硬いと文句を言う、服を雑巾と勘違いする、浴槽で足が伸ばせないと外で薪をくべている私に叫んでくる。軽く凹んでもこれは誰もが同情してくれるだろう。

自慢の漁船を見せた時は、案の定「幽霊船のようだ」と言い放ったが、ケビンの悪気のない悪態……純粋な感想は二日もあれば慣れたものだった。いや、ここは己の器のデカさを評価したい。

ある日、パペットはケビンを幽霊船ならぬ自慢の漁船に乗せて一緒に漁をさせてみた。漁と言っても、初心者いきなり定置網の引き上げをさせるわけではない。遊びだと思えばいい程度に釣りを教えてやるつもりで同乗させたのだ。

生の魚は触ったことがないと言われた時はさすがに驚いたが、「じやあ初体験だな」と嫌がるケビンに釣竿を渡した。もちろんエサはつけてやった。魚を触ったことがないのなら、ミミズを触らせても

したらこのお坊ちゃんは失神してしまうに違いない。

釣りのやり方を説明すると、ケ빈は真剣な顔をして「分かった」と頷き、釣り糸を船のすぐ脇にぽちゃんと落とした。

この日は雨の後だったから、魚の食いつきは悪かった。その道40年のパペットでさえまだ3匹しか釣っていなかった。

そんなことから、パペットはケ빈がすぐ飽きるだろうと思っていた。まあ今日は仕方がない。いつもいいことばかりあるのが人生ではない。また晴れた日に連れて来ようとケ빈を振り返った。

ケ빈はじつと釣り糸の先を見つめていた。「糸がピンと張ったら魚が食いついた合図だ。一気に引き上げるんじや」という言葉を従順に守り、ケ빈はその時を待っているようだった。そしてそれはケ빈がここへ来て初めて興味を示したものだだった。

何分、何十分もひたすらに待って、ついにその時が来た。

ゆるゆるだった釣り糸がピンと張り、忙しく動き始めた。気付いたパペットは自分の竿を放り投げてケ빈の隣へ立つと、引き上げるタイミングを待った。

「今じゃ！思い切り引き上げろ！」

「う、うわあああ！」

海面から水飛沫を上げて魚が飛び上がった。

それは食べ応えのないような小さな魚だったが、ケ빈もパペット

も目を輝かせてその魚を見つめ、歓声を上げた。

ケビンが笑ったのもこれが最初だった。

二杯目のスープも飲み干したケビンは居心地が悪いように席を立った。食べ終わったエリイも立ち上がり、三人分の食器を台所へ運び始めた。

「その魚拓があそこに飾ってあるお魚さんのよね」

ベッドにゴロんと横になったケビンの目の前の壁の上には、色あせた紙に小さな魚が写った魚拓が貼ってあった。パペット爺さんは自慢げにふんふんと鼻から息を吐きながら胸を張った。

「そうじゃ。それからワシはこやつに漁の才能を見出し、幽霊船を任せることにしたんじゃ」

「自分で幽霊船って言ったら世話ないな」

ケビンが口を挟む。この話をする度、ケビンは少し照れたような素直じゃない子供のようにそっぽを向いてしまうのだ。

そんなパペット爺さんとケビンのやり取りを見る度に、エリイは自分のことのように嬉しくなっ—緒に微笑んだ。

そうしてケビンがパペットの息子になって16年の歳月が流れ、再びパペットに新しい家族ができた。

それがこの娘、エリイだ。

何の因果だろうか。ボロはまた人間を運んできた。ケビンの時とまったく同じ状態だ。

「私の話は……」

皿を洗いながらエリイはポツと顔を赤らめた。ケビンがふふんと笑う。

「分かっただろう、エリイ。自分の話をされることがどんなにこつ恥ずかしいか」

「だってケビンと私では境遇がまったく違うもの。私は……」

エリイには記憶がない。

パペットによって同じように拾われたとしても、ケビンはわざと自分の素性を隠している。それに引き換え、エリイは話したくとも、自分の名前、歳、どこからどうして来たのかまったく思い出せずに、ここへ来てもう9年も経ってしまっているのだ。

「案外もう30過ぎていたりしてな」

そうやってケビンはいつもからかう。エリイはぶうとほっぺたを膨らませた。

「そ、そこまでは……ううんでも……」

パペット爺さんが助け舟を出す。

「こりやケビン。今が盛りの娘に何てことを言っとなるか！エリイは本当に綺麗な娘じゃて。……ま、そうは言っても、エリイがここへ来た時はどう見ても十代前半辺りの可愛い姿じゃったからのう。それから9年も経てば、今20代であることはたしかではある」

「見た目に騙されるなよ、爺さん」

どうにもケビンは一言多い。

しかし、そういうケビンもここへ来た時が15で、16年後にエリイが来て、さらに9年経っているのだから、40なのだが、ケビンの持つ高貴なオーラと変わらず綺麗な顔立ちは20代後半と言っても大袈裟にはならない。しかし歳を重ねてきた分だけの仕草や表情はたしかに余裕のある大人であった。

そんなケビンのことを密やかにエリイは慕っていた。その感情が男としてのなのか、それとも兄、父親、友人のどれかなのか自分でも断定できないが、エリイの中でケビンは何故かとても自分に近い存在、特別な存在のように思えて仕方がないのだ。

あえて言うのであればそう、ケビンを見ているととても懐かしいような感覚が込み上げてくる。

そんな気持ちでエリイはケビンを見ているのだった。

この「エリイ」というのもケビンが名づけたものだ。

その辺りの経緯は、閑話休題が終わり、また本編へと戻る語り部パ

ペット爺さんによって明らかになるのだった。

6（後書き）

何がファンタジー要素だったのかと言うと、クジラッコでした。

アクセス、お気に入り登録本当にありがとうございます。

ケビンが来てから数ヶ月後、パペットの家はおんぼろ小屋から二階建てに進化した。

今は亡き妻と二人で暮らしていた時は部屋など必要なく、玄関を開ければ全ての生活用具が一望できたのだが、思春期のお坊ちゃんが来てからは何かと気を遣わなければならないことがあり、パペットはせめてケビンの個室を作ってやりたいと、これまでコツコツ貯めてきたお金で増築することに決めた。

だがしかしコツコツ金ではとてもお坊ちゃんに見合う部屋は作れそうになかった。

ケビンがいない時にテーブルの上に小銭を並べて見たが、部屋はるか、ふかふかのベッドを買ってやるのも難しいほど、パペットの貯めてきたお金はコツコツすぎた。

こうなったら、全て自分で木を切って自分で部屋と家具を作るのだ！そう意気込んでみたものの、出たのは大きなため息だった。

その時出かけたはずのケビンが家に帰ってきた。

「おい」

ケビンはパペットの息子になったとはいえ、そう簡単に「お父さん」と言ってくれる筈もない。ならば名前でもいいからと言ってみたが、数ヶ月経った今でもパペットの名前は「おい」と「あんた」だった。これが思春期というものなのかはよく分からないが、とりあえず懐

いてくれているような……いないような、まあとにかく日々楽しくあるので呼ばれ方などパペットにはどうでも良かった。

「なんじゃ、出かけるんじゃないかったのか？」

パペットはいそいそと小銭をツボに仕舞い始めた。特に隠す必要もないが、おそらくボンボンのケビンにとっては、逆に初めて見るような貨幣かもしれないと思うと何だか気恥ずかしかった。その小銭の全額はきつとケビンの首からぶら下がっているものの価値からすれば、ミミズ程度なのだから。

「もう出かけてきた」

と言い終わるや否や、ケビンはまだ仕舞いきれていない小銭の置かれたテーブルの上に、どすん！とテーブルの足が軋むほどの重さの袋を置いた。その衝撃で、張り詰めていた布袋が限界を超えたのか盛大に破れ、中から無数の金貨が弾けるように飛び出してきた。

「おわあっ！ な、なんじゃ、こいつは！」

ケビンは怪訝な顔をする。

「金だけど。見たことないのか？」

たしかに、このようにまるで大量に水揚げされた魚の山のように積まれた金貨は見たことがない。よく見ると、破けた袋の中には札束も紛れ込んでいた。

「ど、どうしたんじゃ、この金は……」

「売った」

パペットは途端に青ざめ、音を立てて椅子から立ち上がりケビンを振り返った。

「く、首っ、お前さんまさか!!」

突然詰め寄られたケビンは眉間にしわを寄せながら思わず後退おどろった。

「な、なんだよ」

まさかあの“エレノア”と彫られた首飾りを売ってしまったのではとケビンの首元を見たが、首飾りはちゃんとケビンの首からかかり、シャツの中に隠れていた。パペットはホッとして体の力を抜く。

「なんなんだ、変なジジイだな。それより、その端金はしたで足りるのか？」

いや、足りんよ、コツコツ貯めた貯金ではお前さんの個室を作つてやることなど到底でき

「え？」

パペットはケビンの指した先を見つめた。指先はツボではなく、金貨袋を指している。すっかりこの金山の存在を忘れていた。

「そ、そうじゃ、ケビン、この金は一体どうしたと言っくんじゃ」

「さっき“売った”と言ったのが聞こえなかったのか？」

「売ったとは……何を……」

「これ」

ケ빈はポケットに手をつ突っ込むと、無造作に何かを取り出し、パペットに見せた。ケ빈の手の平で数個の宝石がキラキラと輝いている。

見覚えがあるような。そうだ、思い出した。これはボロが海中から拾ってくる宝石達だ。さすがにガラス玉は紛れていない。

「あまり価値のある宝石はなかったから金にはならなかった」

どこがだ、とパペットは大声で叫び上げたかったが、その一方で、やはりケ빈はこういう宝石に囲まれて育った貴族だと再確認した。この金貨の山の価値を小魚を見るような目で見る辺り、大貴族であったことはもう間違いようのない事実だろう。

それならば一層彼の身元を確認するのは早いかもしれない

「で？どうなんだ？それでどの程度の改築ができるんだ」

「え？」

パペットは俯いていた顔を上げた。

「俺の個室を作るんじゃないかったのか？そんな暗い顔をしているということは、やはりそんな端では無理だったか^{はした}」

目頭が熱くなる。

「作っていいのか？」

「は？何を言っている。むしろ俺の方から願い出たいくらいだ。あんたの躰いびきが煩うるさくて、俺はもう我慢できない」

「よ、よし、作ろう。作るぞ、わしは作る！……じゃが」

「まだ何かあるのか」

「売った宝石はボロの宝物なのではないか？」

「いいんだよ」

ケ빈は説明した。ケ빈自体、宝石には興味がないこと（見飽きているのか、彼にとってはちゃんもので興味をそらないのかそんなところだろう）、ボロが勝手に自分に宝石を差し出してくること、それを受け取らないと怒って自分を口の中に入れてしまうこと。

それを一通り聞くと、パペットは涙をこぼして大笑いした。その涙が別の理由ででたことは秘密だ。

それから一ヶ月後、潮風にさらされてボロボロだったパペットの家は、質素ながらも潮風にも強い素材の二階建てに改築された。ケビン用ふかふかのベッドも設置した。

それでも金貨と札束は余りに余ったので、パペットは残りをケビン用に設しっえた真新しいツボの中に大事に入れて蓋をした。

「いつも思うがこのクダリはいらないだろう、爺さん」

ケ빈はパペット爺さんの亡き妻のベッドに寝転んだままウトウトし始めた。ケ빈とエリーの部屋は二階にあるが、このベッドはそのまま皆のごろ寝用として食卓テーブルの横に置いてある。

「何を言つとるか。全てがワシの大事な人生、大事な思い出なのじゃ。話の腰を折るでないわい」

「勝手にしてくれ」

「それにしてもボロは本当にキラキラしたものが好きだったわね」

「ボエもしっかり遺伝しているな」

ボロは一年前に子供を産んだ。ボロはメスだった。パペット達三人が名前をどうしようかと顔を見合わせた時、「ボエ」と鳴いたので、パペットが「ボエ」と名付けた。それから数日後にボロは大量の光り物を浜辺に置いて、そのままもう二度と戻ってはこなかった。

図鑑などで調べたところによると、この海獣は子を産むと死期が急速に早まり、子供の元を離れてひっそり死んでゆく習性にあるらしい。

帰ってこないボロに寂しさを感じずにはいらなかったが、今度は子供のボエがパペットの浜に棲みつくようになった。ボロそっくりの真っ黒で愛らしい海獣だ。

ボロの置いていった最後の土産は、ケビンとエリイを驚かせるほど高価な宝石が多く紛れ込んでいた。パペットにはどれも同じ価値にしか見分けがつかなかったので、二人にそれらは任せることにした。

そう、エリイもケビンと同様に宝石の価値を知る者だった。

6・5（後書き）

話がそれると、「・5」でござかし…付加しています。
評価ポイントを頂いてしまいました。
感謝感激です。

彼女がここへ来たのはもう9年も前になる。

そのよく晴れた日の昼、パペットとケ빈は漁に出るため浜へ出た。

ケ빈の漁の腕は彼が来て16年、ここいらのベテラン漁師からもお墨付きをもらうほど上達し、加えて彼の容姿は女性の目を惹くため、パペットにとって彼は自慢の息子に成長していた。

「お？ボロが帰って来ておるの」

桟橋につけた船の向かい側に黒い山が海面から覗いていた。

ケ빈はあまり村には出向かず、大体いつも独りで何かをしているか、何もしていないかであったが、よくボロの背中の上で昼寝をしていたり、釣りをしたり、食べられたりしていた。ボロの目にはどうもケ빈の首にぶら下がっている宝石がたまらなく映るらしい。

ここ数日、ボロはずっと留守をしていた。別にこの海岸がボロの家というわけではないが、ケ빈を連れてきた16年前から、何故かこの浜に居候している。いない時は内海一周旅行でもしているのだろう。その時はたいていキラキラした土産を持って帰ってくる。

「今度はどんながらくたを拾ってきたかの」

「ボロはなかなかの目利きさ」

ボロのいる桟橋まで歩いていくと、ボロは二人が来るのを待ってい

たかのようにパカリとがま口を開けた。

さて、今回の収集品は何だろうか。

「うわあっ」

「うおっ」

二人して同時に声を上げ、二、三步後退った。あまり退くと海に落ちる。しかし落ちそうなほど二人は驚いた。

「こりゃあまた……」

先に平静を取り戻しつつあったのはパペットの方だった。何しろ“二度目”の経験だからである。ケ빈はまだ固まったまま動かない。ボロの舌の上に、一人の少女が横倒れていた。緩やかな曲線を描く長い白金の髪がしっとり濡れて体に張り付いている。着ているものは簡素ながらも平民では着ないようなドレスで、ところどころに宝石が装飾されてある。

この海獣は人を襲ったり食べたりしない。となれば、海難事故で海に漂っていた彼女（にについていた宝石）を呑み込んだのか。

しかしまずはこの少女の安否だ。意識がないだけならば良いが、すでに

「オボロ」

ボロは舌を伸ばし、棧橋の上に少女を乗せた。たしかケ빈の時は

ものすごく乱雑に吐き出したような記憶が……いや、今はそんな悠長な回想に浸っている場合ではない。ケ빈は石化しているので、パペットは彼を放って、すぐに少女の安否を確かめなるべく彼女の首元に手の甲をあてがえた。

脈はある。

顔に張り付いた髪をどかせて耳にかけ。顔に傷はなかった。青白く体温も低下しているが、とても綺麗な顔立ちをしている。

その時、ケ빈が小さな声を上げて崩れ落ちた。何事かとパペットはケ빈を振り返る。

「ケ빈！？」

彼の顔がこの少女のように青ざめ、水を被ったように汗を浮かべていた。呼吸も乱れている。その困惑はあきらかにこの状況を驚いているのではなく、少女自身に対して動揺していることが窺えた。

「どうしたんじゃケ빈！」

「エ……」

パペットは確かに聞いた。

彼の口から、あの名前が出たことを。

“エレノア”

それは彼がどんな時も肌身離さず首からぶら下げている首飾りに彫

られた名前。

ケビンの様子からして、この少女と面識があるのか。

この少女が彼の“エレノア”なのか。

だとしたら、これは何と数奇な巡り逢わせだろうか。

「ケビン！しっかりせい！この子は生きておる！助けるんじゃ！」

もし彼女がエレノアだったら。

しかしふと疑問がよぎる。

どう見ても彼女は13、4の少女。ケビンを見つけた時、この少女はまだ生まれてもいない。

とにかく全ては彼女の目が覚めてからだ。今までケビンはあの首飾りのことについて何も言わなかった。おそらく墓場まで持ち込むつもりだろう。

しかしこの少女の出現が彼の何かを変えることになるのは間違いないさそうだ。

それがどうか彼にとって良い方向であることをパペットは祈らずにはいられなかった。

ところが神は私にそう簡単に謎を解かせてはくれないようだ。

目を覚ました彼女はこれまでの人生の記憶をすっかり失くしてしまっていた。

分かっていることは、こちらが見た目で判断したものだけだ。

話し方や物腰がやはり思ったとおり、出遭った頃のケビンを匂わせた。つまり、彼女も高貴な出であろうこと。もう着ることはできないが、立派なドレスは特上の生地で、値段などパペットには計り知れない。

彼女の瞳はケビンの首飾りの宝石と同じエメラルドの色をしていた。それが偶然なのか、やはり何か関係あるのか分からない。

ところが窺い知ろうにも、彼女よりやっかいなのは寧ろ^{むし}ケビンの方だった。

ケビンはまるで出遭った頃のようにぼんやりとどこか遠くを見つめ、何も言わず、部屋に閉じこもってしまった。少女の目が覚めたことを伝えに部屋の扉を叩いたが、返事は返ってこなかった。

二日寝込んでいた少女はようやく体を起こし、パペットに礼を言った。何と心洗われる柔らかな眼差しだろうか。村にいる同じ年頃の娘はもっと大雑把で太陽のように明るい笑顔ではしゃぎ回っているが、この娘は平民とはあきらかに別の世界の雰囲気醸し出している。聖母、とでも比喻すればよいだろうか。とうとうパペットは意を決してケビンを無理やりひっぱり下ろしてきた。

「娘さんや、紹介しよう、わしの息子のケビンじゃ。三十路のデカブツのくせしてちいとばかり照れ屋での。ほれ、ケビン、可愛らし

「いお嬢さんに照れとらんでさっさと挨拶せんか」

これでも話しやすいように余計な世話を焼いてやったというのに、ケ빈はまったく無反応で少女を見ようともしない。もちろんケ빈は照れ屋でも奥手でもない。あきらかにその態度は彼女を避けていた。

すると、少女の方がニコリと笑った。

「はじめまして、貴方が私をここまで運んでくださったとお聞きしました。ありがとうございます。あの、私、自己紹介をしたいのだけれど、自分が誰なのか思い出すことができてなくて……」

「……記憶がないのか？」

驚いたようにケ빈が少女に顔を向けた。急に目が合った少女の頬がほんのりと染まる。

「ごめんなさい、皆さんにご迷惑をかけてしまって」

「娘さん、そういう気遣いは無用じゃ。何しろこういう状況は慣れておるからの」

「え？」

ニヤニヤ目をケ빈に向けると、ケ빈は「何だよ」と少年じみたように口を曲げた。パペットがケ빈のことを掻い摘んで軽く一時間語ったが、少女はずっと静かに微笑んでパペットの話聞いていた。

「いやゝ、それでの、こやつときたら」

「もういいだろ！どれだけ喋り続けているんだ。聞かされる俺らの身にもなってくれ」

グイ、とケ빈は少女を自分の胸に引き寄せると、少女は真っ赤になり身を硬くした。パペットはしてやったりとニンマリと口を上げた。

「おーおーさすが色男は手が早いわい。こりゃワシはお邪魔かのお」

「えっ、あっ、ち、違う！大体俺は照れ屋とか言っただけだったか。いつから色男に設定が変わったんだ」

「どちらなのですか？」

可憐に微笑みながら、少女は首をかしげてケ빈を見上げた。今度はケ빈が頬を赤くして少女を体から離れた。

「とりあえず名前を決めなければならんのう。ワシはこついうのは苦手での。ケ빈、頼んだぞい」

「私のことはどうぞお好きなように呼んでください」

パペットは密かにケ빈が「エレノア」と名付けることを期待していた。

パペットの見た限り、この娘はあの首飾りの「エレノア」本人ではないようだった。さっきも考えたが、ケ빈と彼女の年齢からして本人では有り得ない。おそらく、本人と見紛う程この少女は「エレ

ノア」に似ているのだろう。

ケ빈はここで生活を始めるようになってから、全くと言っていいほど他へ目を移すことはなかった。

漁で獲った魚を村の卸売り場へ持って行ったり村へ買出しに行ったりすると、村の女性達はこぞって黄色い声を上げたり、話しかけたりする。男の目から見ても羨ましい容姿だ。

ところが当人はどこ吹く風で、言い寄る女性達にはほとんど目もくれない。愛想もない。まるで興味を示さないままこうして16年経った今でも独り身を通している。

それはやはり「エレノア」という女性が関係しているのだろうか。

こちらとしてはケビンには普通の幸せを掴んでもらいたい。それは息子なら尚更願うことだ。しかしそれを強制することはできない。いや、ケ빈はずっと誰かを想っている。想い続けて、しかしそれは報われない想いで。

恋心というものはよく分からない。年老いそうだった感情と疎遠になった今なら尚更。妻が生きていればその答えも教えてくれただろうに。

そしてこの少女の名前をケ빈は「エリイ」と名付けた。

7（後書き）

いつも読んで頂き本当にありがとうございます。

拝啓 親愛なる姉上

姉さん、元気ですか。私は元気です。皆も元気です。

でも本音を言うと私は元気ではありません。

姉さんが傍に居ない日の私は寂しさで心が碎けてしまうのです。

姉さんもきつと私と同じように辛い思いをされているのでしょうか。

そう思うと私は夜も眠れない。

貴女が今も冷たい場所で独りだと思うと、どうして私だけが穏やかに眠ることができましょう。

今姉さんに逢えるのならば、私は海の底でも雲の上でも必ず辿り着いてみせるのに。

姉さんさえ居てくれれば私はもう何もかもなくなってもいい。

最近はそんなことさえ考えてしまいます。

それは貴女との約束を破ってしまうことになることは分かっています。

それでも

逢いたい

逢いたい

姉さんの温もりが私の手から日に日に薄れてゆくのです。

助けて

私が壊れてしまう

貴女が居なくなつたあの日から私はもう

何もかもが死んで見える

いいや死んでいるのは私の方

逢いたい

姉さん

愛してる

ノックの音が聞こえてエリイは慌ててその紙を引き出しにしまった。

「どうぞ」

「エリイ、まだ起きていたのか？明かりがついていたから消し忘れて寝てしまったのかと見に来たのだが」

ケ빈はエリイの部屋に入ると、静かに扉を閉めた。一階ではすでにパペットが就寝している。

「ん、ごめんなさい。明かりが眩しかった？すぐに消すわね。私ももう休むわ」

「エリイ、無理をしていないか？」

「え、どうして？無理をしているように見える？」

「いや……。すまない、俺の勘違いのようだ」

「ケ빈ももう寝るの？」

「俺は少し散歩してくるよ。出かけようと思って廊下へ出たらエリイの部屋から明かりが漏れているのに気付いてね。だから覗いたんだ」

「そう……」

ケ빈はよく夜になると人知れず独り外へ散歩に出かける。9年前、エリイがここへ来る前からの習慣なのだとパペット爺さんから聞いた

た。

実は村へこっそり遊びに行ったり、逢瀬する人がいるのかとも思ったが、本当にただの散歩のようで、夜たまたま寝付けずボロと話をしに棧橋へ行くと、ケ빈はボロの背中の上で空を見上げていた。こちらの歩いてくる気配にも気付かず、ただずっと星を見つめていた。

だから今日もまた独りで何か想いに耽るのだろうか。

「ケ빈、ね、私も一緒にお散歩してもいい？」

「それは構わないが、眠らないと明日が堪えるぞ？村へ花を売りに行く日だろう？」

「あら、それならケ빈だって明日は漁に出る日でしょう？」

エリイは笑って椅子から立ち上がると、机の蠟燭を消した。一気に闇が広がる。

「しかたないな、じゃ、行くか」

「うん。きゃっ」

「おっと」

つんのめったエリイをケ빈が支えたおかげで、エリイは転倒を回避した。

「あ、ありがとう」

冷や冷やした心臓でエリイはケビンを見上げて礼を言った。暗闇に微かに浮かぶケビンのシルエットが一瞬誰かと重なった。

「エリイ？どうした」

「え、あ、ううん。なんでも……ないわ」

誰だったのだろう。分からない。

「行こうか」

「うん」

先に歩くケビンの服の裾をそつと掴んで、エリイは後に続いた。やけに心臓の音が大きかったがその理由が何なのか、それもやはり分からなかった。

砂浜へ出ると、岩と岩に挟まれたパペットの浜は棧橋を含めて一望できる。今日は棧橋に黒い山がない。ボエは留守のようだった。

「今日は背中であかあかできないわね」

「え？」

「ボエの背中」

「ああ。そっだな」

「そんな時はどこで空を見上げているの？」

砂浜を歩いていたケ빈はふと足を止めてエリイを振り返った。

「まいったな、誰かに見られてるなんて考えていなかったよ」

「あつ、ち、違うのっ」

エリイは慌てて両手を左右に振った。

「以前……ね、私も寝付けない時があつて。外に出たら偶然独りで空を見ている貴方を見かけたの。その……ごめんなさい」

「空、か」

ケ빈の手がふいにエリイの頬を掠めて、エリイは思わずドキリとした。ケ빈はエリイの髪を一房軽く手に取り、それにそつと口付けた。

「ケ빈、私、貴方にずっと聞きたかったことがあるの」

「なんだい」

「私を“エリイ”と名付けたのは何故？」

二人の間に静寂が流れた。互に見つめ合う。エリイの瞳にはケ빈が映るが、ケ빈の瞳はエリイを通して“他の誰か”が映っていた。それに気付いたエリイはほんの少しだけ寂しい気持ちになった。

もしも一瞬でもケビンがエリイをエリイとして見てくれたら、きつとエリイはケビンに恋をしていた。

しかしそんな淡い期待が叶うことは一度として訪れなかった。だからどんなに近づいても、どんなに見つめ合っても、エリイがケビンに恋を抱くことはなかった。ケビンは誰も受け入れない。それが分かってから恋をする想いが生まれることはなかった。

エリイの中に見える“エリイ”とはケビンにとってどんな存在なのだろう。

知ったからどうなるものでもどうするものでもないことは分かっている。でも知ること何かケビンにしてあげることができるかもしれない。恋はできなかったけれど、他の何かならきつとケビンは受け入れてくれる。それさえも拒むのなら、自分はもうケビンをただ見守ることしかできない。

「俺には心から愛する人がいたんだ」

聞いてよかったのか、今更ながら少し後悔した。それを口にすることはケビンにとってとても辛いことだったのではないか。

しかしエリイはまた一瞬頭の中で何かが走ってゆくを感じた。さつき暗闇の中でケビンが誰かと重なった時の感覚と同じものが。

「君を見た時、俺は驚きと共に、恐れを感じた。俺にまた絶望を味わせるために俺の元へ帰ってきたのかと」

「絶……望？」

ケ빈は手の中から砂を落とすようにエリイの髪を零すと、背を向けた。

「あの人は…俺を捨てて逃げた。あんなに……あんなに愛したのに……っ、いいや違う！あの人は奪われたんだ！あの男に！俺からあいつはあの人を奪い去った……！俺達は愛し合っていたんだ！愛して、愛して……！」

「ケ빈！」

エリイは慟哭するケ빈を落ち着かせようと背中から思い切り抱きしめた。

「離せ！俺に触れるな！俺に触れていいのはあの人だけだ！お前じゃない！姉上……！姉上え……！！！」

姉？

エリイは振りほどかれた衝動で砂浜に打ちつけられた。だが、柔らかい砂浜がエリイの衝撃を吸収してくれたのが幸いして痛みはほとんどなかった。

それよりも。

エリイは肩で息をして立ち尽くしているケ빈を見上げた。

姉

ケ빈が私を通して見ていたのは彼の姉だったのか？それは本当の

姉？義理の姉？仲良くしている年上のお姉さんのような存在の人？

ううんそんなことはどれだっていい。

彼女はケビンを愛してあげたの？

こんなに一途に自分だけを愛してくれる人の愛を拒む人なんているのだろうか。

ケビンはとても優しい。ちょっと飾り気がないところもあるけれど、皆から愛されてるし、村の女の子達に大人気だし。若い頃なら尚更、彼に目を奪われない人なんているのだろうか。

それとも、私に似た“その人”はケビンの想いと同じくらいに他に愛する人がいたのか。

私には分らない。そんな想いを持ったことも、持たれたこともないのだから。でも記憶がないのだから言い切ることはできない。もしあるのだとしたら、きっと誰かを想う側だと思っけれど。

“その人”は何故ケビンの想いに応えなかったの？

私なら

姉さん

今、頭の中で誰かが私を呼んだ。

姉さん？私のことをそう言ったの？私は誰かの姉だった？

分からない

何も思い出せない

「　　リィっ、エリィ！すまない！大丈夫かつ」

「ケビン……」

「ごめん、俺は時々自制できない時があるんだ。だからいつも一人でいるようにしていたんだ。くそっ、やはり傷つけてしまった。君を連れてくるべきじゃなかった……っ」

エリィは小さく微笑んでうっん、と首を振った。

「私、似てるのかな？……お姉さんに」

ケビンは目を見開いた。

「さっき、姉上って……言ってた」

「エリィ……」

ケビンは観念するようにため息をついた。

「軽蔑してくれて構わない。そう、俺は心から愛する姉がいた。実の姉だ」

「いた……。今は？」

「さあ。姉を奪っていったあいつと幸せに暮らしているのか、どこで何をしているのか。俺はすでにこの世の人間じゃないから世間のことは知らない」

「この世の人間じゃない……？　どういう……」

「俺は死んだんだ。あの時。姉上を奪われたあの日に崖の上からこの海へ飛び降りたんだよ」

「けど死ぬどころかボロのお目に止まってこの通りの死にぞこないさ、とケ빈は肩を竦めて自嘲的に笑った。」

「それなら私も貴方と同じだったのかもしれないわ」

「え？」

「エリイは寝転んだまま空を見上げた。無数の星は体を貫かんとばかりに輝いていて少し怖かった。」

「私も死に切れなかったのかも」

「おそらくそれは違うと思う」

「ケ빈はエリイの頬に手をあてて擦った。頬に付いていた砂粒が流れ落ちる。」

「エリイのこの瞳は死を望んでいない」

「貴方は今も望んでいるの？」

「そうだよ」

「私ではお姉さんの代わりになつてあげられない？」

「壊される覚悟があるかい？」

「え？」

頬に触れていたケ빈の手がエリイの首元まで滑り、止まった。そこにもう片方の手があてがえられる。そのまま力を込められてしまえば、エリイの命は容易に奪われる。

「俺は壊してしまったんだ。愛しても愛し足りなくて、乾くばかりで。俺があの人にどんなことをしていたのか君は想像できるかい？」

ゆっくりと二人の距離が近づいてゆく。首がしまつてゆく感覚も覚えたが、エリイはケ빈から目を離そうとも恐怖の相を浮かべようとしなかった。ケ빈はそのままエリイに唇を重ねた。

長い時間、どちらも動かなかった。唇はただ触れ合っているだけ。エリイは逃げようともせず、ケ빈も離れようとしなかった。

だが、先に体を震わせたのはケ빈の方だった。エリイはケ빈の頬を両手でそつと包んだ。

「泣かないで……」

離れた唇はまだ息のかかる距離で止まっている。ケ빈の目から涙が零れていた。その涙がエリイの頬に落ちてゆく。

「死ぬまで愛してるなんて嘘だ……っ、俺は死んでも姉上を愛している……っ。あの日から今もずっと……ずっと……っ」

「貴方は死んでない。生きてる。貴方の唇は温かった。信じられないなら何度でも、何だって受け止めてあげる」

「姉……上……」

ケビンの両手がエリイの首を離れ、頬を包むエリイの両手の上に重ねられた。それをそっと剥がし、砂の上に押し当てた。

月夜の下で、二つのシルエットが一つに重なる。口付けを交わす淫らな音は押し寄せては引いてゆく漣にかき消され、二人はいつそう深く絡み合った。

闇夜に溶けてしまいそうになるほど熱い頭の中で、エリイはふとあの手紙のことを思い出した。

ボロが最後に残した置き土産の中に埋もれるようにして紛れ込んでいた小瓶の中に折り畳まれて入っていた一枚の手紙と一輪の薄桃色の花。

あの手紙の内容も姉に焦がれて止まない愛の告白だった。あの差出人もまた、この人と同じように苦しんでいるのだろうか。

愛する人が居ない世界。

それは一体どれほど深い闇なのだろう。

あの手紙の人を救ってくれる人が現れてくれるように、そして、
目の前で救いを求めているこの人を癒すことができるように。

エリイは輝く星空の下でただひたすらに願うばかりだった。

私室のバルコニーですでに待機していたピッピはメンデルス国にしか生息しない伝令鳥で、世界最速を誇る。その大きさは大人が二人は乗れそうな程に巨大だが、ピッピは誰も乗せない。もともと乗鳥ではなく、あくまで野生に生きる鳥の中の一つだが、代々メンデルスにはピッピ調教師がいて伝令用に慣らすのだ。その顔は名前に似合わず大人も身震いするほど恐ろしい。

ピッピは誰にも懐かないが、それでも唯一懐いていた人間がいた。

メンデルス国の王女エレナ。彼女は今から9年前に海で遭難し、行方不明となっている。

だがメンデルスの民にはその時結婚する予定であった聖地シュベール帝国の女帝の息子に嫁いでいったことになっている。

そして、城内では“海で遭難”と伝えられた。真実を語るには、あまりにも悲劇で残酷すぎた。

そのエレナ王女と仲睦まじく常に傍らかたわにいた弟、メンデルス国の王子フェルダ　現在のメンデルス国王であるが、エレナに懐いていたピッピはエレナの傍にいたフェルダもセットだと思っ込んでいよう、ピッピ自身から擦り寄ることはないが、彼にも体に触れることを許していた。

フェルダはさっきまで認めていた手紙を小さく畳たたんで小瓶に詰め、中庭に咲いている薄桃色の花も一輪一緒に入れるとコルクで密閉し

た。これで割れない限り水で濡れることはない。フェルダは祈るように、小瓶に小さく口付けを落とした。

「もう時期的に最後ですね、その花も」

フェルダの側近のシエンがお茶の用意をしながら微笑んだ。手紙を書き終えたらいつもティータイムに入る。フェルダは儚く瞳を揺らし、小さく口元を上げた。

「ああ、9度目の春が過ぎたな……」

シエンはもう何度もフェルダのこの愁い^{うれ}を帯びた瞳を見てきた。自分も連られて想いを馳せる。

9度目　フェルダ様の最愛の方が去られて9年が過ぎた。

せめて。せめてただの海難であればどれだけこの方のお心に希望が残っただろう。

目の前で海獣の口に呑み込まれていったエレナ様を見てしまった我らにどんな希望が見出せるのだろう。

死体が上がらないからもしかしたらどこかに漂着したかもしれない。城内では当初そんな願いのこもった祈りを捧げる者達がほとんどだった。我らはひたすらに真実を心の奥に閉ざした。

シュベール帝国側は花嫁搜索のために内海を知り尽くしている者数百人を海に潜らせたというが、あちらが本気で捜したとは到底思えなかった。

何故ならエレナ様の夫となる筈だったシュベール帝国の女帝の息子
ウエルクボルグもまた、エレナ様の最期を目の前で見た一人なの
から。

それに、あの男はエレナ様を望んではいなかった。今はもうその事
故以来、関わりが無いとでも言うかのように、メンデルス国との交
信を絶っている。それどころか、シュベール帝国の内政は未だ密閉
空間の中にあり、他国との関わりを極力拒んでいた。あんな孤島の
ことはもはやどうでもいい。

フェルダ様はこの世にもういないエレナ様がまだ生きていると思っ
ておられる。

どこに。それは彼自身にも分かっていない。しかしフェルダ様の幻
想の中で、この窓から望む内海のどこかで、彼女は生きておられる
のだ。

エレナ様はただフェルダ様と離れた場所にいるだけ。

だから季節が移りゆく度にフェルダ様はエレナ様への文を認め、そ
れをピッピに持たせて内海へ飛ばす。
したた

ピッピは内海のどこかにその小瓶を落とし、帰ってくる。

そして何も掴んでいない足を見たフェルダ様は「無事に姉上に届け
てくれたか、ご苦労だった」と微笑まれるのだ。

「よし、ピッピ、この手紙を姉上の元へ届けてくれ。いつもすまな
いな。よろしく頼むよ」

ピッピに小瓶を掴ませたフェルダはピッピを抱きしめた。いつもエレナがやっていた行為だ。エレナがそうするとピッピは首を摺り寄せるが、フェルダが抱きしめてもピッピは石のように不動だった。それは嫌われていない証で、シエンがやったものなら即刻脳天を鋭い口ばしでぎつくりだろう。それはおそらくピッピに対しての恐怖心があるかないかの違いなのだとシエンは思う。獣は人間以上に敏感だ。一瞬でも恐れを抱いたら一生懐かない。シエンには無理だった。何故ならピッピの顔は好みじゃないからだ。

ピッピは「ぎゃーす」と怪鳥らしい鳴き声を出しながら空中で旋回すると、隠密部隊のように一瞬で消え去った。

「お前が鳥だったらきつとピッピだな」

部屋の中に戻ってきたフェルダは苦笑しながらテーブルについた。シエンは紅茶を注ぎながら顔を苦くする。

「やめてください。私、ハンサムなんですから」

「これは失礼」

ティーカップを指にかけ持ち上げると窓から見える内海を見つめた。

「姉さんは恥ずかしがりやだからなかなか返事をくれないんだ」

シエンは瞳を和らげ頷いた。

「次に文を送られる時は、夏の黄花ですね、フェルダ王」

陽気な日差しが降り注ぐ午後、エレナは私室で机に向かい、あの手紙にまた目を通していた。

小瓶に入れられて、ボロが置き土産を残してくれた光り物の中に紛れ込んでいたこの一通の手紙を拾ってもう一年以上経つ。上質素材の紙だと分かる。私達が普段使っている紙はペン先が引つかかるような少し荒めの紙で、一年も経てば端から黄ばんでくる。これが庶民の一般的な紙だ。だがこの紙は未だ雪のように真っ白で、文字もまったく薄れていない。

「とても綺麗な字……」

文面はとても清筆な文字で綴られていた。最後のほうになると感情が抑えられなくなったのだろうか、やや勢いがついた激しい書き方になっていたが、とても教養の高い人が書いただろうことは文字を見れば瞭然^{さうぜん}だった。差出人はどんな家柄の人なのだろう。

しかしたとえどんなに高貴な人としても、叶えられない想いというのは確かに存在するのだと、エレナは少し切ない気持ちになった。

誰かを愛する想いがもしお金を出して買えるのなら、この差出人はきっとこんなに願いのこもった手紙を書いて海に流す筈がない。

それにこの差出人が焦がれる“姉”はもうこの世にはいないのかも知れない。海で亡くなり、届くはずの無い彼^かの人を偲^{しの}んで手紙を流した。

多分それが真実なのだろう。でなければ、海に流す理由が見つからない。でもそうでなければいいのと思う。たとえ望みのない思慕だとしても、愛する人が生きていてくれれば、世界の見え方はまったく違うはずだ。少なくともエレナはそう思っている。

ただケビンのように、愛する人が生きていても絶望しか感じない人間がいるのもまた事実だ。愛する人が自分ではない他の誰かと幸せになっていることはたしかに辛いことだろう。エレナは好きな人が幸せでいてくれればそれでもいいと思うが、多分それはきっと、本気で誰かを愛したことがないからこうも簡単に結論を出せるのだと思う。

愛する人

「私は誰かを愛していたのかな……」

私はどんな環境で育ち、どんな人間で、どんな生き方をしていたのだろう。

家族はいたのだろうか。恋人…はいそうにないけれど、好きな人はいたのだろうか。

私は私がいなくなつて、誰かが悲しんでくれるような人間だったのだろうか。

エレナは机の引き出しから一枚の便箋を取り出して机に広げ、ペンを手に取った。

この差出人に返事を書いてみたくなつた。

勿論自分はこの人が想いを馳せる姉ではない。差出人とて見ず知らずの他人に返事をもらわれたとしても嬉しくも何ともないだろう。逆に姉への冒涇だと怒ってしまうかもしれない。

でもこの返信が差出人の元へ届くことはない。絶対に。

住所も名前も分からない。性別は多分男性だと思う。歳はどれくらいだろう。文字の精錬さから大人であろうことは予測できる。

しかしどんなに想像を掻き立てても、これはもはや夢物語に過ぎない。

今から書く返信は、この手紙のように小瓶に入れて海へ流すのだから。ボエにお願いして海に落としてきてもらう。ボエの好物の光り物だからそのまま流さずにとって帰ってきてしまいかもしれないが、それならそれで別によい。

そう、これはちょっとした好奇心と、そして微かな期待。淡い想い。

この手紙が差出人の元へ届くような奇跡を夢見る一人の普通の女なのだ。

手紙を小瓶に入れて海へ流された貴方へ

はじめまして、貴方のお手紙を偶然見つけた者です。

お手紙、拝読させていただきました。勝手に読んでしまつてごめんなさい。

お姉さんはこの海のどこかにいらっしゃるんですね。

貴方の、お姉さんを慕う気持ち、とても素敵だと思いました。

その想いを大切に、どうか元気を出してください。

もしお会いできるのなら、苦しんでいる貴方の胸に秘めた想いを私に吐き出してほしい。

お力にはなれなくとも、少しは抱え込んだお心が軽くなるかもしれないのに……。

貴方はどんな方ですか？

私はいつも海を眺めて過ごしています。貴方もそうですか？

それでは、さようなら

貴方のこれからにどうか幸あらんことを

追伸

お手紙に添えられていたセティアラのお花、押し花にして栞しおりとして使っています。

春になると満開に咲いてとても綺麗で、私の大好きなお花です。

海の方から船の低い汽笛のような音が聞こえる。これはボエの鳴き声だ。ボエはボロの子供で、母親がいなくなってから何故かずっとこのパペットの浜に居ついている。また最近留守をしていたが、今帰ってきたようだ。

エレナは満足そうに頷くと、今書き終えた手紙を入れた小瓶を手にして部屋を出た。

10（後書き）

アクセス、お気に入り登録、そしていつも読んで頂きありがとうございます。

何度も推敲しておりますがやはり誤字が見つかり、全くお恥ずかしい限りです。

フェルダの側近シェンは、私室のテラスで独り空を仰いでいる我が君主を静かに見守っていた。

メンデルス国は今や五大大国の中でも最強の軍事力を誇っているといても過言ではない。

フェルダ王の父君で前国王であられた金龍王の異名を持つクラウド様が現役でご活躍されていた頃もたしかにメンデルス国は抜きん出た強さを誇っていた。

だが最強を維持することの難しさはこれまでの歴史が何よりの証拠として示している。

強き者が支配した国は次に引き継がれた世代で急激に衰える。二世が親の威光に圧されてしまうからだ。

クラウド様は間違いなく世界に名を轟かせる最たる強きお方だった。

フェルダ王がその威光を維持できるかどうかがメンデルス国の将来安泰の鍵であったが、今や誰が不安だと危惧するだろうか。

民からの厚き人望、磨きのかかった技体。精錬された優美さ。

これはまさに前王に勝るとも劣らない威光ではないか。

そしてもし前王に1つ勝るところがあるとすればそれは。

愛する者を失ってもその絶望を片鱗も見せない気丈な精神力。それは決して悲愴な面を指し示しているのではない。

世界を壊してしまう狂気を心の中だけに抑える強さだ。

クラウド様にはおそらくそれはできまい。最愛の奥方様であるエレナ様を失ったならば、間違いなくこの世界は終わりを告げるだろう。

それだけ現役であられた頃のクラウド様の力は絶大だった。

しかし、狂気を抑えられる精神力を備えたフェルダ王を支えているのは彼自身ではなく、彼の中にいる最愛のお方だ。

エレナ王女。

彼女がこの世から去って、フェルダ王はまるで滅亡し荒廃した大地を見るような目で世界を見ておられる。良しも悪しも私にしか見破ることができないのは国にとっては幸いだ。

彼の中ではすでに世界は死んでいるのだ。

エレナ様がいてこそその輝く世界。

メンデルス国民は今、さぞ幸多き世に悦びを感じていることだろう。

その影で孤高の王が脆い足場に立っていると誰も知らない。知ろうともしない。

時折私はその齒痒さで世界を憎悪してしまうのです。

何もできない自分自身にさえも。

「ピッピが戻ってきたようですね」

フェルダの見上げる空にシェンも顔を向けると、夕焼け色に同化した伝令鳥のピッピが広大な空を惜しげもなく雄大に旋回している姿があった。

「ひと月前に姉上へ出した手紙を渡して、帰ってきたのだらう」

シェンは顔を空に向けたまま、横目でフェルダを覗き見た。満足そうに口元を上げて眺めている。シェンはそのことに何も触れず、黙って空に目を戻した。

フェルダが指笛を鳴らすと、ピッピが突風を連れてテラスへ舞い降りてきた。シェンはピッピと距離を置いた位置に移動した。ピッピは人間とは馴れ合わない。例外なのは調教師とフェルダ王だけだ。

「ん？」

フェルダは眉間にシワを寄せた。その変調に気付いたシェンも首を傾げる。

「いかなさいました、王」

「いや…、ピッピが……」

シエンはフェルダの視線を辿って、ピッピの足を見た。

王はピッピに小瓶を掴ませて飛ばす。そしていつものように内海のどこかに小瓶を落として戻ってくるのだが、一ヶ月前に持たせた最新の手紙の入った小瓶が今その足にあった。

「ピッピ、どうした、姉上に渡せなかったのか？何故持ち帰った」

フェルダの怪訝を他所^{よそ}に、ピッピは誇り高く胸を張って首を高くしたまま、正面を向いて華麗に聞き流している。ピッピが人間の言葉に忠実に反応を返すのは今は亡きエレナのみだ。

「困ったな。姉上は私からの手紙をいつも楽しみにしてくれている筈だ。届けてくれないと姉上が心配する」

その時、ピッピが巨体にしまわれていた翼を羽ばたかせた。突如翼で巻き起こる強風に二人は腕で目を覆った。ピッピは見るからに重い体を宙へ浮かせると、フェルダの目の高さまで上がった足から小瓶を放した。落ちる前にフェルダが掴み取る。ピッピは再び着地すると、首を丸めて目を閉じてしまった。

「今までは手紙を持ち帰るようなことはなかったが」

フェルダは言葉を切った。

「王？」

反応がない。小瓶を見つめているようだが、その心内は不明だ。

「これは……私の手紙ではない」

「え？」

シエンはフェルダの傍へ歩み寄った。ピッピは目を閉じると深い眠りにつくので近寄っても害はない。

上から覗き込むと、小瓶の中にはやや黄ばんだ紙が入っていた。見た限りではここでは使わないような質素な紙だ。

誰かが海から漂着したこの小瓶を見つけて、返事でも書いたのか、それともまったく関係のない、フェルダ王と同じように手紙を海へ流したものをピッピが拾ってきたのか。そのどちらの可能性もシエンは言葉に出さなかった。かといって、「エレナ様からのお返事ですよ！」とは口が裂けても言える筈がない。

しかしこれは一体どう捉えるべきなのか。

「とにかく読んで見られては？」

「あ、ああ、そうだな」

正直、シエンは手紙よりもフェルダの精神が不安だった。声があきらかに動揺している。王は一体何を期待しているのか、それとも不安になっているのか。どうかこの手紙が何の変哲も無い内容であることを何故か祈らずにはいられなかった。

フェルダが手紙に目を通している間の静寂が何と長かったことか。

陽の沈んだ空はあっという間に夜の空へ一変した。

しかし室内の明かりを灯したのはずっと後だった。

フェルダの手から手紙が滑り落ちた。風に攫われる前にシエンがそれを拾う。

「拝見しても？」

返事はなかった。あってもおそらく読んだが。フェルダの様子から読まないわけにはいかない。

内容は、フェルダが書いた手紙に対する返事だった。とても丁寧な字で、品の良さが窺える。フェルダの心痛を察して親身な返信が綴られていた。

いや、そんなことはどうだっていい。

この手紙にはもっと重大な問題があった。

海を漂ってどこかへ漂着した小瓶を心優しい誰かが拾って返事を書き、それを再び海へ流したものをピッピが拾ってきた。

ありえない。

返事がフェルダの元へ届くことがありえないのではない。

違う。

ピッピが海に浮いている小瓶を拾ってくることもありえないのだ。ピッピにはそんな習性はない。では誰かが持たせたのか。それこそ

ありえない。ピッピの１メートル範囲内の領域に入ることのできる人間は。

「姉…さんが……………」

フェルダが闇の中で呟いたその名に、シェンは青ざめて口を手で覆った。吐き気がする。まさか。いいやそんな。

そんな星を掴むような奇跡が。

「姉さんが……生きて

」

セティアラ。

それはメンデルス王国の限られた場所にだけ、まるで宝物を人目から隠すようにして咲いている春に咲く薄桃色の花である。

さらに限定した言い方をすれば、その花はメンデルス王城内の中庭でしか見ることが出来ない。

もつと厳密に正確に言えば、そう

「セティアラの花は、私が庭師に作らせた改良種だ」

勿論、愛する姉のエレナのために、とは口にせずともシェンには分かっていた。シェン自身もそのことは知っている。フェルダが幼い頃、何やらごそごそ行動をとっていたことは、どれもこれもこっそり見守っていたので全て把握している。

フェルダは今もう眼前の海が見えない闇夜の景色に体を向けたまま、後ろに立っているシェンに言った。

「あれは市場にも出していない。まさに姉上のためだけに私が作らせたもの」

「つまり、セティアラの花の存在を知るのはエレナ様ただ御一人」

「ああ」

シエンは手紙の最後に追記された文面に目を凝らした。すでに暗くなっていたので一旦室内へ戻り、照明をつける。背中を照らされた王は今、何を考えておられるだろう。

「城内の者という可能性は」

「ない」

フェルダは即答した。

「筆跡は姉上のものだ」

王には姉君のことで知らぬことなどあるのだろうか。あるとすればそれは、姉君自身のお心。

「しかし……フェルダ王、もしもエレナ様がどこかで生きてあ、いえ……」

「よい」

シエンは一礼し奥歯を噛み締めた。フェルダにとってはエレナは死んでなどいない。9年前からただ少し離れた場所で暮らしているというだけなのだ。それが壊れた妄想だとしても。

「は、では……。この手紙の主がエレナ様として、今まで何の音沙汰もなかったというのは」

はっとしてフェルダの背中を見つめる。物言わぬ背中からこれほどまでに心痛な想いを感じ取るうとは、本人の心中やいかに辛いものであるうか。

「すまない、シェンよ、しばし独りにしてくれ」

「かしこまりました」

シェンは手紙を机の上に置き、風に飛ばされないようライオンの形をした金の重石を乗せると、静かに一礼して退室した。

波をかぶった砂の城のように崩れ落ちたフェルダの気配にピッピの閉じた瞼がピクリと動いたが、それが開くことはなかった。

テラスの床についた両腕の間にぽたぽたと涙の粒が零れ落ち、染み入るように広がってゆく。

「姉……さん……っ」

床を搔くように指を引き摺ると、薄っすらと赤の跡が滲んだ。その間も絶え間なく床を涙が濡らしてゆく。

「9年……9年も俺は何をやっていたんだ……！！姉さんは生きていたというのに、俺は、俺はああ……っ！！」

嗚咽か叫びか嘆きか、そのどれもを含んだ声が黒い空に響き渡った。

「何故俺は捜しに行かなかった！！何故俺は望みを捨てた！！王になることで俺は姉さんの願いを叶えて満足したのか！違う！」

逃げたのだ

姉の死を受け入れる現実から。

血の滲んだ拳で地を叩く。鈍い音は重厚な床に吸収された。

「俺はなんと愚かな男だ……！！姉さんっ、姉さんっ姉……さん……
！う……うあああああ……！！！」

「泣かないで」

崩れた体がビクリと震える。垂れた頭のままフェルダは目を見開いた。顔を上げる。

「兄上、こんばんは」

空に小さな天使が浮いていた。天使の微笑みを浮かべて。フェルダは思わず魅入る。

天使の正体は、今年7歳になるフェルダの弟、ジハイルだった。

「ジハイル……お前……」

ジハイルはフェルダの驚きを待っていました！と言わんばかりににんまりと口端を上げて、顔中で悦びを表した。

「兄上、シーザを使ってください！」

「シーザ……？」

「はい！こいつです！」

ジハイルは抱きつくように乗っている白い雲のような鳥の首を小さな手でもふもふと撫でた。フェルダが魅入ったのは、ジハイルと、そして弟が乗っていた鳥にだった。この鳥は伝令鳥ピッピの幼鳥で、子供の時は真つ白の姿で、羽毛も子供の髪の毛のように柔らかい。まさに雲のような姿だ。しかしそのふんわりした容姿には想像できないほど、やはり顔は身の毛もよだつ恐ろしさで、飛行速度も成長したピッピに引けをとらないほど速い。

ジハイルはその幼鳥シーザに乗って城の最も高い位置にあるフェルダの私室へ空から舞い降りてきたのだ。まるで雪のようにふんわりと。

ジハイルはフェルダへ向かってぴょんと弧を描くようにシーザの背から跳ねた。フェルダは両膝をついたまま小さな弟をすっぽりと胸の中へ抱きとめる。兄の温もりに満足した弟の顔がフェルダを見上げた。

「兄上。えへへ」

「ジハイル…お前…」

混乱していた最中に降りかかった可愛らしさと驚きのこもった災難に、さすがのフェルダもいささか困惑するしかなかった。

ジハイルは自らの着衣のポケットからごそごそとハンカチを取り出すと、フェルダの頬をそれでぺたぺたと拭った。

「兄上の綺麗な涙は僕がいただきました。えっへへ」

もしここにシェンがいれば「もうこのハンカチ一生洗わねえ」という黒い笑みを浮かべたジハイルの顔を見逃さなかっただろう。生憎フェルダはまったく気付いていない。フェルダが興味を持つのは言うまでもなくエレナだけだ。

視界の隅で眠っていたピッピの上にシーザがぼふんと乗りかかった。しかしピッピは気にしていないのか、それとも存在すら認識しようとしなのか、自分の背中の上の存在を華麗に無視して寝ている。そのうちシーザも首を丸めて目を閉じた。

「兄上、姉様を迎えに行ってください」

フェルダは困惑の表情を浮かべたまま、ジハイルの真っ直ぐに向けられた円^{つぶ}らな瞳を何故か逸らせず、見つめ返した。何を言っているのか言葉が出てこない。

「僕は兄上が大好きです。兄上が幸せなのが僕の幸せです。でも兄上は僕が生まれた時からずっと幸せじゃなかった。父も母も皆も世界中のやつらみんなみんな兄上のことを分かってない！」

「ジハイル」

「僕は兄上の悲しい顔しか知らない！そんなの……そんなのは……いや……だっ」

「ジハイル……、もういい……」

柔らかな頬を真っ赤に染めて涙をぼろぼろと零し始めたジハイルを、フェルダは優しく胸に抱いて頭を撫でた。

「シェン、いるのだろう」

「あ、はい。すみません」

間髪入れず私室の扉が開いて側近が入ってきた。フェルダの胸の中から小さな舌打ちが聞こえたが、フェルダには聞こえていない。

フェルダはジハイルを腕に乗せて抱き上げ立ち上がると、室内に戻り、歩いてきたシェンと向かい合った。絶対に離すものかと言わんばかりに小さな手をフェルダの袖に縫い付けて、顔を埋めているジハイルにため息をつくシェン。

「お夕飯なのにジハイル様がとんずらしていないと、城の者が血眼で捜しておりますよ」

「だ、そうだぞ」

フェルダは苦笑して小さな弟の顔を覗きこんだ。兄に見つめられてジハイルは真つ赤な頬を膨らませて俯いた。その様子に、フェルダは優しく口元を上げた。

「私も腹が空いたな。ジハイル、同席してくれるか」

パツと小さな頭が上を向く。

「シーザの話を聞かせてくれると私は嬉しいよ」

ジハイルの顔が輝きをまして満面の笑顔に変わってゆく。

「はい！兄上！！あのですね！あのですね！！」

フェルダは目を和らげて弟に頷いた。そしてシェンにちらりと視線を向け、暗黙の会話を交わす。シェンは肩を上げて呆れたようにため息をつくと、先に部屋を出たフェルダとジハイルを見つめて静かに微笑んだ。

9年の歳月を経て、変動の時間が訪れる。そう確信して。

12（後書き）

アクセス、お気に入り登録、そしていつも読んでくださっている方々、本当にありがとうございます。

メンデルス国の第二王子ジハイルは、さっきから続いている下僕のシェンの小言に耳を塞いでいた。

午前の学習はちゃんと終えた。食事も嫌いな食べ物には嚙まずに飲み込んで、出されたものは残さず食べてやった。

午後は剣の鍛錬に乗馬、ダンスの練習。全てそれぞれの師に誉められる出来だ。なのにどこに小言を挟む余地があるというのか。むしろその粗探しに敬意を表したい。するわけないだろう。

というわけで、それで僕の忙しい一日は終わり、夕食となる。御歳6歳。正直僕は父を超えていると自負している。ああ今はまだ“6歳の頃の父”と比べてだが。

そんな完璧な僕が憧れて止まない人が、18歳上の兄、フェルダ兄様だ。

兄上は僕が生まれたときにはすでに祖国メンデルス国の王だった。

兄上はすごい。

強くて、優しく、国民から好かれていて、かっこよくて、声もきゅんとくるしい匂いだし体温だって安心する心地よさだし風呂と一緒に入った時に見た兄上の

「ジハイル王子、お心内が言葉に出ておいです」

ジハイルは横槍を入れてきた下僕を白けたような目で睨んだ。人がせつかく悦に浸っていたのにそれをぶち壊すような空気の読めない男だ。この男はガキの頃から父に仕え、今は僕の兄上の超側近という厚かましい位に居座っている。そして頼んでもいないのに、この僕の目付け役までしているからしかたなく下僕として側においてやっている。

忌々しいことに、この男は若作りをしているくせに、存外食えぬ奴だ。まあ、兄上を補佐するならばそうでなければ僕がとづくに国外追放しているが。

そのシエンの目を掻い潜り、兄上観察を毎日遂行している僕はやはり天才だと思うのだよ。

そして今日も僕は、先日戦から凱旋した兄上の姿を少しでも目に焼き付けたくて、柱の影からこっそり兄の勇姿を窺っている最中なのである。

何しろ兄上はお忙しい人なのだ。日々王としての公務をこなし、戦があれば指揮を執り、大きな戦になれば兄上自らが戦前に立たれ、必ず勝利を収め帰還される。

そんな忙しい兄上に構ってもらう暇などめったにない。親族が会いたい時に会えないなんておかしいではないか。僕は以前、その愚痴をシエンにもらしたことがある。シエンは笑って「あれは王が自ら望んでされているのですよ」と言った。僕には何がおかしいのかさっぱり分からなかったから不快だった。

しかし僕はただ待っているだけの男ではない。

兄上のわずかな自由時間、つまり移動時間や食事時等のことだ、それを見計らって突進だ。いうまでもないが、僕は絶対兄上の足を引っ張るような行動は起こしたくない。どこかの下僕と違って、僕は空気が読める。したがって、兄上の負担にならないようにちゃんと都度加減調整をして兄上に突進するのだ。

兄上は僕が傍に行くといつも笑ってくれる。いつも大きな手で頭を撫でてくれる。いつでも優しく僕を抱き締めてくれた。

だけど決して自ら僕に会いに来てはくれなかった。まるで鬼ごっこをしているのに追いかけてくれない鬼のように、それだけは少し寂しいと思っている。

多忙だからという意味だからではない。

兄上は、誰に対しても誰かに興味も執着も抱かない人だった。笑っていても、優しくされても、僕が行動を起こさなければ、何も起かない。国民が讃えて兄上がそれに笑って手を振って応えても、兄から国民に好かれようと努力したり考えたりしない。

兄上はまるで生かされているような気がした。

しかしそれに気付いた時、僕の兄上に対する崇拜心はさらに過熱し、今では僕の中の神となっている。

兄上のことをもっと知りたくなった。

どうしたら兄上は僕を見てくれるのか、いや、見てくれるように仕向けるにはどう策を講じるべきか考えるようになった。

兄上が何故全ての存在に興味を持たないのかを探すのではなく、どうすれば興味を持ってくれるのか。

兄上が城にいる時は必ず一日の内数時間、執務とは別に独りで部屋にこもっている理由。

兄上の剣の強さ、いい匂い、毎日着ている服、シェンとひっそり交わす会話は可能な限り聞き耳を立て、一日の行動、眠った顔、たまに潜り込んだり（ばれているけれど）

とにかく兄上の全てを知りたかった。

ただ1つ、どうしても探れないことがあった。

それが姉上の存在だったのだ。

僕に兄上の他に姉上がいたことを知ったのは、僕が5歳の時だった。つまり今から一年前だ。

どうやって知ったのか。それはこのうっかり屋のシェンが口を滑らせたからだ。元隠密部隊長だかなんだかが聞いて呆れる。

僕は中庭の木陰でくつろぐことを大変気に入っていた。言うておくが、僕にも兄を付け回さない時間というものは存在するのだ。まあそれもきつかけは中庭にいれば兄上を見かける機会が多かったことと、この庭が兄上が好きだからという城内情報に基づくものだったのだが。

あの庭に行くと、僕の周りにいろんな生き物が集まった。

ある日、木陰で動物達と一緒に昼寝をしていた時だった。

「エレナ様を見ているようだ……」

眠りについているとはいえ、僕の耳が聞き慣れない言葉を流す筈が無い。僕はすぐに目を開けて言った。エレナとは誰だと。

その時見せたシェンのやってしまった顔は今でも忘れない。ま、いつか忘れようとは思っている。

そして観念したようにシェンはエレナという女性が僕の姉で兄上の1つ上の姉でもあったことと、今はもうこの世にはいないことを知った。

そんな初耳事件を知ってしまった以上、僕は姉上についての知識を頭に叩き込まないわけにはいかなかった。僕は父に問い、母に聞き、姉上の部屋を鍵を盗み出してこじ開け調べつくし、肖像も見て彼女のことを知り尽くせるところまで知った。

シェンは姉のことは言うつもりはなかったと言った。だが親族である以上知ってはならない権利などない。シェン自身も姉の昔話を聞かせてくれた。

ただ1つ、絶対に兄上にだけは姉上の話も名前も出さないことを僕にきつく言った。今までふにやふにやしていた下僕が、この時に見せた表情だけは、僕は頷く他なかった。

だがやはりシェンは詰めが甘い。

そんなに厳守したい秘密を真顔で言われれば、当然理由を知りたくなるに決まっている。

兄上が姉上のことで何を秘密にしなければならないのか、兄が今も独り身でいる理由、そして兄自身が弟である僕に姉の存在を語らなかった理由。

それは兄上がいつも悲しい瞳をしていることと関係があるのか。

兄上が幸せじゃないことと関係があるのか。

僕は兄上が幸せになってくれるのならなんだってする。

それで兄上がその悲しい瞳を晴らしてくれるのなら、たとえ嫌われてしまっても僕は。

やがて四六時中兄のことばかり考えるようになった。

「おいシェン。話がある。夜、中庭で待っている」

「なんですか、告白ならお断りしますよ」

「あいにくお前は僕の好みじゃない」

「気が合いますね。私もです」

そうして夜が訪れ、僕は中庭で下僕を待った。

「遅いな。いつまで待たせる気だ」

「ほんと、うつかり寝ていましたよ、立ったままで、私」

びつくりした。闇に紛れるようにそこにシェンが立っていた。これが隠密か。僕がいつか部下を従えるようになったら、隠密部隊を持ちたいものだ。今は結成されていないらしい。それがほんとか嘘かは今はどうでもいい。

「単刀直入に聞く。兄上の前で姉上の話題が禁句なのは何故だ」

「これはまたお父上にそっくりな……」

「答える。これは命令だ」

「うわ、ジュニアがここにいらっしやる……あ、その名の通りか」

「シェン！」

途端、僕の体は浮き上がり、大木に背中を張りつけられた。あまりの速さに僕は不覚にも目を瞑っていた。それをゆつくりと開いた時、僕はシェンの腿ももの上に跨またぐように乗せられ、目の前に見たことのない冷たい表情をしたシェンが鋭い眼光で僕を射抜いていた。

「私は子供でも王子でも容赦はしませんよ。我が王にこれ以上深入りなさるおつもりなら、私は貴方を殺めることも厭いません」

これを恐怖と言うのなら、間違いなくこの時が生まれて初めて味わった恐怖というものだった。目を逸らせず、身動きもできず、逃げ道もない。僕はこの下僕を怒らせてしまった。

それでも。

「殺すなら殺せ」

鋭い眼光が一瞬見開かれた。

「だが条件がある。僕は兄上を幸せにしたい。それを成就させるまでは待つてほしい」

「ジハイル王子……」

不覚だ。こんな、こんな下僕の前で僕は

「頼……む……！……ば、僕は兄上を……っ救……ったい……！！」

涙を見せてしまうなんて。

ふわりと僕の頭にシエンは手を置いた。それはいつも兄上がやってくれる撫で撫でと同じで。同じ優しさで。

もうシエンの目はいつものヘタレた目だった。

「誰がヘタレですか」

「お前……っひつく……以外に誰がいる……っ」

「はいはい。今だけは聞き流して差し上げます」

シェンはいつの間に取り出したのだろうハンカチで、滝のように流れ出ていた僕の涙を拭った。いい匂いがしたけれど、それは言わなかった。

「それでは、温かい紅茶でも飲みながら、お話ししようかね」

そして僕は9年前の出来事を知った。

兄上が姉上を愛していたことを知った。今も変わらぬ愛を誓っていることを知った。

兄上は姉上の願いを叶えるために王になったことを知った。

僕は今、伝令鳥の幼鳥（名前をシーザと名づけた）に乗って空に浮かんでいる。

こいつを見つけたのは遠乗りに出かけた時に休んだ花畑だった。ちなみにその時兄上は外交で城を空けていたから、僕が馬を乗りこなせていることは知られてはいない。知らればもう一緒に乗ってくれないかもしれないから内緒事項の一つなのだ。

伝令鳥ピッピのことは学習していたから、その恐ろしさや人に慣れないことは知っていたが、僕は不思議と怖いという感情が生まれなかった。

丸まって花畑に埋もれるように眠っている姿にこちらでも眠気を誘われて、そのふかふかした体へ背中を預けて寝たが、食べられることもなく、背中に乗っても振り落とされなかった。しかも僕を乗せて広い空を浮遊してくれた。

こいつは僕を助けてくれるかもしれない。兄上尾行手段の範囲を格段に広げるための！

兄上は姉上を愛してる。

それはいけないことなのか？恋とか愛とか、僕は天才だけどその方面はまだ経験がないから理解できない。

姉上を愛する兄上のことは悔しいかな、僕は何も知らない。しかしこいつがいれば、僕は城から離れた兄さえも見ていることができる。テラスで独りどこかを一心に眺めている兄上を空から見ることができる。今までは下からその姿を見ることができなかった。

でもあの方角の先には海がある。姉上の眠る海。兄上はいつも海を見ていたんだ。

そして僕はこの夜、ついに行動を起こした。

夕食の時間になっても王が食事をとりに来ないと給仕係が小声で不安そうに喋っているのを僕の地獄耳が捉えた。公務が長びいているのか、体調が優れないのか、何かあったのではないか。僕はすでにっていたテーブル席から一目散に外へ出た。

城の者に手当たり次第兄の居場所を聞くと、兄上はいつもの“御祈祷”のため私室にこもられているらしい。今までは何故ずっと部屋にいたのか解明できなかったが、シェンとの男同士の話をした時、その謎も解けた。

僕は兄上の行動を何も怪訝になど思わない。兄上は愛する姉上に祈りを捧げているのだ。だからこの時間のことを僕は“御祈祷”の時間と呼ぶことにしている。

しかし悔しいことに、僕はその部屋へ入ることを許されていない。シェンのやつは無粋に入ってゆくのに、弟の僕が踏み入ることを許さないなんて。僕は大丈夫だよ。兄上の味方だよ。シェンなんかよけずとずっと兄上が大好きなんだから。

だから入れてと下僕めに言ったけど、頑固な男め、決して首を縦に振ってくれない。

「シーザー！」

最近ようやくマスターした指笛を鳴らすと、どこからともなく巨大な粉雪と思わせる物体がふわふわと舞い降りてきた。伝令鳥ピッピの幼鳥だ。人に慣れることなく、調教もされていない野生のピッピと僕は友達になっていた。

こいつに乗ってあの部屋へ行こう。気付かれないように後ろから回り込んで。

すでに夕暮れは終わり、空は星が輝き始めていた。いいぞ。ますます近づけることができる。

シーザに乗って飛び上がった。話し声が聞こえた。大好きな兄上と……ちつ、やはり下僕の声だ。またずかずかと御祈祷の最中に入り込んだのだな。耳を澄ます。どんな小さな声も兄上の声なら聞き逃さない。

ジハイルの動きが止まった。

「え？」

今言ったことは本当のことなのか？

姉上が……エレナ姉様が生きているだって？

それが真実なら

思考停止している間、兄上を見逃していた。突然、闇を切り裂いて悲痛な叫び声が夜空へ駆け上り、驚いた僕は体勢を崩し、思わずシーザから滑り落ちるところだった。冷や汗が流れる。

でもすぐに分かった。あれが誰の声なのか。胸が締め付けられるように苦しくなった。

でも苦しんでるのは僕じゃない。眼下で兄上が崩れ落ちていた。

僕の敬愛する兄上が泣いている。

僕が生まれるずっと前からたった独りで泣いて。

やっぱり僕だ。兄上を救えるのは僕だけだ。

大丈夫、泣かないで兄上。今行くよ。

「シーザ、兄上を助けてくれないか。頼むよ。その後なら代償に僕を食っていい。あ、シェンに切り刻まれるかもしれないから食べやすいだろう。ただし味は保証しない」

だから頼む、と願いをこめてシーザの首に額を当てると、シーザは僕をふわふわと兄上の元まで連れて行ってくれたんだ。

12.5 (後書き)

アクセス、お気に入り登録、そしていつも読んでいただいてる方々、
本当にありがとうございます！

13（前書き）

この物語はフィクションです。
設定、世界観は現実のものとは違う表現があります。

エレナ王女搜索対策本部会議が設置され、この私シエンは今円卓に着いて、開始をいささか疑問を持ちながら待っていた。

「それでは、只今より、兄上の、兄上による、兄上のための姉上搜索会議を始める！」

そう堰切^{せき}って開始を告げた可愛らしい指揮官に、私は気付かれないほどのため息を吐いた。隣に座る我が主も、何故このような状況に？と目を点にしていたが黙って座っておられる。

何しろここは城の軍事会議室などではなく、フェルダ王の私室で、円卓と言ってもただの4人掛けのティーテーブルでこじんまりと開催されたものなのだから。

果たしてこの会議を本気とするか戯^{たわむ}れととるか、大人の対応が試されるところだ。

「質問をよろしいでしょうか、王子」

そうゆるりと手を上げてみた私を、この会議の幼い指揮官ジハイル王子は、フェルダ王の目が点になっているのをいいことに、徐^{おもむろ}に嫌そうな顔で、座する私を上から見下ろした。しかし“敬愛する兄君”がいる手前、私を無視する気はないようだ。

「何だ、僕はまだ何も提議しておらぬのに何を質問するというのだ」

ちよっぴりめげそうになつてきた私は王に助け舟を求めようと目を泳がせたが、まだ王はこの状況をよく理解しておられないようで当てにはなりそうもない。

そんな王を私はふと微笑ましく感じて瞳を細めた。

フェルダ様のこの破滅的な思慕は誰からも理解されるものでも、祝福されるものでもない。

ただの平民であつたなら、血縁者同士がどんな関係を結ぼうとも、二人寄り添つて暮らそうとも、ただ婚姻ができないだけで、子孫が残せないだけで、周りがどう思おうが当人同士が了解しているのであれば好きにすればよいだけの話だ。

しかしフェルダ様は一国の王だ。

あらゆる権限と権利を持ちながら、その代償として個人の自由はない。子孫を残す義務も課せられる。

フェルダ様の思慕は権力者である以上、許されるものでない。

永遠に孤独で救いの無い想いでありながら、それを笑顔と攻め気だけで可能にしようとしておられた若き頃。

しかし乗り越えるにはあまりにも眼前の壁は高すぎた。

味方も理解者もないフェルダ様の想いはいつも四面楚歌だった。

しかし今、カタチはどうであれ、少なくとも小さな味方が王を支えている。

まだ世間を知らない無垢で純真な心を持った……多分持った彼の理解者が現れたのだ。子供の思いは成長と共に変化する。だからいつかはやはりこの恋の難しさを悟り、フェルダ様を否定されるかもしれない。だがそれでも今は、今だけは確実に王の氷の壁を溶かしてくれる存在であることは確かだった。

故に、王はこの状況に困惑されている。初めての味方の出現に。それはとても母性本能をくすぐられて、心の底から可愛いと思つてつい笑んでしまったのだ。

フェルダ様は何故か周りの人間にそう思わせてしまう雰囲気がある。放つて置けない。それはやはりフェルダ様ご自身のお心が絶望で染まっているからなのだろう。そこに一筋の光りを差し込んであげたい。だから私も、ジハイル王子も、国民も皆フェルダ様が大好きなのだ。

そんな思いを馳せながらフェルダ王を見ていたが、端からどす黒いオーラが立ち上っているのが少々気になって、私は小さな指揮官に視線を戻した。おお、黒い黒い。

「ジハイル王子、エレナ王女を搜索することには異議などございませんが、我々だけで会議をする意味がいささか理解しかねます」

寧ろ、指揮官は言わずもがなこの目が点状態のフェルダ王で、ジハイル王子はお昼寝でもしてくれていた方が

シエン、お前は僕の計らいでこの会議に参加させてやっている

ことを忘れるな。分ければ今心の中で思った私に対する非礼を土下座し詫びることだ。

と言う脅し文句を目だけで語りかけてきた。まったく未恐ろしい王子だ。私の心の中までの確に読んでくる。

表面上可愛らしい王子は、か弱い雰囲気醸し出し、目を潤ませた。

「城の者など何の役に立つものかつ。兄上のことを真に考えて力になってあげられるのは僕しかないんだ。だから僕は……！」

「一応私も加えて下さいよ……」

しかし的は射ている。さすが前国王クラウド様のご子息。確かに確実に王のお力になるためには、王女の生存は伏せるのが妥当だ。

もしクラウド前王の耳にでも入れば、王女の行方はすぐに分かるだろう。だが、またいずれフェルダ様とエレナ様は引き離され、エレナ様もどこかへ嫁ぐことになる。

それならばいつそ、エレナ様は我々だけが知る存在としてどこかへ隠しておけば……。

私は王をちらりと覗いた。おそらく王もこの辺りまでは同じ考えだろう。問題はジハイル王子だが。

いくらクラウド前王の生き写しのようなお方でも、まだ子供だ。いつどこでエレナ様のことが漏洩するとも限らない。

しかし、ジハイル王子が伝令鳥ピッピの幼鳥シーザを操れる存在で

あるのは貴重な人材でもある。王子に対して利用を考える私は王族に仕える人間としては背信行為にあたるのだから、フェルダ様の幸のためならば、私は誰だって利用する覚悟がある。搜索方法としてあのピッピの幼鳥を利用しない手はない。ならば。

あれこれ暗策していると、円卓のテーブルクロスの下でフェルダ王が私の足を静かにコツンと叩いた。王子に付き合えと、そういうことですね。まったく。今すぐにも駆け出したいのはフェルダ様ご自身だというのに。

本当に。

王。貴方は大したお方です。今この時、貴方の心中がどれほど嵐に吹き荒れているか、私などにはまったく想像もできないほど激しいものなのでしょう。

だから私は絶対に貴方を幸せへ導いてみせる。

たとえエレナ様にとって光りの差さない未来であろうとも。

13（後書き）

アクセス、お気に入り登録、評価、そしていつも読んで頂きありがとうございます。

小さな弟が立ててくれた作戦はなかなか出来たものであった。

まずは姉が生きているという事実是我々だけの心の内に留めておくこと。

それから姉の搜索方法として、伝令鳥を使うこと。

ジハイルは姉を知らない。肖像画も16歳の時のものだ。9年経った姉はさぞ美しく成長していることだろう。

ただ、9年をどのような環境下で過ごしていたのかがとても心配だ。どうか辛い思いをしていないことを願うばかりだ。いいや辛いに決まっている。俺と共に過ごした日々以上に幸せな生活などありはしないのだから。

姉さん……。

何故連絡をくれなかった。9年。長い。あまりにも長すぎる。

姉の性格は自分が誰より一番知っている。それを考慮して憶測できるのは、連絡が取れなかった。姉が自ら連絡をよこさないなど有りはしない。連絡をする手段が得られなかった。それとも

フェルダは青冷めた。もう1つの憶測はあまりにも残酷だ。しかしゼロでない可能性は全て念頭に置いておかねばならない。

そつ、連絡を取る取らないの問題以前に、姉さん自身に何か問題が

発生していた場合だ。

あの時、たしかに見た。水柱の先に浮かんだ姉の……姉のあまりに無残な悲劇を。

あの時点で生きていられたなど誰が考えようか。海獣に飲み込まれた人間がそこからどうやって生き延びることが出来るか。屈強な戦士でもない。武器を携帯しているわけでもない。

非力な少女の姉さんがあれから生還できていた謎も全く分からない。

まさかあの男が？

フェルダは忌々しい記憶を思い返しギリ、と歯を食いしばった。9年経ってもその悔しさが薄れることなどなかった。

世界の孤島、聖地シュベール帝国の女帝の息子、ウエルクボルグ。15だった俺はあの男に一矢報いることすらできなかった。

その男が姉を助けたとでもいうのか？

あの広大な内海で、無数に生息するだろう海獣の中から姉を飲み込んだ一匹を見つけたのか？

そんなことはありえない。それにシュベール帝国とはもうあれ以来連絡をとっていない。シュベール帝国はさらに謎を含んだまま世界から孤立している。まるでその孤島だけが彼らの世界であるかのよう。そのような状態の帝国にメンデルス国の伝令鳥が入り込むことはおそらく不可能だ。少なくともあの男がいる以上。

姉さんは帝国にはいない。

ではどこにいる。

あの手紙は間違いなく姉が書いたものだ。その内容は、俺が1年以上前に書いた手紙への返事だ。それが昨日俺の元へ届いた。シエンによると、あの手紙の材質の紙に書かれたものというのは、1年も経てば文字が消えてしまうらしい。とすれば、姉があの手紙を書いたのは1年以内。つまり、それまでは何とか生き延びてくれたのだ。

俺を待っていた姉を見放した罪は何度謝っても謝りきれない。償いきれない。悔やむばかりで自分を恨むばかりだ。

俺は心に固く誓う。

この先にやることはたった1つ。姉を捜し出す。

その後はもう二度と姉を離さない。非力だったあの頃とは違う。

俺にできないことはもうない。姉さんを迎えに行き、ずっと永遠に俺の傍に置く。誰にも異論は唱えさせない。たとえ肉親にさえも俺は刃を向けることを惜しまない。

俺に逆らう者はこの世から消えてもらう。

姉さん、待っていて。

すぐに見つけ出す。きっと貴女も俺に会いたくて、俺が迎えに来るのを待っている。

そうだ、姉さんはずっと待っていたんだ。9年もの間、ずっと待ち続けて

「王、フェルダ王」

シェンの声にフェルダはハッと我に返った。

「王、大丈夫ですか？少し休息を……」

「いや、すまない。さあ、続けようか」

「兄上、大丈夫です、僕がいます。僕が兄上を支えます」

フェルダはジハイルに柔らかに微笑んだ。

「伝令鳥のことだが、ピッピがどのような経緯で姉上の手紙を持ち帰ることとなったのかを考えなくてはならない」

フェルダの目の輝きの鋭さに、シェンとジハイルは気を引き締め直し、頷いた。

もしピッピが海を漂う小瓶を偶然拾ってきたわけではないとしたら、ピッピが直に彼女と接触したことになる。

ピッピは彼女の匂いを覚えていたのか？たしかに伝令鳥は対象を匂いで嗅ぎ分ける。その嗅覚は人間はおろか、犬のそれとは比較にならないほど鋭い。ピッピが伝令役として適正しているのも、確実か

つ正確に届ける相手を見極め、到達することができるからだ。

しかしやはり広大な海からたった一人の元へ辿り着くのはいくらピッピといえど時間を要する。そしてそれは奇跡にも近い。何通もの手紙を海へ届けてきたが、9年経ってようやくピッピは辿り着いたのだ。彼女の元へ。

この憶測がどうか当たりである事を願う。

「そのことで、僕に良い提案があるのです！」

ようやく本題に行き着いたと言わんばかりに、ジハイルが爛々^{らんらん}と顔を輝かせて椅子から立ち上がった。シエンは置いておいて、敬愛する兄が自分に目を向けたことが嬉しかったのだろうジハイルは、やや顔を紅潮させて両の口端をにんまりと吊り上げた。

「兄上、もう一度手紙を書いてください。そしてピッピに姉上の匂いがかがせて飛ばすのです。おそらくピッピは姉上の匂いを覚えていた。だからもっと強い匂いを嗅がせてさらに思い出させるのです。そうすればピッピは必ず姉上の元へ辿り着く」

「文通でもさせる気ですか？」

シエンが口を挟む。ジハイルはフェルダに顔を向けた。

「その後を僕が追います」

シエンは「えええ!？」と声を上げ、フェルダも目を大きく開けた。

ジハイルの提案は二人とも理解していた。メンデルス国最速のピッ

ピをジハイルが足で追いかける、それは無論違う。

シーザだ。

ジハイルを背に乗せて、さらに意思疎通もできる伝令鳥の幼鳥シーザでピップの後を追わせるのだ。幼鳥とはいえ、ピップの速さについてゆけるのは、メンデルス国内ではシーザしかない。

「無理ですよそんなの！」

シエンが声を荒げた。

「僕にしかできないことです、兄上」

「だって王子は地図書けるんですか!？」

「何だって!？」

二人の漫才のようなやりとりに、フェルダは突然吹いて笑いだした。シエンと戦闘体勢に入ろうとしていたジハイルはフェルダの様子に驚くと、内気な弱い顔に表情を変え、もじもじと顔を赤らめてフェルダに向き直った。

「あ、兄上…っ、そんなに僕の提案は間違っていますか……?」

しらじらしい、とフェルダに聞こえない声でシエンが呟くと、ジハイルもまたフェルダに気付かれないよう、器用にシエンの足を思い切り踏んだ。ふるふるとシエンの体が前のめりに倒れる。

フェルダは一頻り^{ひつつき}笑うと、椅子の背に体をゆったりもたせかけた。

テーブルとフェルダの間に空間ができると、ジハイルはまるで秘密の洞穴でも見つけたような瞳で目を輝かせ、機会を逃すまいとすぐにフェルダの元へ駆け寄り、組まれた足の上に小さな両手を乗せてフェルダを窺った。

それに気付くと、フェルダは腕を差し出し、ジハイルを膝の上に乗せた。ジハイルは幸せを噛み締めたような顔を浮かべて広い胸にぽふんと顔を埋めた。その小さな頭をフェルダの優しい手の平が撫でる。するとジハイルはもつと嬉しくなつて両手をフェルダの背中に回してぴつたりと密着した。

その時またフェルダが呆れ返っているシエンに目で合図をした。二人でやれやれと小さく苦笑を交わす。

「ジハイル、お前の提案はおそらくどの方法よりも確実だろう」

褒められたことが嬉しかったのだろう、ジハイルは埋めていた顔をパツと上げた。しかしフェルダの整った眉は少し歪められていた。

「兄上……？」

「だが、それは受け入れられない」

「兄上！」

ジハイルは大きな瞳を揺らしてフェルダに叫んだ。フェルダはもう一度ジハイルの頭を優しく撫でた。弟の髪は同じ兄弟でも、輝きが父クロウドにとってもよく似ている。太陽の輝きのような光りを放つ癖のない髪。一方フェルダは母親似の髪で、月に照らされた淡い黄

金のような色をした柔らかな猫毛だ。

「お前を危険に晒すわけにはいかない。私はお前が大事だ」

「僕は大丈夫です！シーザは僕の言うことなら何でも聞く！絶対に落ちたりしません！」

「ダメだ」

「兄上！」

「ジハイル王子、このシェンも賛同はしかねます。貴方はこの国の王子なのです。弁^{わきま}えて下さい」

「うるさい！お前に意見など求めているい！」

「ジハイル」

フェルダの口調が微かに鋭さを帯びたのを敏感に感じ取ったジハイルは、黙り込んで俯いた。

「兄上……僕は……僕は……っ」

「お前の気持ちはありがたく受け取っておくよ。お前は私の自慢の弟だ」

「そんなの……そんなの……っ！」

ジハイルは握り締めた小さな拳を震わせると、フェルダの膝から降りて勢いよく部屋を飛び出していった。

「あつ、王子！」

「シェン」

追おうとしたシェンを呼び止めると、「ジハイルを頼む^{あれ}」と静かに言った。シェンはため息をついて、「分かりました」と一言だけ言うのと、ちらりと目を天井に向けた。天井にあった微かな気配が1つ消える。これでジハイルが無茶をしないようにシェンの秘密の部下が弟についていてくれるだろう。

「……まあ、最善ではあるのですがね……」

シェンはテーブルの上で指を絡めた。

「何、お前の言うとおり文通でもするかな」

「王……、またそのようなお戯れを」

部屋の外のバルコニーに、呼んでもいないのにピッピが丸くなって眠っていた。最近あそこを巣だと思い込み始めているようだ。

それを二人で黙ってしばらく眺めた。

私はいつも海を眺めて過ごしています

そう綴られた文字を、フェルダは愛しそうに指でなぞった。

姉さん

迎えに行ったらどんな顔をするだろう。

俺のことを覚えてくれているだろうか。まさか忘れたなどある筈がない。姉さんは俺のことを愛してくれていた。それ以上に愛している俺も姉さんのことは一時だって忘れたことはない。

ああ、今の姉はどんなに美しく成長されていることが。

しかし、あの状況で命が助かっていたのだから、少なくとも無傷ではあるまい。もしや姉さんが今まで連絡をくれなかったのは、俺に会いづらい何らかの理由があったためではないのか。

そうだ。それが原因ではないのか？^{おこ} 驕るわけではないが、俺の名は今や全世界に轟いている。俺は興味はないが、勝手に色々な通里名もつけられてもいる。メンデルス国のフェルダ。その名を聞いて知らない人間の方が少ないだろう。

そんな中で、姉の耳に俺の名が入らないということがあるだろうか。

姉さんは俺が王になったことを知ってきつと喜んでゐる筈。何故ならそれが姉さんの願いだったからだ。すぐにでも俺に便りを寄越すか、あるいは会いに戻ってきてくれるか、絶対に何らかのアプローチをしてくる。それが俺の知る姉さんだ。

それが全く無いということは、やはり連絡を取ることを阻む事情があつたのだ。

なんてことだ。

姉は大変な思い違いをしている。

俺は姉がどんな姿であろうが永遠に誓つた愛が無くなることなどない。

それをもつと貴女に分かつてもらつていれば、こんなに苦しめずにするんだのだ。俺は愚かだ。何を遠慮していたのか。何を恐れていたのか。

もつと貴女への愛の証を示していれば。

「姉……さん……」

部屋の扉を叩く音が聞こえ、少し間を置き扉が開くと、側近のシェンが入ってきた。頭を抱え込んだフェルダを見て痛ましげに目を細める。机の上にはあの手紙があつた。

「フェルダ王、モツアト国の統治者ハミル殿より文が届いております」

返事がない。しかし耳にはちゃんと入っているだろうことをシエンは昔からよく知っている。ただそれに反応するかしないかは本人の自由と、気分次第だが。

「来月に舞踏会が開かれ、それに王を招待したいとの内容ですが」

「却下だ」

シエンはため息をはいた。

「そう仰ると思っていました。私もいつもであれば何も言いませんが、これはお受けになられた方が宜しいかと」

静かな空気が執務室に流れる。しばらく間をおいた後、フェルダの座っている黒革の椅子が軋んだ。

「分かった。了解しよう」

「ではそのようにお返事を出しておきます。それから、今月末ですが」

フェルダはようやく顔を上げた。その顔に悲嘆の色は見えない。シエンは心の中で安堵し、話を続けた。

「我がメンデルス国とモツアト国に挟まれているショパー二国にて収穫祭が行われ、各国からの参加者を募っているとの書状がショパー二国王より世界各国の王族へ届けられ、ここメンデルスにも今しがた書状が参りました」

「よし、それも伺おう」

今度の返事は早かった。シエンは意味ありげに笑み、かしこまりました、と礼をした。

「隣国バハン、それからベトヴェン国では何か行事が入っているのか」

「おや、積極的ですね。お祭り、お好きでしたか？」

フェルダは鼻白んで笑うと、どさつと音を立て椅子の背にもたれ、足を組んだ。

「ああ、一刻も早く参加したくて今にも城を駆け出しそうなほどにな」

「それは各国も大喜びで迎え入れて下さるでしょうね。メンデルス国のフェルダ王の来訪となれば、良きにしろ何にしろ、国民の間で大きな噂を招くでしょう」

「盛大に頼むよ」

「ふふ、王が道に行くだけで、周りが勝手に盛り上がりますよ。では、早速残る二つの国の、特に沿岸で行われる行事をピックアップして参ります」

フェルダは手紙に再び目を落とした。

いつも海を眺めて過ごして

海を望む場所に姉さんはいる。

必ず。

迎えに行く、俺の愛しいエレナ姉さん

15（後書き）

アクセス、お気に入り登録、評価、そしていつも読んで頂き心より感謝申し上げます。

今、収穫祭が村の話題の種となっている。

年に一度シヨパー二国で開催される祭りで、農業、漁業、林業、その他、あらゆる産物をまとめて一度に収穫を祈願するというのが元々の起源であるが、今では国民の一般的なお祭りとして、シヨパー二王城下で行われる祭りを見に行ったり、屋台を楽しんだり、家の中にも飾りつけを施したりと親しまれている。

今年もそんな楽しい季節がやってきた。

エリイがこのお祭りを祝うのはまだ数えるほどだ。9年前はすでに終わっていたか、そんな余裕はなかったか、あの頃のこととはあまりよく覚えていなかった。

それに加え、パペット爺さんやケ빈はそのような祭りを知っていても特に興味を示さなかったので、城下まで祭りを見に行くのでさえ、村の同じ年頃の娘達に誘われて初めて行ったのが数年前だ。城下は村の朝市を大きくしたような賑やかなところだった。それに加え、収穫祭の飾りつけや屋台が軒を連ね、とても楽しく見て回れたのも記憶に新しい。

それからは城下まで行くことはなかったが、家の中に飾りつけをしたり、ちよつとご馳走を作ったり、パペット家で愉しんでいた。今年もそろそろ飾りつけを始めようと思う。

そういえば、今年は村の女の子達が特に収穫祭の話題に盛り上がっていた。

花を売っていると、よく話す女の子達が顔をやや紅潮させて話しかけてきた。

「ね、ねっ！エリイは今年城下行くの？」

城下行くの、とは、城下が収穫祭の中心で、催しを見に行くのかと言っているのだ。私は横に首を振った。

今年はというか、今年も家族でささやかにお祝いしようと思っていた。城下までは村からちよつと行ってくるという距離ではなかったし、何より今年はケビンに誘われたのだ。

「エリイ、収穫祭一緒に祝おう」

きつとそれは毎年やっているように、家族（私はここでの暮らしで皆を家族と呼ばせてもらっている）で祝うことなのだと思得したが、実はほんの少し違った意味も含まれていることも気付いていた。

ケビンのことを知るようになって、彼が私を見る目も、私が彼を見る目も、もう以前のただの家族ではなくなった。

ケビンには今でも忘れられない女性がいて、それは彼の姉だと彼は言った。そして私はその人に似ている。

そのことをケビンの口から聞いたあの夜から、独り苦しんでいた彼を少しでも癒すことが出来たらと、私は彼女の代わりをすることを心の中で決めた。

それから私とケビンはただの家族ではなくなった。

「エリイ、何を考えているんだ？」

エリイは少し可笑しそうに笑ってケビンを見上げた。

「あ…ううん、村の娘たちがね、今年の収穫祭は絶対行かないと人生損をするわよーって、言ってたのを思い出しちゃって」

「何か特別な催しがあるのかい？」

ケビンは収穫祭やお祭りそのものには全く興味を示さない。

「誰か特別な来賓があるみたい。ううんと…たしか…メンデルス国の王様」

その時、私の体に覆いかぶさっていたケビンが一瞬体を硬直させたのが分かった。

「メン…デルス…」

この話を続けてはいけないと心の中の私が警告を出した。それに素直に従う。ケビンの様子が明らかに一変して険しいものになっているのが彼の顔で分かった。

きつと、踏み込んではいけないことなのだろう。エリイはこの話題を出してしまったことを少し後悔した。何でもないと黙って彼の愛撫を受けていればよかったのだ。

村娘達が言っていたのは、今年の収穫祭に隣国メンデルスの王様、

たしかフェルダ王という名前だったと思う。その王様が招待されたという内容だ。

聞いた時は、特に興味を惹かれるわけでもなく、そうなの、と頷いただけだった。でも、その娘達が言うには、フェルダ王はとても有名な王様で、若く何よりとても容姿端麗らしい。

私はその王様を知らないと言うと、皆が一斉に驚いた。誰もが知っている王様を私は知らない。何故なら私には記憶がない。

9年前に海難事故（それが正しいのかも分からない）でパペツト爺さんに救ってもらい、今では家族として住まわせてもらっている。

村娘達は今年は絶対に城下まで行くと思気込んでいた。そこで来賓のメンデルス国の王様が見られるからだ。あまりにも熱を含んでその話題に花を咲かせるので、だんだん自分も興味が湧いてきて、ちよっと見に行ってみたい気持ちはたしかにあった。

しかしやっぱりやめることにした。

ケビンのこの動揺を無視してまで自分の意見を通すこともない。特に王様が見たいわけでもない。

それよりも今は、今の今まで私を抱いてくれていた彼のことを考えていたい。

ケビンと初めて口付けを交わしたあの夜から、私と彼は時折交わるようになった。

パペット爺さんにはもちろんそんな関係になっっていることなど知られてはいない。ケ빈は私を漁と一緒に連れて行くと船に乗せて、海の上でいつも私を抱く。私もその方がパペット爺さんにばれてしまうこともないので安心して彼に身を任せられた。

ただ、彼が抱いているのは私じゃない。

彼がいつも最後に搾り出すようにして口に出す名は。

私はそれを了解して、でも聞こえないフリをして、今も抱かれていた。彼も初めて私を抱いた時に言っていた。

「俺は君に酷いことをしている」

私は笑って横に首を振り、彼の首に腕を回した。彼の暗闇を知ってから、私は彼を救ってあげたいと願うようになった。

それが正しいことかは誰が決めることじゃない。記憶のない空っぽの私でも誰かを癒してあげられるのなら、たとえ私自身が愛されていなくても決して辛いことではなかった。

なのに今、彼はとても辛い顔をしている。

メンデルス国は彼にとって何か思い出したくないことと関係していたのだろう。これからはもうその国のことを話題にするのはやめよう。

でもメンデルスはとても平和で良い国なのに。

エリイもふと考えた。どうして隣国が良い国と思えたのだろう。

私は知っている？メンデルス国。世界5大大国の1つであることは知っている。でもどんな国かなんて、何故今確実にはつきり言えてしまったのだろうか。

メンデルス。

国王フェルダ様。

何か。何かが。

「すまないエリイ。君にまた怖い思いをさせた」

「え？」

ここ、とケビンは私の手首をそつと目の前まで持ち上げ見せた。手首に彼の強く掴んだのだろう指の痕がうつすらと赤く滲んでいた。おそらく彼が動揺した時に思わず力が入ってしまったのだろう。だがエリイ自身も考え事をしていたので全く気が付かなかった。

「あ、大丈夫。気になんてしないで、ケビン。私平気だから」

「エリイ……」

ケビンは辛そうな表情を見せると、エリイに口付けを落とした。エリイは目を瞑り、ケビンの背中を優しく撫でる。やがて口付けは深くなってゆき、撫でていた手の指は背中にしがみついた。

16（後書き）

約一ヶ月、引越等の都合で更新を一時停止しておりましたが、ようやく落ち着いてまいりましたので、これからまたぼちぼち更新してまいりたいと思います。

拙い小説ですが、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

エレナ様のエの字も出てまいりませんね。

と思わず出かかった失言を、一番聞かせたくないお方があまりにも簡単に代弁した。

「姉上はどこにいるのだろうか……」

シエンは胸を細剣で貫かれたような痛みを感じた。

もつと叫んでくれてもいい、八つ当たりをしてくれてもいい。本当に真剣で私の胸を刺してくれてもいい。

そんな風に他人事のように呟かれて、このシエンに一体どうお返し申し上げられるというのか。

泣いたって私は貴方を情弱だなどと思う筈がないのですよ。

だからせめて感情を私にぶつけて下さい、王。

シエンは気持ちを切り替えて笑うと、頃合になった紅茶をカップに注いだ。

「この狭い世界にいらつしやることは間違いありませんからね。消去法も大分ストックがなくなつて、逆にもう捜せないのが難しいのではないのでしょうか？」

どうぞ、とシエンはカップをフェルダの前に置いた。シヨパー二産

の茶葉は実に香りが良い。

「ベトヴェン国、バハン、我がメンデルスは勿論、女性の好みそうな祭りや催しは大体網羅しましたね」

「おかげで俺にまた妙な通り名が増えたようだが」

少し低めになつた声色の王に、シェンは肩を竦め、面白そうに笑つた。

「お祭り好きのメンデルス王」

黙つてしまわれた。どうやらお気に召してはいないらしい。

フェルダ王には色んな通り名がある。

軍神

1000人斬り

どちらも雄雄しく逞しい通り名だが、それにいきなり「祭り好き」の優男が付くとどうも箔がつかないと言うか。

「優男に見えるか、俺は」

「あ、口に出ていましたか。失礼しました」

「優男に見えるか、俺は」

「……大分お疲れのようですね」

フェルダは座っていた長ソファにどっかりと背を預け、腕を引つ掛けた。公務の服を脱ぎ捨て、シャツのボタンを胸元まで外して着崩しているその姿は、世の女性共が見たらどういう反応を示すのか一目瞭然だろう。

「巷では、王はいよいよ王妃を迎え入れるために、各地を周り花嫁候補を探している、と噂されていますね」

「そうだな。当たっている」

「えっ」

シエンは思わず取り分けていた菓子をトングから取りこぼした。

「俺のただ一人の花嫁を捜して、俺は連日分け目も振らず祭り事に出席三昧」

「王！」

フェルダは眉を歪めて吐き出すように笑った。

「どこにいるのかまったく分からない。あんなに傍にいたのに。俺の名が世に広まれば姉さんはすぐに見つかる。それは俺の驕りおこだったのか？」

「王！しっかりなさって下さい！泣いても怒っても私は何も言いません。ですが、諦めることだけはこのシエン、異論を唱えさせていただきますよ」

「そんなこと……誰が……言っ……た……」

フェルダの腕がぼとりと胸の上に落ちた。やはり仕込んでおいて正解だった。

眠り薬

世界が狭いなど、ただの口実だ。

世界は思ったよりずっと広い。

全世界各地の行事に全て参加することは王の公務と距離と時間を考えるととてもじゃないが可能ではない。それでも時間が空けばフェルダ様は所構わず馬を出し、各地を飛び回られた。

王の名声はすでに世界中に轟いている。フェルダ様をどうにか招待したいと躍起になる王族達。王を一目見ようと押しかける群衆。絶え間なく振舞われる酒や申込みの途切れることのない舞踏。

フェルダ様のお体は今、限界点に達している。見ていて痛ましいがそれを微塵も見せない王の貫禄が余計に私を苦しめた。

明日にはショパー二国で開かれる収穫祭に出向かれる。これが今のところ回れる全ての行事の最後だ。

しかしそれまでの僅かな時間はどうか疲れを癒してほしい。

今だけは何も考えず、ただ深い眠りについてください。

でも貴方はきつと夢の中でもあの方を捜して暗闇を彷徨われているでしょう。

シエンはフェルダの体にそつとケットをかけると、テーブルに置かれたカップを片付け始めた。

収穫祭の行われる場所は、メンデルス国とモツァト国に挟まれたシヨパー二国の王城下で、位置としてはモツァト国側に近い。馬で全力疾走させて二日を超えるが、此度の出立は戦ではないため、長丁場に負担をかけさせないよう馬の速度を落として走らせる。よって、到着にはおおよそ三日、天候により四日かかることもある。

天候予想士の告げでは一週間は穏やかな初夏の陽気が続くであろうとのことなので、招かれているシヨパー二王城までは充分に余裕があった。

朝、メンデルス王城の正門扉が開かれ、白馬に跨またがった王、フェルダが現れると、見送りに参列する従兵、護衛についてゆくすでに待機していた兵士達はその姿にハッと魅入られた。毎度のことだ。

戦の時のフェルダの白を基調とした鎧姿、そして濃赤の公服に金の刺繍が施された正装で白馬に跨またがる姿。どちらがたまらないかという話題が従者食堂でよく繰り広げられている。が、勿論王がそんな話題の種にされていることは知る由もない。

城門を潜るとフェルダは手綱を手前に引いた。馬の足が静かに止まる。後続のシェン、その後ろの数人の護衛兵、その後ろの荷馬車が順に止まっていった。

フェルダの直属側近シェンは「どうなされました？」とは聞かなかった。

何しろ道を通せん坊している一人と一匹が嫌でも目に入っているからだ。シエンは眉間に寄せたシワに人差し指を当てて目を瞑った。今朝がやけに穏やかに時間が進んでいたことに疑問を持つべきだった。

いや、寧ろこの通せん坊は今までよく耐えてきたと褒めても良い。それを思えば、今のこの状況を相手にするのもさほど疲労は感じないというものだ。

「ジハイル王子、伝令鳥を退かせていただけるとありがたいのですがねえ」

道をどっかり塞いでいるのはちょっと成長したような気がする伝令鳥。ピッピの幼鳥シーザで、隣で足を肩幅ほどに広げて仁王立ちしているメンデルス国第二王子ジハイル坊はまだ小さな体のため、あまり道を塞ぐ行為に貢献していない。

フェルダ王が世界各地の行事に出向いている本当の理由が「お祭り大好き」ではないことを知っているのはこの場では自分と王しか知らない。

エレナ様関連についての超秘密事項を知っているジハイル王子が下手に口を滑らせてしまわぬ内に、さっさとこのシーンをカットしなければ。ああ、ジハイル王子が全身全霊で「僕も連れて行って！」オーラを噴出なされておいでだ。眼光から炎が立ち上がっている。そんな意気込みだ。

シエンが口を開きかけた時だった。

「ジハイル、支度は整っているのか？」

「はい。道中の食事、シーザのエサ、野営の寝袋。万事滞りなく」

それはフェルダ王とその弟ジハイル王子の会話。

フェルダ王は静かな苦笑を浮かべた。だろう。後続の私からは王の表情は見えない。

「シェン」

「はっ」

王に呼ばれ、シェンは馬を一步前に進ませた。

「シーザの背に積まれた荷を解いて下ろせ」

ジハイルの顔が悲嘆に歪んで円らな瞳が揺らいだ。

「あ、無理です。伝令鳥に頭かじられます」

「そうか。では仕方ない。ジハイル。時間を与えるから自分で積荷を下ろせ」

いつもの優しい眼差しの兄の声は今は今全てを従える王の威厳の声色に変わって弟に発せられている。兄が大好きな弟としてはそれに逆らうことなどできない。

ジハイルは何か言おうとしたのか、口を開きかけたが、俯いて歯を噛み締めると、隣のシーザに向かい合った。目は前髪に隠れて窺え

ないが、もしかしたら涙を浮かべているかもしれない。そう思うとさすがのシェンも少々同情せずにはいられなかった。

全ての荷が下ろされると、シーザは背中^の羽毛に空気を送り込むように毛羽立てた。幼鳥は白馬のように白い。一度伸びをするように翼をバサリと羽ばたかせると、散った羽が雪のように空を舞った。

「終わったな。では行くぞ」

俯いたままのジハイルは何も言わず道の端に佇んだ。シェンが返事を返そうとした時、フェルダはやや身を屈めて、片手を下に伸ばした。

「えっ、フェルダ王？」

思わずシェンが目を見張る。

王は今度はたしかに苦笑していた。

「ジハイル、何をしている。乗らないのか？」

ジハイルが「え」と顔を上げる。目が充血している。泣かないまでも、やはり涙を堪えていたことが窺えた。

「それともシェンの馬に乗るか」

「兄…上…？でも、だつて……」

ジハイルは積荷の山に目を向ける。

「可愛い弟を野宿させるような兄がどこにいる。それとも私は容赦の無い冷たい兄だと思われていたのかな？」

ぼたりとジハイルの目から我慢に我慢していた涙が零れ落ちた。ぱたぱたとフェルダに走り寄り、大好きな兄の腕にしがみついた。フェルダはそれを軽々と掬い上げ、自分の前に座らせた。見上げたジハイルにフェルダはいつもの柔らかな笑みを返して言った。

「収穫祭、行きたかったのだろうか？」

その笑みの奥に真実が含まれていることによりやく気付いたジハイルは嬉しさのあまり破顔して大きく頷いた。頬に零れる涙をフェルダは指で優しく拭う。

「それに、シーザは自分でエサを捕るから心配はいらない」

「はい……！」

「シヨパー二国王にもう一人参加の旨を伝えておきます……」

「なんだシエン、まだ出発もしていないのに疲れ果てたような声を出すとは」

「兄上、シエンは歳ですから」

「そうだったな」

「はいはい何とでも仰っていただいて結構ですよ……。ほんとに疲れてますから」

道の脇に下ろされた積荷をシーザを怖がりながら片付けようと奮闘している従兵達が見をつまんでいる。一体どんなエサを用意していたのか。容易に想像できる分、シェンはそれ以上考えないことにした。

そうしてジハイル王子と遙か上空に一匹を加えた王の一行は一路シヨパー二国へ向けて進み出した。

ジハイル王子はこの収穫祭を始めとしたこれまでの行事参加の本意を理解していたのだろう。わずか7歳にして先の場合で何も口に出さなかったのは賢明だ。やはりクロウド王の息子と言うべきか。完璧に私を視界に入れないようにしているこ憎たらしさもご立派である。

しかし、これはまさしく機運到来。王子はどうであれ、伝令鳥を連れて行くことは何かを期待せざるを得ない。

シェンは前列で微笑ましく会話している兄弟に目を向けた。

伝令鳥にジハイル王子が乗ってピッピの後を追うのは不可能に等しかった。シーザの体力や王子の危険は勿論のことであるが、真の不安要素はピッピの方にあった。ピッピの嗅覚がいかに優れているとやはり海上となると匂いを嗅ぎ分けるのも困難であり、実際にエレン様とおそらく出会っただろう期間に9年もかかったのだ。

どの国の沿岸地域でもエレン様の噂は聞かなかった。シヨパー二国は広大だ。沿岸だけの搜索でさえ無謀と言えるほどの広さだが、国

民に親しまれている収穫祭ならば、そこへ人の方から集まってくる。

エレナ様がシヨパー二国にいてくれることを願うしか今の私にはもう打つ手がない。いいや無論この祭りもただの遠出で終わってしまったら、私は再び海の望む地域での搜索に苦労は惜しまない。

昔父に二万の親衛隊がいたように、今の私にもそれなりの親衛隊（主に裏の、だが）ができた。彼らを総動員させよう。

それがフェルダ王に対する償いの一部だ。9年前から搜索をあきらめていなければ。

私には正直ピツピが持ち帰った手紙が本当にエレナ様のものかは判断できない。だが王の言葉が真実だ。エレナ様はご存命だ。

エレナ様は今度こそ見つかる。

もう何度その言葉を呟き前をゆく王の背中を見つめたことが。

こんなことはこれで最後であることを願う。

伝令鳥シーザの白い羽が風に乗って私の目の前を流れるように通り過ぎた。それを追いかけるように顔を上げる。

フェルダ王も同じように空を見上げて、白金の髪を風に靡^{なび}かせておられた。

18（後書き）

アクセス、お気に入り登録、評価、そしていつも読んで頂き本当にありがとうございます！

遠くの空で微かに決行花火の音が鳴った。

エリイは花を摘んでいた手を止め、折っていた腰を伸ばして空を仰いだ。夏の晴天の陽光が眩しくて目を細める。だが空気は乾いていて気持ちの良い暑さだ。

さっきの音は収穫祭の始まりを知らせる合図だ。雨が降らなくて良かった。よく話す仲の良い村娘のニーナは今頃シヨパー二国城下町で目を輝かせているだろう。

村娘達に前日まで収穫祭に一緒に行こうと熱烈なお誘いを受けていたが、やはりエリイは「皆、楽しんできてね」と言って断った。

城下町に花を売りに行こうかとも考えなかったわけではないが、城下のような活気溢れる市場で売られる花はこんな田舎の野に咲く素朴な花とは比べるまでもなく艶やかだ。数年前市場で見た時その差に驚かされたものだ。

今摘んでいる花は、今日家で皆と夕食を囲む時食卓に飾る用だ。夏の代表的な花の1つで、太陽のような明るい黄橙色が心も明るくしてくれる。

そういえば、夏は黄色のノマの花が好きだった。春はセティアラ、夏のノマ。秋のサザハラ、冬のポテア。

それらの花を見るたびに季節の移り変わりを愉しんでいた。

でもここには咲かない。

シヨパー二国の花じゃない。図鑑を見ても似たような品種はあったけれど、そのような名前の花は見当たらなかった。

でもエリイはそれらの花を毎年見ていた。

一体どこの国の花だったのだろうか。

私はどこで見ていた？

思い出せない。

エリイは花畑の海にしゃがみ込んだ。

記憶はもう戻ってこないのかもしれない。9年も経って、ここ暮らしてはもう自分の生活となり、家族もいる。毎日充実していて優しい人達に囲まれて。

でももし記憶が蘇ったら。

いつもそれを考えると胸がざわめいて考えるのをやめていた。今も少し苦しい。それでも今日は何故かその先を考えずにはいられたかった。

私はどこの国で、どんな境遇で、どんな人達に囲まれて暮らしていたの。

エリイが考えてしまう理由はもう一つあった。

ケビンから告げられた言葉がエリイを複雑な思いにさせた。

それは何度かケビンと体を重ねたある夜に告げられた。

まだ火照りの冷めない体で荒い息を整えようとしていたエリイの顔を、ケビンは黙って見下ろしていた。

「どう、したの……？」

「黙っていいようかとも思ったのだが……やはり言うよ。エリイ、君は……すでに誰かのものだ」

「え……？」

それがどういう意味なのか、告げられた瞬間には理解できなかった。

でももう純真無垢でいられるような少女ではない。大人の女性に成長したエリイはその意味を理解した。

ここに流れ着く以前。9年前にはすでに自分の体は誰かに抱かれていたということ。

ケビンは初めて自分を抱いたときにすぐに気が付いたらしい。恥ずかしいことに、てっきり自分はケビンが初めての人だとずっと思っていた。

ショック……というのか、何と言う感情なのか。

9年前。今の年齢をエリイは知らない。女性が結婚をするのは16

が一般的で、それで相手と結ばれる。それが普通だ。

もし私がその「普通」という生活を送っていたのならば、私は既婚者で、少なくとも現在25歳ということになる。

エリイは首を振った。

そんなことではない。歳なんて何歳でもいい。

ただ、私はちゃんと「普通」の生活をしていたのか。私の体は愛されて抱かれたのだろうか。私もその人を愛していたのだろうか。

本当の親。本当の家族。本当の暮らし。本当の……。

9年経って、「私」という存在は今どうなっているのだろう。

死んでしまったとしてお墓が建っているのか。それとも行方不明のままもう忘れ去られてしまっているのか。

でももし、今でもずっと私の帰りを待っていてくれる人がいるとしたら。

エリイは涙を流し、口元に手を当てて俯いた。

今記憶が戻ってしまったら一体私はどの道を選ぶべきなのか。

私の第二の人生と言ってもいい今の暮らし、ケビンやパペット爺さんと暮らす人生を選ぶのか。

それとも本当の自分に戻るのか。戻されてしまうのか。

怖い。

私は帰りたいのか、帰りたくないのか。

帰れるのか、帰れないのか。

帰るべきなのか、帰らざるべきなのか

シヨパー二国の王城バルコニーにシヨパー二王の玉座、そしてその隣に来客として招かれたメンデルス王の座る玉座が並んでいた。二人の王が座する中、王の姿を一目見ようと集まった民衆の数は何万、何十万になろうか。

ここはシヨパー二国。だが、民衆の視線は祖国の王ではなく、その隣の若き王に一心に向けられていた。

シヨパー二国の王ダルセンはその人気ぶりにもはや呆れるように苦笑してメンデルス国王に顔を向けた。

「いやはや、貴殿の輝きは我が民を惹きつけて止むところを知らません」

足を組んでワイングラスを揺らしていたフェルダは静かに微笑みを浮かべると、ルビー色のワインに口をつけた。その一連の動作がまた何とも言えない華麗な姿で、ダルセンでさえも思わず目を見張った。

どこからともなく絶え止まぬ歓声が上がる。女性の甲高な黄色の声はフェルダの名を叫び、ドスの聞いた野郎共の歓声は「俺と勝負しろー！」という命知らず。

昼から始まった収穫祭も、今はだんだんと日が落ちてゆく時間となっていた。夜には大輪の花火、そして城内では舞踏や晩餐会が行われる。無論フェルダもこのまま参加することが決まっている。

「ところで、フェルダ王は花嫁を探しておられるとお聞きしましたか？」

やや赤い夕日がフェルダの整った顔を優しく照らす。その顔がまた静かに笑った。

「ええ。この国に私の求める花嫁がいることを願っていますよ」

ダルセンは大柄の体に見合った豪快な笑い声を上げた。

「我がシヨパーニの女性は強く逞しくておすすめしますよ」

「そうですね。シヨパーニ国の作物はどれも美味です。それらは育てる人々が強くあらねばならない。我がメンデルス国にもたくさん輸入させていただいておりますよ」

「して、誰かお気に召した女性は目に留まりましたかな？」

ダルセンはフェルダがずっと民衆に目を向けていたことに気付いていた。良い女がいなか見定めている。ダルセンの目にフェルダの姿はそう映っていた。それが「花嫁探し」だのと噂されるようになったのだろう。どの国の祭りの時もフェルダは民衆をずっと見続けてきた。

金の髪的女性。

それだけが頼りだ。王と民衆の距離は近いものではない。髪の色だけが目印となり、フェルダはそこに目を走らせる。

金の髪など星の数ほどいる。疲労しきった体で、しかし王の威厳を

保ったままたった一人を探すがどれほど体と精神に負担をかけるか。

それでも探し続ける。

たった一人の愛する人を。

「まあ、花嫁探しということでしたら、今宵の晩餐会でお探しになられたら宜しいでしょう。平民にも美しい娘はおりましようが、貴方ほどの人物の花嫁となれば、当然貴族のレディこそ相応しい」

また豪快に笑うダルセン王を横目に、フェルダも相槌を打っておい

たしかに、王族であるエレナ姉さんを探すのに民衆に目を向けるのは筋違いだ。シヨパー二王の言う通り、捜すならむしろ貴族達の集う晩餐会だ。

しかし。

あらゆる可能性を考慮しなければならぬという理由であればいい。だがもし貴族家にいたのなら、必ずこの9年のうちに耳に入っただけだ。

姉は貴族の間では有名だった。腹立たしいほどに愛されていた。愛しているのは俺だけだというのに。

そんな姉を匿^{かくま}っている貴族が自慢したくならないはずがない。もしくは従事者のどこからか必ず漏れるはず。

いいや、その前に、この俺に。このメンデルス国の王の俺に連絡を
いれないとどうなるか分からないほど貴族達は愚かではない。

姉さんはもつと別の場所にいる。

俺の直感がそう告げる。

「ダルセン王、今宵は海の望む場所で休みたいのだが」

「ほうほう、この国は漁業も盛んでしてな。どの町も新鮮な魚を食
すことが出来、活気もある！ぬ？つかぬことを聞きますが、内海の、
でよろしいですな？」

ええ、とフェルダは頷いた。この世界は内海と外海、二つの海が存
在する。姉さんがいるのは内海。

内海を望む町のどこかに必ず。

「ジジル地区、マズイル、タタツテ、ケンパ……ふうむ。これらの
町がおすすめですか。漁船の漁火を眺めながらのワインも格別で
す。お決まりになりましたら、私が手配をしておきましょう。どの
町にも私の別荘がありますから宿はそこを使われるとよろしい」

「よろしく頼みますよ」

フェルダが微笑むと、民衆の歓声が一際沸き立った。

やはり、フェルダ様は相当お疲れのご様子だ。シエンは痛ましげに目をほそめてフェルダを見つめた。

これから始まる晩餐舞踏会のため、シヨパー二城の客間には今フェルダとシエン、そしてフェルダの弟ジハイルが待機している。

色直しをし終えたフェルダ様は窓際に置かれた一人用の柔らかな椅子に座って目を瞑っている。その眉間にはしわが寄り、顔色も優れていない。欠席にすべきか。いや、それではこのようなどうでもいい行事にわざわざメンデルス国の王が参加した意味がない。

収穫祭に参加したのはフェルダ様の姉君、エレナ王女を捜し出すためなのだから。

このような田舎の国にあの清らで可憐なエレナ様がいるとはどうしても考えられないが、他国の港町の搜索は全て行つた。だが王女に該当する有力な情報は得られなかった。何一つ。

最も、手がかりが少なすぎる。

海を眺めながら過ごしています

その一文だけで世界中の内海沿岸を搜索……。メンデルス軍全兵をつぎ込めば出来ない話ではない。

が、エレナ様の存在は決して知られて良いものではないのだ。秘密裏に限られた人数で動くことは、最早無謀の策としか言いようがな

い。

万能な伝令鳥ピッピが9年かけて辿り着いたゴールに、我々はまだひと月も経っていないスタート地点です。すでに万策尽きようとしている状態。

やはり急ぎすぎているのか。

しかしどこで王女が存在が知れるか分からない。9年表沙汰にならなかったことの方が奇跡だった。特に聖地シュベール帝国。今はまったくメンデルス国と親交がない。本当に不気味な国だ。

9年……おそらくシュベールの重要位あたりに座しているのだろう。元エレナ様の花婿だったウエルクボルグは別の誰かと婚姻していると思うが、油断はならない。存在が知れた途端に動き出す可能性も念頭においておかねば。

「兄上……顔色が真っ青だ」

自分のことのように辛そうな表情を浮かべたフェルダの弟ジハイルも正装の色直しを終え、今は兄の傍らで膝をつき、兄の腕にそっと小さな両手を乗せてフェルダの顔を見上げている。

「随分ご無理なさっていますからね」

フェルダは一時の眠りに落ちているのか、二人の会話には反応しなかった。

「宿は決めたのか？」

兄の顔を見上げながらジハイルが言う。

「ここから最も近いマズイル地区の別荘をお借りしようと思います」
ジハイルは深刻そうな顔を浮かべながら頷いた。

「だな。兄上がお体を休めるに相応しい地区はジジルくらいだが、今は兄上のお体を考えてそこが妥当だろう」

「驚いた。調べたのですか？」

「無論だ。バルコニーで田舎王が言ってからすぐにな。貴様は超側近のくせに何もしていないのか」

いえ、してますけど。多分貴方より早く。とは口にしなかった。相手にすると疲労が溜まる一方なのだ。彼の相手は。

「また王子お得意の盗み聞きですか」

「何とでも言え。僕は兄上の幸せのためならどんなことだってするさ」

シエンはジハイルから目を離し、窓の外に顔を向けた。もうすぐ火花が打ち上がるだろう。今だけは心臓に響く爆音のない静かな空間を求めたいのが本音だ。

「姉上は……ここにいるのか？」

子供は純粹に残酷なことを聞く。シエンはため息をついた。

「そう願いたいものです」

「舞踏会での確率は？」

「さあ。皆目検討も」

「冷たい奴だな。やはりお前ではダメだ」

「王子でもダメです」

「うるさいな」

ジハイルは立ち上がり、小さな両手で拳を作った。

「知っているさ、そんなこと」

小さな呟きをシェンは聞こえないふりをして、また窓の外を見つめた。

晩餐会では事実上ジハイルの初めての社交場デビューであった。年齢よわい7歳にして見合わぬ大人びた顔つきと、輝かしい黄金の髪を揺らし、真っ直ぐ前を見つめる瞳を、かつて金龍王の異名で知れ渡ったメンデルス前国王クラウドを知る年老いた貴族達は、思わずその面影を重ねた。

しかし第二王子ジハイルを紹介し終え、その隣りに立つメンデルスの現国王フェルダが紹介されると、階下の貴族達は低いどよめきを波紋のように広げた。真の感嘆なるものは高らかな声ではなく、静かで低い轟きだ。

「おお……。なんと美しい……」

老若男女問わず似たような呟きが階下で止め処なく囁かれる。彼らの中にただの一人もその麗しき王が倒れる寸前だと見破れる者はいないだろう。

シエンは玉座の袖で見守りながらも齒痒い思いでいつぱいだった。ジハイル王子にいたっては、眼光で貴族どもを焼き殺す勢いだろう。だが凛々しい兄の姿を見せつけている優越がそれをまだ押し留めている。そんなところだ。

メンデルス国王と第二王子の紹介が終わると、乾杯を合図に、予想通りフェルダへの踊りの誘いがドツと押し寄せた。

21（後書き）

いつも読んでいただき本当にありがとうございます！

食卓を囲んで祈りを終えると、パペット、ケビン、エリイの三人は閉じていた目を開けた。一般家庭ではこうして夕食前に収穫祈願をすることが収穫祭の日の恒例となっている。今年も無事家族で食卓を囲むことが出来た。

楽しいいつもの団だんらん。パペット爺さんのもう何度も聞かされている昔話から始まり、ケビンがちょっぴり不機嫌そうな横槍を入れて、私が笑う。いつもの風景。これが今の私の家族。

私もケビンも海で漂流してここに辿り着いた。正確には連れてこられた、と言った方が正しいけれど。

私達の第二とも言える人生の再出発がパペット家で本当に良かったと思う。ケビンは口になぞ出さないけれど、ここでの暮らしが好きなのだと見ていて分かる。

幸せな暮らし。

それが終わるかもしれないなんて、この9年、考えなかったわけじゃない。ただどここの暮らしの居心地の良さに、もうここが故郷としてしか考えられなくなってきたこともまた事実。

でも。

もし、私の帰りを今でもまだ待っていてくれる人がいたとしたら。

9年は長い。私の9年は楽しいものだったからあつという間だった

けれど、待っている人達にとってはきつと、途方もない長さの時間だったことだろう。

私が待つてもらえるような人間だとは思えないけれど、本当の親や家族、そしてもしかしたら恋人……。旦那様……。誰か一人でもずつと私の帰りを待っていてくれるのなら。

私は……。

「エリイ、どうした？」

ケビンに呼ばれてエリイはハッと顔を上げた。いつの間にか夕食は終わって自分の部屋に戻っていた。相当思いつめて考え込んでいたらしい、料理の味も覚えていない、皆の話も全然聞こえていなかった。いつケビンが部屋に入ってきたのかもまったく気が付いていなかったから、突然声がした時は驚いた。

驚いた拍子に記憶の1つでも戻ってくれたらいいのに。

「すまない、ノックはしたんだが返事がなかったから」

「あつ、ううん、私の方こそごめんなさい、ちよつとボーっとしてたみたい。お腹いっぱい眠たくなっちゃったのかも。ふふ」

エリイは笑顔を作った。だがケビンは眉を寄せる。

「飯にほとんど手をつけなかったのに腹がいっぱい？ 噓は良くないな、エリイ」

「え……」

そうだったのか。食事を残していたことも覚えていなかった。

「体調が悪いのか？それとも、何か心配事？」

「ううん、私、元気いっぱいよ。本当に大丈夫だから」

ケビンの手がエリイの頬を包む。思わず心臓がドクンと鳴った。

「あのな……。俺達を気遣って何でもないフリをするのも君の良いところだけど、昼間、少し目が腫れてたのはオレもじいさんも知っているんだ。何故泣いてた？」

「え、えつと、あれはね……」

エリイは笑おうとしたが、うまく笑えなかった。余計な心配をかけてしまっていたことにも気付かなかったなんて。今日は本当にどうかしている。

「もしかして、何か思い出したのか？」

エリイは俯いてベッドへ腰掛けた。隣にケビンも腰をかける。膝に頼りなく置いた手をケビンがそつと重ねた。

「思い出せない……何も」

ケビンは上を向く。

「そうか……」

「だけど」

声が震える。

「考えていたの。……もし、記憶が戻ったら……」

「帰るのか？」

「え」

ケ빈は立ち上がり、心地よい風が入ってくる窓辺にもたれかかって外を見つめた。よく晴れていて空に無数の星が輝いている。

「俺は自ら過去の自分を捨てて今の人生を生きている。だが君は失わなくていい本当の人生がある。言わばこの暮らしは仮住まいのようなものだ」

「そんな……」

「君はいつか本当の君へ戻らなければならぬ」

「私……ここに居てはいけないの？」

「そうは言っていない。戻りたくない人生だったのなら、ずっとここで暮らせばいいさ。今の俺のように」

「ケ빈……」

いつもケ빈は自分の生を蔑ろにするように笑って言う。ケ빈が

今でも愛しているあの人がケビンを受け止めていてくれたら、この人はきつととても素敵な笑顔を見せただろう。

私では彼の救いになってあげることができない。彼のこの笑みを見るといつもそう痛感させられる。

「俺の過去……知りたいだろ？」

「それは……でも知ったところで私は、ケビンはケビンだと思ってるから」

「そう。例えば俺がどこかの国の王子だったとしても、実の姉を愛した大馬鹿野郎でも、今の人生から戻るつもりはない」

「え……？」

王子？

「だが君は違う。望んで人生を捨ててきたわけじゃない。君が誰かのものだった。その相手がもし君を大事に想っていて、今でもずっと君を忘れられない、君の帰りをずっと待っているとしたら」

「ケビン……！」

「帰りたいだろう？ 本当の人生に。 会いたいの？ そいつに」

立ち上がったエリイの腕をケビンは掴んで強く引き寄せた。体勢を崩したエリイはケビンの胸の中に倒れ込んだ。

「帰っていいんだ、エリイ」

言葉とは裏腹に、ケ빈は耳元で低く艶やかな声を響かせてくる。彼の腕がエリイの体を強く抱きしめる。だがエリイはそれに初めて抵抗を感じて身を固めた。

罪悪感。

この人を癒してあげられる人間になろうと決めたのに。今、無意識の内に体が微かな拒否反応を示してしまった。

ケ빈は勘が鋭い。もしかしたら気付いたかもしれない。エリイは泣き出したい衝動を抑え、今度は笑顔に向けた。

「ごめんなさい、ケ빈。私、今日は本当にどうかしてたわ。たくさん寝て美味しい食べ物の夢でも見れば明日にはコロっと忘れちゃう。ふふ」

「エリイ、独りで抱え込もうとするな。心配はいらない。今は俺が傍にいる」

ケ빈が唇を重ね、エリイは目を閉じた。彼は今誰に口付けをしているのだろう。

分かってる。彼はいつでもどんな時でも、愛するあの人を想って私を見ている。それでいい。

「船を出そうかと思ったが……。エリイ、今日はここで君を抱くよ」
パペット爺さんにはこの関係を内緒にしている。ずっと船を沖に出して、その船上でケ빈はエリイを抱いていた。

正直今はもう休みたかった。でもケ빈は私を……彼女を欲している。拒んだらきっと悲しい顔をする。それは見たくなかった。

しかしそれとは別の理由で、ここで彼に抱かれるのは少し抵抗があった。

「あの……でもね、ケ빈。ここではちょっと……」

「そうだな」

エリイはホッと安堵の息を吐いた。でも何故だろう。ケ빈はやめるような顔をしていない。

「別にいいさ。ばれても」

「まあ！」

「ちょっとじいさんに言ってくるよ。今からエリイを抱いてくるから声が聞こえても気にするなってね」

「待つ、待ってケ빈！ダメよ！絶対ダメ！」

本気で部屋を出ようとしたケ빈の背中を必死に抱き留める。頭上から苦笑する声が聞こえ、エリイは顔を上げた。

「ああ可笑しい。冗談に決まってるだろう？そんなことになったらじいさんに摘み出されるさ。俺だけな」

「ケ、ケ빈……貴方……」

空気が抜けてゆく風船のように、エリイはへなへなと床に座り込んだ。心臓がばくばくと鳴っている。冗談で本当に良かった。

「いつものエリイに戻った、かな？」

ケビンもしゃがみ込んで、エリイの頭をよしよしと撫でて微笑んだ。

「もう……本当にびっくりしたんだから」

「分かってる。加減するよ。だから声を出さずか出さないかはエリイの頑張り次第」

「が……っ、頑張るっ……ものっ」

「それは楽しみだね。さ、立って。ベッドに横になるんだ。エリイは最近重いから抱き上げるのも一苦労だね」

「ひどいわ、ケビン……」

とても恥ずかしい気分で火を噴きそうだが、いそいそとベッドに身を横たえた。ケビンもシャツを脱いで、エリイの体を挟むように膝をついた。分かっている。ケビンは元気づけようとたくさん意地悪を言ってくれてる。優しいケビン。……重たいのは本当かもしれない。

だからちゃんと私も彼のためにできることをしなければ。

そう思うのに、自分を抱いた過去の誰かのことが頭から離れない。

ごめんなさい。

それは誰に向けての謝罪なのか。それでも何故か罪悪感のようなものが胸を突く。

私…… やっぱり自分が誰なのか知りたい。だけど、この人の前でそれを口にすることはできない。

ケビンの唇がエリイの首筋をなぞって下りてゆく。エリイの肩紐を指にかけ、腕に落とす。

エリイがほんの少し体を浮かせると、ケビンはすりとエリイの服を腰まで下げた。白く柔らかそうな胸が露あらわになり、エリイは恥ずかしそうに目を瞑った。

今から私はあの人の代わり。

うつん、ケビンのため。これは私が望んでしていること。

だけどこめんなさいケビン。

過去の私を知ってる誰かのことが、もう私の心から離れて消えなくなってしまった。

22（後書き）

いつも読んで頂き本当にありがとうございます！

国の一大イベントが終わった翌日の朝は、閑散とした空気の漂いに寂しさを感じずにはいられない。

と毎年思うエリイだったが、花売りのための花を摘みに花畑へ行く途中で通る村の中心部に差し掛かった時、よく聞き慣れた声がその閑散を打ち消した。

「エリイ……!!」

やや霞みがかった朝靄あさもやの向こうから猪突猛進の勢いで駆け込んでくるのは、仲の良い村娘のニーナだ。笑顔がとても素敵で、いつもエリイは元気をもらっている。さては、収穫祭での土産話かな、とエリイはくすりと笑った。

私はと言うと、体にちよつと倦怠感が残っている。ケ빈は加減とかなんとか言っていたけれど、結局いつもと何が違ったのか、容赦がなくて声を押し殺すのが大変だった。夜中に喉が渴いびきいて水を飲みに降りたら、パペット爺さんは大きな鼾いびきを掻いて深く眠っていたから多分、上であんなことをしていたことはバレていないと思う。朝もいつも通りだったからきつと大丈夫だろう。

ちなみにケ빈はというと、いつものすまし顔で、何事もないように漁に出かけて行ってしまった。演技なのか、それが地なのか、ちよつぱり複雑である。

そんなことを回想している内に、ニーナが加速を緩めないままエリイに正面衝突して、そのまま体をぎゅうっと抱きしめた。その力強

さだけでもうお腹一杯になりそうだ。エリイも友人の喜びを自分のことのように喜んで微笑んだ。

「おはよう、ニーナ。その様子だと、昨日はとても充実できたようね」

「それどころじゃないわよエリイ！大変なの！！」

「えっ？」

あれ、とエリイは首を傾げる。大変、と言っている割にその顔は確実に昨日の収穫祭での喜びが満面に出ているというのに、どうやらそれに加えてその大変な事とやらも混ざっているらしい。

嬉しそうな顔で大変、という言葉はとても不釣合いのような気もするが、とりあえずエリイ自身は平静を保ったままニーナに尋ねた。

「どうしたの？」

「まあエリイ！そうやって一人だけ落ち着いていられるのも今の内よ！貴女、聞いたら絶対驚くわ！」

ニーナのもはや嬉しさと企みと驚きが融合したような顔にすでに驚きつつあるエリイは、思わずつられてゴクリと息を呑んだ。

まさかいよいよニーナは結婚するなんて言い出すのではなからうか。

ニーナはとても気さくに話しかけてくれる村娘の一人で、同じ歳頃とは言え、エリイの方が少し年上だ。本当の年齢が分からないため、正確にいくつ離れていると言えない。少しどころではないことを願

うが、ニーナは今年19歳。一般的に女性が結婚をする歳は16だが、ニーナは面食いらしく、いつも絶賛格好良い男性募集だと言っていた。

ニーナがエリイの耳元に顔を寄せた。エリイも聞き逃すまいと全神経を耳に集める。

「実はね……………」

溜めが長い。エリイの心臓も先ほどから右上がりに大きな音を鳴らしている。

途端にニーナは耳元から離れ、エリイの両手を握り締めて向かい合った。とても間近に。

「王様が来てるのよエリイ!!!!!!」

一瞬静寂が走った。

「ええっ!!」

反応が遅れてしまったが、エリイもとりあえず本当に驚いて声を上げた。細かいことは今から尋ねるとして、まずどこに來たのだろう、という疑問がぽつと気泡のように湧いた。

「ま、まあ……っ、どうしましょう。それで、ニーナ、どちらに王様がお見えになっているの?」

「何言ってるのエリイったら！ここよ、ここ！！」

再び一瞬の静寂。これはエリイが頭で結論を出すための時間だ。

ここ。

ここ？

「あつ」

ようやく理解できた。ここでここと言えば、あそこしかない。

「王様の別邸につ？」

言葉尻が弾んでいる。自分とは縁えんも縁ゆかりも無い住む世界の違う雲の上のような人、王様がこの村の別邸（正しくは別荘らしいが、庶民から見れば別荘とは言えないほどの広さの豪邸だ）に來ているとなれば、庶民の自分は弥いが上にも興奮を覚えるというものだろう。

王様の別邸。

このショパー二国には各地区に一箇所はあると言ってもいい王族所有の別荘がある。

それはこの比較的田舎寄りのマズイル地区も例外ではなく、この村を内陸方向に進んだ山の中腹に、山を切り開いて作られた広大な邸宅がある。それがショパー二国王の別荘だ。

エリイは勿論行ったことはない。

何しろ邸宅に向かうための山道は一本道で、その麓には部外者が入らないよう警備兵が道を挟んで立っているからだ。と言っても、一生縁の無い王族の別荘に用がある筈などないのだから、誰が何人どこにいようとエリイの生活には何の支障も無い。よって、行く必要もない。

ところがニーナがとんでもないことを言い出した。

「ねっ、エリイ、ちょっと見に行っちゃおうよ！」

「ええっ！？だってニーナ貴女、昨日収穫祭で見てきたばかりですよっ？」

それに、ショパー二国王は数年前にニーナと一緒に行った収穫祭の時に遠目で見したが、大柄であごひげの立派な50代くらいのお方だった。改めて見に行きたいと思うには少しばかり気持ちの高鳴りが足りない。

そう言うところエリイも面食いなのかと誤解を招いてしまいそうだが、毎日身近でケビンと接していれば、エリイの好みの基準が常識を超えてしまうのも仕方無いことだ。ケビンは村の娘達にとっても人気がある。もう40だとエリイが苦笑して何度も言うのだが、たしかに年齢と見た目がかなり食い違っている。

そんな人気者と自分がまさかただの家族関係でないとは、口が裂けても言えない。

「勿論見たわよう。細身に見えるようで遅しい体つき。白金の柔らかそうな髪。彼のワインを飲む仕草なんて今思い出しても失神しちゃういそう……。私、頑張って結構前の方で見たのよ。そして思い切

つてあのお方の名前を叫んだの。そうしたら！あの方がこっちを見たのよう！涼しげな微笑みで私を見返してくれたの！！きゃああ……」

「あの、ニーナ……？」

エリイはニーナの話の聞いているうちに、あれ、と首を傾げた。

数年前見た国王様の姿と、ニーナが今話している王様の姿が全く一致しない。

「ああん、村までお忍びで降りていらっしやらないかしら……そして私を迎えにくるの。おお、貴女はあの時私の名を呼んでくれた」

「ニーナ」

「はい、王様……」

「ニーナったら！」

「もう。せっかく楽しい気持ちになっていたのだからちょっとは乗ってよね、エリイ！」

「ニーナ、別邸にいらしたのは国王様なのよね？」

「そうだってさっきから言ってるじゃない。うふふ」

「シヨパーニ、国王様、でしょう？」

今日三度目の静寂が二人の間に訪れた。

しばし待って、沈黙を破ったのはニーナだった。

「ちょ……っ、エリイ貴女！うわっ、もう貴女！一体何を聞いていたの！？シヨパーニですって！？あんな」

その続きは仮にもシヨパーニ国民として聞いてはいけない語録が連々と並べられたので、聞かなかったことにした。

だが、最後にニーナが口にした言葉だけはエリイの胸を打った。

「別邸に来てるのは、メンデルス国のフェルダ王よ！！」

23 (後書き)

お気に入り登録、アクセス、そしていつも読んで頂きありがとうございます！

結局いつものように熱烈なお誘いを丁重にお断りして、一応やめておいた方が良くと言ってはみたが、ニーナはエリイの心配を右から左に流して風のように颯爽と走り去っていった。

一緒にメンデルス国王を見に行こう、と簡単に言っていたが、そもそも王族など先日のような祭りや年に数回ある式典などでもない限り、平民がそう易々と拝められる人物ではない。

さらに付け加えるなら、シヨパー二国王の別邸は山の上にあり、その唯一の入り口である麓の門には当然厳戒態勢の門番がいる。おそらく来賓扱いだろうから、警備もさらに強化されているはずだ。

そんなところへ野次馬のように見学に行けば、不審な目に見られることは間違いない。それが一番心配でやめた方が良くと言ったのだが。

それでも、あんなに嬉しそうな顔をしていたのだから、一目でも見ることができればいいなと思いつながら、エリイは微笑むと、ふと空を見上げた。

メンデルス国。この空の先にある国。

その国はケビンにとって心を苦しくさせる何かがある。ニーナの誘いを受け入れられなかったのは、花を摘みに行く理由の他に、そのことがエリイを躊躇させた。

エリイは過去の記憶がない。しかしメンデルス国は良い国だとやっ

ぱり何故か断言できる。以前一度そう思った時よりもたしかに。

記憶を取り戻し始めている。

胸がざわついた。濁った雲のようなどんよりとしたものが胸の中に広がってゆく。

「エリイ」

心臓が飛び出そうなほど驚いて振り返った。

「まあ！ケビン！」

漁に出たはずのケビンが、来た道の方角から歩いてきた。彼を見つけた女性達がほんのり頬を染める。パン屋のおばさんがケビンを見つけると、サービスだよとパンをあげた。ケビンはぺこりと礼をすると、エリイを見て困ったように笑った。

「雨？」

雨が降るらしいと言ったケビンはエリイに頷いた。

「漁に出ようと船で準備をしていたんだ。そうしたら、ボエがね」

ボエという言葉聞いてエリイはなるほど、と相槌を打つ。ボエが教えてくれる天気予報は百発百中で、漁に出る時にはとてもありがたい。

「ところで、まだこんなところにいたのかい？てつきり花畑にいるかと思って急ぎ足で来たんだが。エリイ、傘を持っていらないだろう？帰る頃には降り始めるぞ」

「ありがとう、それで知らせに来てくれたのね。それじゃあ急いで行ってこなくちゃ。あつ、あとニーナにも教えに行かなくちゃ」

「ニーナ？」

「ええ、私のお友達。ほら、前さつまいもをたくさんくれた」

「ああ、あの娘」

ニーナの家は農業が中心で、主に根菜類を生産している。

「ニーナ、さっきショパー二国王様の別邸へ行ってしまったの……あつ」

余計なことを口走ってしまった。

「別邸？何故またそんなところへ行っただ？」

「あつ、うつん、何か用だったのかな？。とにかくつ、雨が降る前には戻ってくるわっ」

「待つて。別邸と花畑は反対方向だ。あの娘には俺が伝えに行くよ」

「でもっ」

ケ빈は心を痛めないだろうか。ニーナはきつと話してしまう。今あの別邸にいるのがこの国の王様かを。

「エリイが濡れてしまったら元も子もない。じゃ、早く終わらせて戻ってくるんだぞ」

「ケ빈…」

行ってしまった。止めようと思えば幾らでも理由はつけられた。それなのに。

「ダメね、私」

自分に向けられたケ빈の瞳が心配したのは私ではない。もうそんな風にしか思えなくなった自分を酷く恥じながら、エリイは山道を歩き始めた。

去り際に手渡されたまだ温かいパンだけが、エリイの心を慰めてくれるように優しく温めた。

空は澄み切った青だが、少し風が強めに吹いていた。

誰が見ても雨など降るはずもないと口にするだろう。だがエリイはこの澄んだ空を見上げながら、急いで摘んで帰ろうと頷いた。ボエの天気予報は必ず当たる。

見上げていた顔を眼前に向けると、山間に広がる一面の花畑があった。ビビオリオンの花畑と呼ばれる場所だ。

その昔、ここは地獄に繋がる底なしの毒の沼が広がっていた。しかしそこに住むビビオリオンという魔人が、愛した人間に花を贈るために沼を年中咲き止まぬ花畑に変えた。

エリイはこの伝説が大好きだった。魔人にとっては毒の瘴気は生きるために必要な存在だ。人間にとってはの空気に値する。それを何の躊躇いもなく愛する人のために消してしまう。

魔人ビビオリオンにとっての空気そのものである毒の瘴気が無くなったことにより、彼は消滅してゆく。

だが消えゆく体で最後の力を振り絞り、一輪の花を摘んだビビオリオンは一匹の白い獣にそれを託し、この世から消えた。

伝説はここで終わる。

だが、語られぬその後は、白い獣は花をビビオリオンの愛した人間の元へ無事贈り届けたと信じたい。

切ないけれど素敵な伝説。

ビビオリオンがその白い獣に花を手渡した場所。

エリイは思わず持っていたバスケットを落とした。

まさにその場所に、ふんわりとした真っ白な羽毛で覆われた大きな鳥が花畑に埋もれるように腰を下ろしていた。

「伝令鳥……」

その姿を見たのは記憶にある中では二度目になる。

一度目はそう。

あの手紙を受け取った時。

あの時の伝令鳥ピッピは成鳥だった。茶色の毛が雄雄しく全身を覆い、空を優雅に駆け抜ける。

そして今日に映る真っ白のピッピはその幼鳥だ。ピッピは花畑で羽を休める習性がある。

それはもしかすると、ここの伝説の白い獣がピッピの幼鳥そのものだったのかもしれない。

だから由来も伝令鳥となり

「でも、ピッピはメンデルスにしか存在しない鳥だから」

まただ。

またメンデルスにまつわる知識を口走った。ここはシヨパー二国。ピッピの存在はおろか、この鳥が「伝令鳥」と呼ばれていることはシヨパー二国民は知らない知識だ。現にあの手紙を持って現れた時、一緒にいたケ빈はこの鳥を知らなかった。

「私は…もしかして……」

メンデルス国の住民だったのでは

花畑の海に足を踏み入れる。膝まである草花は少し強めの風に押されるように靡^{なび}いている。

白いピッピの近くまで歩み寄ったところでエリイは歩みを止めた。

一人の少年がいた。

ピッピのふわふわした羽毛に背中を預けて心地よさそうに眠っている金髪の少年。歳頃はまだ10にも満たないだろう幼い顔立ち。だが、身に纏っている服はどこから見ても貴族の人達の召し物。それに、何故だろう。眠っているにも関わらず、彼から高貴なオーラが漂っている。

少年は深い眠りにについているようだった。まるで疲れ果てた体を休めているような眠り。

ピッピだけがじっとこちらを見つめていた。

ピッピは嗅覚が鋭い。おそらくエリイがこの地に足を踏み入れる前にはすでに彼女の存在に気付き窺っていた。こちらを見てはいるが、攻撃意識はない様子だった。

「起こしては可哀想ね。ピッピ、時機に雨が降るから、その前にこの子を連れて帰ってあげてね」

ギヤオ、と小さく控えめに鳴いたこのピッピもおそらく少年を眠りから覚ましたくないのだろう。気遣いのできる優しいコだ。

「そうだね、貴方に雨避けを巻いてあげる」

エリイは肩にかけていた羽織を外して頭を下げたピッピの頭にふんわりと被せて飛ばないように結んだ。

「ふふっ、可愛い」

真っ白な体に頭の上だけピンク色になったピッピに微笑むと、エリイは簡単な花飾りを作って少年の膝に乗せ、花売り用の花を摘むと、登ってきた山道を再び下って行った。

遠くの空で微かに雷鳴が音をたてた。

24（後書き）

アクセスいただき本当に感謝します。

魔人ビビオリオンの伝説。

ロマンチックに書き起こしていただける方を大募集（笑）

折れた刃が回転しながら空高く打ち上がり弧を描いて大地へ降下すると、その切っ先がどすりと地面に深々と突き刺さった。

「はい、勝負はつきましたね。貴方の負けです」

容赦のない言葉を突きつけられた巨漢の男は何も発せられないまま仰向けに崩れ落ちた。

フェルダの側近シェンは軽装用の細身の剣を鞘に収めると、辺りを見回した。さっきまでいた数十人の人だかりは、今倒れた男を除いてすでにきれいに片付けられていた。その最後の一人だったこの男もまた、シヨパー二兵によって運ばれていった。行く先は医療施設のある地区。

まったく人気者というのは時にやっかいである。

無論、人気者はこのシェンではない。そして人気者は等しく羨望対象でもない。それが1000人斬りの貴公子であれば尚更だ。

メンデルス国の王フェルダ様がシヨパー二国で行われた収穫祭の後、マズイル地区の王族専用別荘地にて宿をとるという噂が一体どこで漏れたのか、いや、王ほどの有名な名の持ち主の行動など、彼に執着している者共ならば王が城を後にするところからずっと後をつけてくることぐらい想像はつく。

そんな輩は悲しいかな華やかな貴婦人達ではなく、自分の力を持て

余し試そうと奮起する屈強な男共である。

昨夜はさすがに夜という大抵の人間が眠りにつく時間というだけあって、騒ぎもなく、静かな夜を過ごせたものだった。

しかし日が昇り始めると、一体どこから人が湧いてきたのかと思うほどわらわらと別荘の入り口である山の麓へ巨漢達が群がってきた。

ここはシヨパー二国。この国で起きる騒動はその国の兵によって片がつけられるのが通常であるが、シヨパー二国は元々農業漁業林業国家。軍勢力は世界五大国では最も低い。よって兵（しかもここで別荘の入り口を守る門番兵だ）もフェルダ王に挑もうとする、無謀なれど、挑むからにはそれ相応の力のある男共を言いくるめるにはかなり頼りない。

困り果てた門兵は、フェルダ王に挑むべく押し寄せた男共をどうにか黙らせてもらおうよう泣きついてきたわけだ。

しかしフェルダ王が彼らの相手をするとはなかった。

何故なら王は今、そんじょそこの物音では起きないほどの眠りについておられるからだ。王はすぐに無茶をするので、ちょっぴり私特性の安心安眠薬を含ませていただいたが。

そんなわけで、代わりに私が門まで出向いたのだが、差しの勝負の相手が私でもうにも不服だと言わんばかりに暴言を吐いてくるので、めったに怒ったりしない穏やかで平和を好む私は、巨漢共がもうフェルダ王の周りをウロチョロしない程度の優しさを込めて打ちのめしてやり、今、最後の男がシヨパー二兵によって運ばれていった、というわけである。

まったく。私を倒せないようでは我が王に勝とうなどおこがましいにも程があるというものだ。

茂みの中にひよこが一匹ずっとこちらを窺っているが、彼女^{彼女}はただの野次馬……野次ひよこなのでわざわざこちらから声をかけることもあるまい。

しかし門兵がひよこの気配に気付けないとは、もし今が大昔のような世界大戦の頃であつたなら、この国が一番早く落とされることだろう。そういえば、内乱の要請もこの国が一番多い。それらは我が王や私、まして隊長格が出向くまでもない小規模内乱ばかりだが、内乱、と聞けば、またシヨパー二国か？と頭に浮かんでしまうのが現状だ。

寧ろ、この程度の輩であれば、ジハイル王子に剣の練習がてら相手をさせるのが良い経験となるのだが。

ちなみに王子はそこで私の剣技に呆然と口を開けて突っ立っている門番兵など簡単に伸してしまう実力はある。7歳にして、そこは前メンデルス国王クロウド様のお血を引きし王子。剣のセンスは抜群である。

7歳の頃のフェルダ王もまた、まだ戦に出ていないジハイル王子とは違った意味で剣の才に秀でておられた。その力の源は言うまでもなく、彼^かのお方なのであるが……。

そう思えば、何も守るものがないジハイル王子の方が将来が未恐ろしい気もしないではない。……いや、ジハイル王子も兄であるフェルダ様を想い、王の強さに憧れ、認められようと努力していること

は知っている。

結局は似た者同士、つまりは「やはり血は争えぬ」という一言に尽きるのだろうか。

それにしても、そのジハイル王子であるが、今朝からまったく姿が見当たらない。彼の言うことしか聞かない小憎らしい（もっぱら顔のことであるが）伝令鳥ピッピの幼鳥は、王子が呼ばない限り姿を現さないで、いなくても不思議ではないが、王子がいなくなると、一緒に連れ立って行った可能性が高い。

というより、その可能性しかありえないというべきか。

ジハイル王子は何とか敬愛する兄フェルダ様の力になりたいと躍起になっておられる。

昨日の収穫祭、そして舞踏晩餐会でもあつという間に私の目の届かないところへ消えて行った。私はあいにくフェルダ王の元を離れられないので、しっかりと私の部下をこっそりつけておいた。

だが、ピッピで移動となると、たとえ隠密部隊の我が部下でも手足がでない。ピッピの速度はメンデルス国で最速を誇る。どんなに超越した脚力を持った人間が挑んだとしても、ピッピの速さについてゆける者などいない。

一応昨晚も見張らせておいた部下は、不覚であります……と天井裏で嘆いていた。仕方がないことだ。

本当に、張り切ってくれるのは良いが、気力と子供の体力がいつで

も同等であるとは限らないと教えておかねばなるまいか。第二とは言え、一応誇り高きメンデルス国の王子である以上、どこかで居眠りでもしていなければ良いが。

「まったく。朝ご飯を抜いては大きくなりませんよ、王子」

それにしても……。

今回も、と言う言い方は不本意ではあるが、やはり想定していた通りの結果だった。

エレナ様の行方は掴めず。

確実にエレナ様の消息がつかめないと判断した我が王は、来賓としての務めを最低限果たし、早々に晚餐会を切り上げ馬車に乗り込まれると、そこで意識を飛ばされ、翌朝となった今も深い眠りについたままだ。

可哀想に、王の心労はいかほどだったことが。

王の退席を惜しむ声は尋常ではない数だった。その大半が貴族の婦人だ。その誰もが皆、今宵のフェルダ王の相手になることだけに目を光らせ、会場は女達の戦場となる。ああいうおぞましい光景を目の当たりにすると、エレナ王女の清らかな微笑みと比べざるを得ない心境に陥る。彼女はまさにその場を温かな雰囲気に変える春の陽光だった。残念ながらメンデルスの社交場でも品のない娘達はいり。しかしその場に彼女が現れれば、まさに殺伐とした会場が華やぎに変わる。

不思議なお方だった。

今でも鮮明に思い出せるエレナ様のお姿。誰もが目を奪われる輝きと儚さを秘めた聖母たる様相。

どの国でも王女の情報は得られなかった。それは今回も例外はなく、だから彼女を探しあてた時のことを考えると正直言つて怖い。

音沙汰のない9年という月日が一体何を示すか。王を悲しませるには充分の想像が幾通りも思い浮かんでしまう。そんな私は冷酷だろうか。

門番がざわめいて私は顔を上げた。また誰かやってきたぞ、と門番が小さな声で苦言を漏らし、私は彼らの視線の先を辿った。

山道を一人の男がこちらへ向かって歩いてくるのが見える。この山道は一本道で、シヨパー二王の別荘へ続く専用の私道。

剣はおるか、武器の類も身につけていないようだ。服装も今から王に挑もうという出で立ちではなく、ごく普通のシャツにズボンの平民服である。どうみても戦士には見えない。

この別荘の使用人か何かだろう。それとも素手で戦う達人などであつたら、私は見る目がないというものだ。まあそれは茂みのひよこが暗殺者である可能性と同じぐらいありえないだろう。

ついに辿り着いた男がちらりと私を窺ったが、すぐに門兵の下へ近づいた。何故か私は彼の行動を目で追った。

金髪の、私と同じような歳頃の、男。

「失礼、こちらに女の子が一人来」

茂みから熊が出そうな勢いでざわめいた。だが私は彼から目が離せなかった。

その茂みからまさに熊のごとく飛び出したのは、あのひよこだった。

「あーっ！ケビンさん待ってー！！私も！私も入るー！！！！」

ケビン

驚くことはない、この世界にその名前の男が一体何人いる。

それなのにこの胸のざわめきはなんだ。

ひよこが今山道を登ってきた男に走りよって何か叫んでいる。

だが私は彼女の声などまったく耳に入らない。

この警戒心。

なんだ。

本当にこの男が武器を持たない格闘戦士だと言っのか。それも私を警戒させるほどの。

いいや違う。

彼は、この男は戦士ではない。

シエンはふと怪訝に目を細めた。

茂みから現れた娘がこの男に何かを言った途端、男の気配が、空気が変わった。

「ここに……、メンデルスの……王……が……」

男の静寂に私の全身が粟立つ。

知っている。

この気配。

私はこの気配を遥か昔に味わっている。

思い出せ。

思い出していいのか。本当に。

何故なら彼は。

あの男は。

「ケビン……殿……なのか……？」

金の髪の男が私を見る。その瞬間、私の中に詰まっていた暗雲が一気に吹き出されるように気分が悪くなった。

「まさか……！ そんな……！ 在りうる筈がない……！」

男の表情も怪訝に変わり首を小さく捻る。

「あんた……この俺を知る者か？」

昔から記憶力が良いことは私の密やかな自慢であった。

しかし今だけは、そんな能力を酷く嫌悪した。

あの男は

バハン国の次期王となる筈だった男。

我がメンデルス前国王の妃、エレノア様の弟君。

彼は

25年前、この世から去った。

シェンの頭上に雨粒がぼたりと落ちた。

今朝は疑いようもない晴天だったのに。遠くで雷も鳴り始めた。

茂みのひよこ娘はいつの間にか山を下りていた。

王に挑もうという命知らずももう誰もやって来ない。

私が自分を取り戻した時、すでに雨脚が体中に降り落ちていた。

それほどの長い時間、我らは向かい合って佇んでいた。

「私……幽霊の存在は認めていないのですがね」

そう言った私に、男は苦笑する。

「同感だよ。俺も信じていない」

「できれば、貴方の存在も信じたくありませんけど」

「酷いな。俺はあんたに何かしたかな？見覚えのない顔だが。だが俺を知ってるとはちよつと驚いたよ。俺が幽霊になって何年経っていると思ってるんだ？」

「25年です。貴方：何しに来たんですか」

「雨が降ることをさっきの娘に知らせにね。俺もすぐ帰るつもりだったんだが」

男は別荘の方角へ顔を上げた。

「ちょっと寄り道したくなったかな」

「雨宿りなら無駄ですよ。もう貴方はずぶ濡れです」

「姉上……いや、エレノア王妃は息災かい？」

「ケビン殿……」

貴方は幸運の持ち主なのでしょう。

愛する人と共に歩めなかった貴方をそれでも幸運と言ったのは

もし今ここにるのが私ではなく、金龍王クラウド様だったら

貴方は真に幽霊となってしまうていたでしょうから

25（後書き）

いつも読んでいただき本当にありがとうございます！

「なるほどな、あの時あんたもあの場に居たのか。ならば俺を知っているとは思議ではないな」

ケビンは渡されたタオルを頭から深く被った。隠れて見えなくなつた顔の下からは微かな苦笑が零れている。

「ケビン殿は随分雰囲気が変わられたように思います。私の記憶している貴方は透き通るような白い肌でした」

「毎日太陽と潮風を浴びているんでね。すっかり頑丈になってしまったよ」

ケビンはそのまま濡れたシャツを脱いで、タオルと一緒に渡されていたシャツを羽織った。いつもケビンが着ている平民服の粗い目の布地ではなく、明かりに反射すると布地に艶が出、摩擦も少ない滑らか素材の貴族の平服だ。

シエンはそれに袖を通したケビンを横目で見ると、視線を外し、再び紅茶を入れ始めた。

「ですが25年経つてもやはり貴方は生まれながらの王族です。貴方にはそういう服がお似合いです」

「漁には向かない服だ」

「そこにお掛け下さい。今紅茶を入れました」

「聞かないのか？何故死んだはずの人間がこうしてこの世にのうと生きているのか」

「そうですね。断崖から身を投じた貴方がひょっこり現れれば、さしもの私も柄にもなく驚いたほどですから」

しとしとした雨が降り続いている。ジハイル王子が早く帰って来てくれないものかとシエンは小さなため息をついた。帰ってきたらお説教と温かいミルクが彼を待っている。

「飛び込んださ。だが世の中つてのは思い通りにはいなくてね。奇跡なんて俺には必要なかったのにな」

ケ빈はタオルを肩に落とすと、背をソファに預け、慣れた手つきでカップを持ち上げ、湯気の立つ紅茶の香りを愉しんだ。彼はとても25年王族から離れていた人間とは思えないほど自然に振舞った。どんなに年月が流れても、やはり彼は生粋の王族なのだ。

シエンは向かいのソファには腰掛けず、ケ빈の後ろにある窓際の壁にもたれかかり、腕を組んで外を向いた。どうにもおちび王子のことが気がかりでならない。

「しかしやはり時は流れていたんだな。金龍王がすでに退冠していたとは……。フェルダ、と言ったかな？俺の甥は」

「ええそうですね。貴方はフェルダ王の叔父になります」

「どちらに似ているんだ？」

「そうですね……王の資質はクラウド様から見事に引き継がれてお

いですが、ふとした雰囲気などは……エレノア様でしょう」

そして誰かを想う執拗な愛の深さは貴方に。

「…………エレノア…姉上は……幸せでいるのか？」

「……少なくとも、クラウド様はエレノア様お一人をずっと愛されておいでです。お子も3人と恵まれました」

「ふん……その一人が今ここにいる現メンデルスの国王が」

「はい、フェルダ王の名を知らぬ者はいないと思いましたが」

「生憎俺の家族は皆知らないぜ」

シエンは今のケビンの言葉にやや興味を示した。

「家族がいるのですか？」

ケビンは鼻で笑った。

「あの頃の俺を知ってるあんたなら、俺のようなクズ野郎に家族がいることがちゃんちゃらおかしいと思うのだろう？」

「否定はしません」

「こんな俺でも誰かを守ることを許されてね」

ケビンの持っていたカップがカチャリと音を立てた。

「だが、俺の心だけは今もこの先もあの人のものだ。それだけは俺が今度こそ死を迎える時が来ようとも、絶対に変わらない……！」

「ケビン殿……」

なんと不憫な男だろう。シェンは鬼気迫るような目つきに豹変したケビンを哀れに思う他無かった。

25年前のあの日から今でもまだ、彼の心は姉であるエレノア様の存在に囚われ続けている。

まるで呪いに侵されたようにいつまでも解けることなく。

しかし例えクラウド様がエレノア様より先にこの世から去ったとしても、彼女の心がこの男に向くことはないと言断言できる。それはエレノア様がクラウド様を深く愛しておられるからだ。

そして、エレノア様にとってケビン殿は「弟」でしかない。

「バハン国……貴方の国には帰らないのですか？」

ケビンは鼻白んで笑う。

「今更死んだ人間が現れても国が乱れるだけさ。俺はもうあの国の王子……いや、あの国の人間じゃない。生まれ育った年月より、ここで暮らした年月の長さが俺の故郷はここだと告げている。それに……ここは居心地がいい……」

ケビンはふと目を細めて笑った。受け皿に乗せていたカップを持ち上げる。

「私は貴方がどの道を選ばれようと何も口出しする気はありませんが、世間からわざと目を背けている今の貴方にあえてお伝えするなら……………バハン国王の継承権は未だ貴方のままです」

ケビンは動きを止めた。

「俺は死んだのだぞ？あれから何十年経っていると思うているんだ。何故後継者を立てない。父は何をしている」

「ケビン殿。貴方を王にしたいと願っている人間の一人や二人、この世にはいたりするものですよ。貴方の墓標は今でもありません。葬儀も行われませんでした。ちなみに貴方のお父上は貴方がいなくなつてまもなくご逝去されました」

ケビンの死が表向きには公表されなかった埋められた歴史ということとは、あえて本人に言わなくてもいいだろう。それが葬儀が行われなかったもう一つの理由でもある。

「な……………それではどうやって今まで国を支えていたんだ。俺はおるか、……………姉上^{もぬけ}すらない蛇の殻の国などすぐに……」

「そうですね、いくら今の世が大戦のない世でも、王不在の国などいつ攻め入られてもおかしくない。金龍王と呼ばれたクロウド王の時代なら、いくら友好関係があるとはいえ、メンデルスが征服しようと思えば、それはいとも容易なことだった。しかしエレノア様がクロウド様に嘆願なされて、バハン国が陥落しないよう、クロウド様が他国からの侵略を防ぎ、そして今ではフェルダ王がそれを引き継いで定期的に気を配っておられたのです」

それが事実上の友好関係である。

「姉……上……」

「エレノア様はまさに聖母であられた。……貴方によって重酷なことを強いられた辛い記憶しかないあの国のために躊躇うことなく願ひ出る……」

エレノア様もエレナ様も。親子揃ってあの方々の慈愛の大きさには敬服するばかりだ。

「貴方が今の人生を歩むも、今でも王は貴方しかいないと思い続けている者達のいる祖国へ帰るも、それは貴方が決めることです」

「それなら答えは決まっている。俺の生きる場所はこのシヨパーニの地だ」

「そうですか。ならば今の話も、そして貴方の存在も、忘れることにしましょう」

「ああ」

室内に静寂が漂う。窓の外の細い雨音がよく聞こえる。シエンは帰ってこない王子のことで心が穏やかではない。何より王の傍にいたかった。それに残り少ないシヨパーニ国の滞在時間。その間にエレナ王女の搜索。やることがたくさんだ。

シエンはハッと顔を上げた。

羽ばたきの音。

帰ってきた！

「ケビン殿、申し訳ありませんが私はこれで退席させていただきます。服が乾くまでなり、雨が止むまでなり、いつでもお好きな時に勝手にお帰りいただいてかまいません」

急ぎ足で出ようとしたシェンをケビンが呼び止めた。

「いいのか？俺を自由にさせて。眠っている可愛い甥の寝顔を窺いに行くかもしれんぞ」

シェンは足を止めた。

「……貴方は本当に愚かだ。昔も。今も。愛する人の血を引いた子を、貴方は手にかけることができるのですか」

「逆だな。この世で最も憎い男の血を引く者は皆この世から消えてしまえばいい。金龍王も、その子らも皆……！！」

「……失礼します」

閉じられた扉の中で狂ったように笑う声が聞こえたが、シェンもはや耳に入れず足早にその場から立ち去った。

ケビン殿のことは問題ない。隠し部下をつけていることは当然だが、おそらく彼はフェルダ様の元には行かない。

彼にとって、エレノア様のお子など無意味な存在なのだ。

何故このシェンにそんなことが分かるのか。

決まっている。

彼と同じ種類の人間を……あのお方を、私は生まれた時からずっと
見ているのだから

別荘の最上階の一室の扉を開け、室内に足を踏み入れる。

途端に髪をかきあげるような風がシェンを襲い、やや目を細めた。

開け放たれたテラスへ続く窓から雨風が入り込む。外には雨に打た
れて水気をすこぶる含んだ白い羽毛の巨大な鳥が丸まっているのが
見えた。

そして同時に体当たりしてくる小さな体。不覚にも防御体勢を取り
忘れていたため、一歩後ろによるけてしまった。

「ぐあっ！おいシェン！いきなり僕の目の前に現れるなこの木偶の
ぼう！痛つつつ……」

「はいはいすみませんね、ジハイル王子。お帰りなさい」

どこから取り出したのか、シェンはジハイルの体をすっぽりつつむ
厚手のふんわりタオルで包み込む。ジハイルの顔が子供らしくふん
にやりと変わった。何か慌てていたらしいが、温かなタオルが彼を
落ち着かせた。

「ああああ。こんなに濡れて……。温かい湯船も用意してあるので、このまま浴室へ直行しましょうかね」

「その前にどうしても兄上のところへ寄らねばならない」

「王はまだお休みです」

「では起こしてくれ」

「どうしたんですか？」

いつもならば無理ばかりする王の体を気遣って、寧ろ眠り薬さえ飲ませようとする勢いのジハイル王子が。

「とにかく、お会いになるにしても、こんな姿の王子を王に見せたら余計に心配をかけさせてしまいますよ。ですから」

「緊急だと言っている！！」

シエンがふと怪訝に目を細めた時だった。

「私に火急の用か？おかえりジハイル。私は少々汗をかいてしまつてね。広い湯船に独りも寂しいものだ。ジハイル、一緒に沐浴してくれるか？」

「フェルダ王！！」

シェンのすぐ後ろ、開け放たれたままの扉に肩を預けて立っている
フェルダが優しく笑った。

26（後書き）

いつも読んで頂き本当にありがとうございます！

しっかり休息をとってもらったために仕込んだ安眠薬の効力がもう切れてしまったのか！？という言葉が顔に出ている側近のシエンに、フェルダは苦笑した。

「充分休ませてもらったよ。心遣いを感謝する。…私はもう大丈夫だ」

「息荒いです、王」

シエンは急ぎ足でフェルダに歩み寄ると、額を合わせてきた。シエンの額の冷たさが心地よい。

「ほら御覧なさい、発熱してい　　うぐっ！」

シエンの顔が微妙に歪んだ。フェルダから死角になっているシエンの尻をジハイルが容赦なく足蹴りしたのだ。目尻に涙目でシエンが振り返ると、僕と兄上の邪魔をするな、と言わんばかりの睨みを利かせてシエンを威嚇していた。当然フェルダには見えていない。

ため息をついたシエンが仕方ないといった様子で一步退くと、すかさずジハイルがフェルダの元に駆け寄った。フェルダは片膝をついて両手を差し出すと、そこにぴったりとジハイルの肩が収まった。

「ジハイル、こんなに濡れて。さあ、私と浴室へ行こう」

しかしそれにジハイルは応えず、堰^{せき}を切ったように声を上げた。

「兄上！これを……！！」

フェルダの顔前に、手に持っていたものを突きつけた。思わずフェルダも目を丸くする。

それは、小さな花輪だった。

「私のために作ってくれたのか？可愛らしい花だな。いつもありがとう」

受け取ろうとしたフェルダの言葉を遮り、ジハイルが叫ぶ。

「これ！姉上です！！兄上！！姉上の花輪です！！」

「え？」

思わずフェルダはシエンと顔を見合わせた。シエンも不思議そうな顔をしたが、しかし表情は互いに固い。

フェルダは再び弟へ顔を向けた。泣き出しそうに顔を歪めている弟はどこか悔いているようにも見える。それを指し示すように、ジハイルの声は僅かながら震えていた。

「僕はなんて愚かなんだ……っ、姉上が……エレナ姉上がいたのに、僕は……僕は全然気付かずにシーザと眠って……っ！」

ふとフェルダはテラスでまんまるになっている伝令鳥をジハイル越しに見た。この伝令鳥ピッピは幼鳥で、調教されていない野生だというのにジハイルに懐いて「シーザ」と名づけられた鳥だ。幼鳥時は真っ白の羽毛で、大人になると茶色の羽に生え変わる。

今は雪の塊のように真っ白なシーザ。その頭に、異色が乗っていた。
桃色の布。

それがシーザの頭にまるで傘代わりの帽子のように被せられていた。
しかしそれはとても由々しき事態だった。

何故ならピッピは

「兄上、兄上ごめんなさい……っ、僕が起きていれば……っ」

フェルダはハツとジハイルに目を向けた。

「どうやら混乱しているようですね」

シエンがため息をつく。フェルダは小さな弟の涙をそっと拭ってやると、片腕に乗せて立ち上がった。

「まずは入浴だ。それからゆっくりでいい、お前の話したいことを私に聞かせてくれるか、ジハイル」

「兄……上……」

コクン、と頷いてフェルダの首元に顔を埋めてしまったジハイルの背中を優しく撫でて微笑む。

弟ジハイルが自分の寝ている間に早朝からこの辺りを飛び回っていたことは、大凡見当はつく。おおよそジハイルはそのために自ら伝令鳥を率

いてついできた。

目覚めて外が雨だったことは予想外だった。もし昨夜から雨が降り続いていたのならば、決して弟に雨の中へ出すようなことはなかった。何より我が側近シエンがそこところはしっかり管理している。ということは、この雨は途中から降り出した事になる。

雨が頬を打ちつけ、眠っていたのであろう弟は目を覚ました。その間に、何かがあったのだ。

何の変哲も無いごく普通の花輪。

目を睨れば今も色褪せることなく蘇る。姉が自分のために作ってくれた花輪。それをこの頭に乗せると、咲き誇る花も見劣りするほど可憐な笑顔を見せてくれた。

エレナ姉さん

フェルダは目を開けた。浴室へ向かいながら横目でテラスのピッピを窺う。

「フェルダ王、あれは…」

「うむ……」

後ろで深刻に呟いたシエンに、同様の面持ちでフェルダも応える。

ピッピに触れることのできる人間がこの近くに確実にいる。

それも野生のピッピの頭に触れることのできる人物。

自分でさえ言うことを聞かないピッピに頭を垂れさせることができない人間が。

「シェン、あの布を調べておけ」

「あ、無理です。私、食べられちゃいます」

ジハイルがフェルダの肩から覗かせた瞳を弓形にしてほくそ笑んだ。まるで無能だと言わんばかりに見つめてくるジハイルに、シェンはムムっと口を曲げた。当然この小憎らしいやりとりはフェルダの視界に入っていない。

「兄上、僕が調べておきます。……ごめんなさい」

フェルダは眉を上げて軽く口元を上げると、自らの頭をジハイルに傾けてコツンと弟の頭にあてた。

「お前が謝る必要はどこにもないよ」

「兄上……」

ジハイルはフェルダの首に両腕を回してぎゅっと抱きついた。

いつもは小さな弟の方が遥かに高い体温が、今は自分よりずっと冷たかった。

27 (後書き)

アクセス、お気に入り登録、そしていつも読んで頂き本当にありがとうございます！

シエンは抱き上げていたジハイルをそつとベッドへ横たえ、シーツをかけた。

朝早く起きて飛び回った上、雨に打たれて疲れきってしまったのだろつ。ジハイルは入浴から上がると、シエンに服を着せられソファに座ると同時に眠ってしまった。廊下に従卒を置いてシエンは部屋を出た。その隣が先ほどまでいた、テラスに伝令鳥が陣取っている部屋だ。

ノックをして扉を開けて中に入る。王も入浴後は汗で湿った服から新しいシャツに着替えてソファに深く腰を下ろしていた。

肘掛に肘をつき、その手は顔を覆って沈黙している。顔色を窺えばきつととても優れない色をしているだろう。シエンは胸を痛めた。

「フェルダ王、お待たせいたしました」

フェルダの応答はなかった。

そのままジハイル王子のように眠ってくれていれば、この胸の痛みも束の間和らいだだろうに。シエンはおそらく聞いてはいるのだろうフェルダに言った。

「ジハイル王子は隣室で寝かせました。可哀想に、王子には何の罪もありませんが、王子自身はとも自らを悔やんでいるようですね」
フェルダは何も応えない。シエンはそのまま続ける。

「しかし王子はよく気がつきました。まさかあの花輪にそのような意味があったとは」

「シエン、お前は入浴中のジハイルと俺の会話を聞いていたのだろう」

ようやく口を開いてくれた。しかしその声はとても低く、そして悲嘆の色をしている。嘆かわしいが、シエンは平静に振舞った。

「はい。失礼ながら聞かせていただきました」

ジハイル王子が話した内容は信じがたいようで、しかし信用に足る話であった。

王子が持っていたあの花輪。あれは彼が作ったものではなく、エレナ様本人が作られたものだという。

その根拠はなんと、編み方であった。

王子が初めて花輪を作ったときのことを思い出す。

あれはフェルダ王が城を空けて遠征に出向いていた時のことだった。王子の目付け役として残っていた私は、勝手に王の部屋へ入ったジハイルを窘^{たしな}め^めに後を追った。

その部屋の中で、王子はあれを見つけたのだ。

フェルダ王がまだお若き頃、エレナ王女から贈られた花輪を。

春に中庭に咲くセティアラの花は造花としても大変長持ちし、あれから数年立つても朽ちることなく、当時の面影を残し大事に飾られていた。

それをジハイル王子は手にとってずっと見つめておられた。それからほどなくだ。王子が中庭の花で花輪を作るようになったのは。

王子はとても器用だった。子供というのは熱中すると驚くほど飛びぬけた才を発する。

いつしか、いとも簡単に作るようになった花輪を、王子はあるところとか屈託のない気持ちでフェルダ様に贈り始めた。子供は残酷だ。あの花輪を贈られるたびに、フェルダ様は微笑みの奥に悲しみを湛えておられた。どんな気持ちでいつもあの花輪を受け取っていたか考えるほどに胸が痛む。心優しき我が主。

つまり、ジハイル王子はエレナ様の作られた花輪をそっくりそのまま模倣している。編み始めから編み終わりまで。

そして、その花輪は編み終わりの括り方がとても特徴があるらしい。以前ジハイル王子が王城内の女官に花輪を見せた。するとその女官が括り方が普通の一般的な花輪のものと少し違うのだと言った。

それは、ある種のまじないのようなもので、安全などの祈願をする時に作る守り袋の紐括りだと言う。

エレナ様はいつもフェルダ様の身を案じてその花輪を贈っていたのだ。そんな秘められた想いのこもった花輪だったとは。フェルダ王はジハイル王子からそれをどんな気持ちで聞かれただろう。本当にいたたまれないものだ。

そして花畑で眠っている間に膝の上に乗せられていた花輪。それがこのまじないの括り方だった。

しかしそれだけで花輪を置いた主がエレナ様と決め付けられるのかという疑問になる。

そこで決定打になったのが伝令鳥だ。

ピッピの幼鳥シーザは野生で、調教はまったくされていない。つまり、ジハイル王子を除いて触れることのできる人間は限りなく限定される。

動物と思いを通じたり好かれやすい体質にあるのは母方の家系、つまりエレノア様の血を引く家系だ。その中でも特に通じる者はエレノア様、ジハイル王子、そして……エレナ様。フェルダ王はこういった面はあまり継いでいないらしい。私のようにピッピに攻撃されるようなことはないが、触れても抱きついてても何を言っても無反応である。おそらくそういうところはクロウド王の威厳や威圧といったところをフェルダ王が引き継いでしまったため、鳥の王様とも言うべきピッピと張り合うような力タチになり、懐かないのではないかと推測する。

話を戻すが、そのシーザの頭に布を巻きつけることのできる人物。世の中にはおそらくそんな大それたことが出来る人間は少ないながらもゼロではないであろう。

しかし、花輪がある。どちらか一方ならばエレナ様と断定するには決定打が足りなかった。

「フェルダ王。私は……エレナ様だと、確信します」

それでも私は思慮深い人間だと自負している。推測、推定、予測、想定。どれもない。

エレナ様はこの近くにいます。

フェルダは瞑目してため息を吐き、顔を覆っていた手を下ろすとシエンを見つめた。

「シエン」

「はい」

「笑わないで聞いてくれるか」

「はい」

シエンは決して目を反らさず、己の王に向き合った。

王の目から零れ落ちる涙。この世で最も美しい液体。

「体が……心が……震えるんだ……っ。姉さんに会いたいとずっと……ずっと願っていた……っ。だがいつになっても姉さんは現れない……！ 捜しても捜しても見つからない……！ それでも必ず見つけ出すと俺は希望を捨てずに今日まで生きてきた……！」

「はい」

シエンはフェルダの傍で片膝をついた。ぎゅっと手を握り締める。
フェルダの心の慟哭ういきうが痛いほど伝わってくる。

「それがどうだ……っ、もう目と鼻の先にいると思うと途端に恐ろしくてたまらない……！ あんなに会いたいと願いつけていたにも関わらず、俺は今、戦場に立っている時よりも遥かに恐怖を感じている……！」

フェルダの頭をそつと胸に引き寄せる。彼の不安がシエンの体中に伝わった。それが孤独と言う名であることをシエンは知っている。

王はエレナ様を愛した時から孤独が始まった。

誰からも祝福されることのない、果てしなく報われることの無い血の繋がった姉へ孤独に想い続け、やがてその姉を失いまさに孤独となり、彼は孤高の王となった。

今、王の心の慟哭を鎮められるのは私ではない。ジハイル王子ですら敵わない。

彼女しか……エレナ様しかない。

エレナ様。私はすぐに貴女を見つけ出す。

どこにしよう、どんな状態だろうと、どんな想いをお持ちであろうとも、貴女をフェルダ様の元へお連れする。

我が主の不安はこのシエンがすべて取り払う。それが私の使命。

胸の中から伝わっていた震えが消えた。力をなくしたフェルダの手をそつと下ろし、シエンはフェルダを抱き上げてベッドへ寝かせた。フェルダの発熱はさらに高くなっていた。

外はさらに激しさを増した雨が降り続けている。このまま王を放っておいたらこの雨の中を形振り構わずに飛び出して行っただろう。首にかけていた睡眠の香を嗅がせて再び眠らせたのは当然の処置だ。

そして、とテラスに目を向ける。この強い雨をもろともせず飄々と眠っているピッピ。ぶ厚い羽毛がいかなる気候にも対処できるようになっているのが特徴の鳥だが、野生であるが故に、その神経の図太さ……否、頑丈さも調教されたピッピとは比にならない。

心配なのはその頭にある布だ。もしエレナ様のものではあれば、あまり雨にさらさない方がいい。おそらくはこの布の持ち主の匂いはすでにシーザの脳に記憶されてあるだろうが、念のために外してとっておくのがいいだろう。

……しかし、伝令鳥に触ることが出来る人物となると。

「総出で取りにかかるか？」

誰にともなくシエンが言うと、そこかしこの影から「ええ……」と乗り気でない返答が一齐に返ってきた。使えない部下共だ。悔しいが私も今だけはその中の一人に入る。

その時、まんまるになっていたシーザが突如大きく翼を広げた。

「一体どうしたのだ……？」

シェンはテラスへ続く窓辺に近づいてシーザを見つめた。

シーザは一度噴水のような水飛沫を上げて体を振うと、翼をのつたりと羽ばたかせ、雨をもろともせず浮き上がり、隣のテラスへ移った。

隣にはジハイル王子がいる。

まさか！

シェンは駆け出して部屋を出ると隣の部屋へ飛び込んだ。

「ジハイル王子！」

なんてこと！

眠ったフリでこのシェンを欺くとは！

シェンに気が付いたジハイルが慌ててシーザの背中によじ登る。

「ふ、ふふ……ふふふ……そうはさせませんよ……」

不敵な笑みで無意識にそう呟いたシェンは、一瞬でジハイルの元へ移動し、ぐわしっと小さな腰を両手で掴んだ。

「わ！馬鹿！何をする！離せ！」

ピッピが首を天高く伸ばして怪物のようなけたたましい声を上げた。私が近づいたせいだ。

「王子！せっかく冷えた体を温めたばかりなのに、またびしょ濡れになってしまったじゃありませんか！」

強い雨が自然とこちらの出す声を大きくする。ジハイル王子も負け時と声を張り上げた。

「僕に構うな！僕は姉上を連れてくるんだ！」

「無理ですよ！雨は臭いを消します！今のシーザを飛ばしても何の役にも立たない！」

「そんなことはお前が決めることではない！いいからはーなーせー
！！」

シーザがシェンを敵と認識した。強面こわもての顔が大きな口を開けてシェンに勢いよく近づいてきた。それに気付いたジハイルが慌てて叫ぶ。

「わっ、待て、シーザ！こいつはエサじゃない！」

しかし止まらない。ジハイルはギュツと目を瞑った。

その瞬間、鋭い指笛が空を切った。同時に怪物のような鳴き声も止んだ。

そっとジハイルが目を開ける。そこにあつた光景に目を見張った。

シェンはため息をついた。

「……この方法はとっておきなので出来れば一生使いたくはなかつ

たんですけどねえ……」

何故ならその方法を知られれば、王の側近から伝令鳥の調教師に配属されかねないからだ。

シーザの嘴がシェンの頭に触れる寸前の距離で静止していた。

「な……にをしたんだ？」

ジハイルが驚きの表情のまま尋ねた。雨足が弱まった。今なら大声を張り上げなくても充分聞き取れた。

「内緒にしてくださいよ。私、一生王のお傍にいたいんですから」

「シーザが動かないぞ」

「はい、今、止まれの合図を送りましたから」

「……さっきの指笛か？」

「ええまあ。はあ、しかしヒドいです王子。私をエサ扱いだなんて」

せめて敵と言って下さいよ、とぼやきながら、シェンはジハイルの腰を持ち上げシーザから下ろすと部屋の中へ戻った。雨の当たらない部屋がまるで天国のようだ。シェンはジハイルを片手で持ち直すと、再び指笛を吹いた。すると雪像のように固まっていたシーザが何でもないように首を元に戻し、再びまるくなって目を閉じてしまった。

「眠ってしまったぞ……」

まだ驚き醒め止まないジハイルが呟く。

「あ、それはシーザの意思ですよ。元々寝ていたところを王子が呼び起こしたんです」

「結局僕のせいかな」

「違うんですか？」

「やっぱりお前とは気が合わない」

「あ、同感です。気が合いましたね」

「下ろせ」

「下ろしますよ。湯船の中でね」

今度は私と一緒に入浴しましょうねえ、とにんまり笑うと、小さな王子は伝令鳥のような声で大暴れした。

格闘のような入浴から出ると、外は小雨に変わっていた。

28 (後書き)

いつも読んで頂きありがとうございます！

「それでは、只今より、兄上の、兄上による、兄上のための姉上捜索会議を始める！」

「以前も聞きましたね、それ……」

シエンは大きなため息をついた。疲れた。非常に疲れた。理由については申し訳ないが閉口させてもらう。

小さな円卓で始まった会議は、前は総勢三名だったが、今は二名となっている。列席していないのは主役のフェルダ様だ。しかし今王には休息をとっていただいている。

王というのは絶対権限を持っている反面、個人の自由が限りなく無いに等しい。

まして戦で名を上げた王ならば尚更、どこへ行ってもその名は知れ渡っていて、いつでもどこで誰と何をしたかなど、どこで見られているか分かったものではない。

そう、フェルダ様はまさにそういう王の一人だ。

エレナ様がこのショパー二国にいと断定した時点で、雨が降ろうが槍が降ろうがたとえ暗黒の世界になったとしても、我が王は自ら飛び出しただろう。あのお方はそういうお人だ。

しかし、それは彼の性格の話だ。

フェルダ様は王だ。個人で身勝手な行動は決して許されない。

王の責務もある。国民は王を見ている。王が自ら動くのは、戦前に立つ時だ。

フェルダ様はそれを充分承知している。だからエレナ様搜索に全国を駆け回ったのもあくまでその国や地域の来賓として訪れた。とても回りくどいやり方で、実に効率の悪い搜索。

しかしそれが王自らが動ける最低限の方法だった。

王は世界中を駆けずり回った。帰国後の翌日に軍事会議があらうと、王の公務が途切れることなく押し寄せようと、王は限られた僅かな時間があればそれをすべてエレナ様の搜索のためにあてがわれた。

そんな無茶な時間の使い方をしていて体が悲鳴を上げないわけが無い。

フェルダ様のお体は限界を超えていた。酷なようだが、このショパ―二国に滞在できるのは明日までだ。帰国に通常三日かかるが、王の体調を考慮してゆとりを持って四日で帰るとすると、やはり明日が限界だった。帰国後すぐに祖国メンデルスで会議に出席しなければならぬ。

つまり、エレナ様をお迎えに上がるのは明日がタイムリミット。そしてそのカウントダウンはすでにもう始まっているのだ。

だがエレナ様がここ近辺にすることが断定できた以上、搜索は私と私の影の部下がいれば造作もないだろう。あと伝令鳥のシーザもだ。あの鳥が一番の鍵だ。

その間にフェルダ様にはしっかりと休息をとってもらう。そのために昨夜の晩餐会の後は眠ってもらい、一旦目を覚まされた先ほど、もう一度王には眠っていただいた。もう安眠薬を使わなくても良い方向に向かえば良いのだが。

「そのためには無論、僕の役割が要^{かなめ}となってくるわけだ」

「あれ、私、声に出してました？」

「ふん、お前が黙っている時は大抵僕が思っていることを思っているだろう」

「一心同体みたいです」

「以心伝心で譲歩しよう。今は争っている時ではない」

「何故私が王子と争わねばならないのですか…」

「それで、今後の動きについてだが」

子供の体力というものは底知れないものだ。熱中するものがあれば体力の限界を知らない。

しかし、とシエンはふと心の中で親心のように笑った。

王子が本当は疲れているのは知っている。どんなに気を張っていても、体は子供だ。おそらく一度目の入浴の後にソファで目を瞑っていた時は本当に眠ってしまったのだろう。

子供が睡眠欲に勝てるとしたら、それは大事な何かのために他ならない。

王子にとっての大事な何かとは、言わずもがな兄のフェルダ様だ。

敬愛する兄のために小さな体を酷使して頑張っているのだ。

だから私はそんな健気な王子を見守っている。疲れて眠ってしまっても文句などあるはずもない。その時は抱き上げてベッドへお運びしよう。

無理をしてへとへとになって帰ってきたら、甘いミルクをお出ししよう。

何だかんだ言って、結局私はフェルダ様もジハイル王子も大好きなのだ。

「シエン、この重要な会議の時に気味の悪い笑みをこちらに向けてくるな」

「はい、すみません」

素直に謝ったら途端にジハイル王子は口を尖らせて私から目をそらした。

「それで、決行はこの雨が上がり次第、ということでもよろしいでしょうか、王子」

ジハイルは仁王立ちした状態のまま腕を組んで唸った。

「仕方ないな。無駄にシーザを飛ばせてもただ時間の無駄遣いをするだけだ」

「さっき無駄遣いしようとした人がいましたねえ」

「何か言ったか」

間髪入れずジハイルが睨みをきかせてくる。

「いいえ」

シエンは口を斜めにして笑った。窓に顔を向ける。

「ああ、大分雨も止んできましたね。そろそろお昼にしましょう。私も疲れました」

ジハイルが不思議そうに首を傾げる。

「何かあったのか？」

「歳ですの」

「さっさと引退してくれても構わんぞ」

「若い者には負けませんよ」

シエンは笑いながら、心の中ですっかり忘れてしまっていたことを思い出した。疲れたと言ったのはそのことに対してだった。

エレノア様の弟君、ケビン殿とのまさかの邂逅。^{かいこう}

彼が生きていたとは本当に驚きだった。

彼は祖国には戻らず、このショパー二国に骨を埋めるつもりだったと言った。

昔の、自分が知っているこの男は今は第二の人生をしっかりと地に足をつけて歩いていた。

影の部下からの報告で、彼は私が部屋から出た後、この別荘をうつく事も無く、静かに去っていったとのことだった。

もう会うことはないだろう。

彼のことはクラウド様にもエレノア様にも、話すつもりはない。そして私自身も彼を記憶から消去することに決めた。

しかしそれにしても、世界は狭いとはこのことを言うのだろうか。

ケビン殿がいた場所も、エレナ様がいるだろう場所も、ショパー二国のこの近辺だとは。

あまりにも長い年月だ。もしかするとこのお二人がどこかですれ違ったことすら可能性としては考えられる。

シエンは笑った。

そんな安直な想像を浮かべてしまった自分はやはり疲れているのだろう。

ケビン殿にエレナ様のことを話したら何か情報を得られただろうか。

ばかばかしい

シエンは今度こそケビンという男の存在を心の奥底の鍵箱に仕舞い込んだ。

29（後書き）

いつも読んで頂きありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7689r/>

1000人斬りのフェルダ

2011年10月18日20時36分発行